

京都大学フィールド科学教育研究センター

自己点検・評価報告書

平成 19 年 12 月

○フィールド科学教育研究センターの各施設



⑩ 芦生研究林・新緑の溪畔林



⑪ 和歌山研究林・銚子の滝
(清水八景湯川溪谷)



⑫ 北海道研究林(標茶区)・
構内カラマツ並木~冬~



⑬ 北海道研究林(白糠区)・
生態系プロジェクト研究地



⑨ 上賀茂試験地・ラクショウの気根とメタセコイヤ



⑬ 紀伊大島実験所・照葉樹林の樹冠



⑭ 徳山試験地・松皮剥皮木(80年生)



⑥ 舞鶴水産実験所・錦秋碧空の候



⑧ 北白川試験地・北米産見本樹と旧演習林事務室



⑦ 舞鶴水産実験所・ミノカサゴ



⑪ 瀬戸臨海実験所・実験所全景



⑪ 瀬戸臨海実験所・白浜周辺に
生息する多様な海洋生物たち

○教育活動



新入生向け少人数セミナー
「京都大学に木造り校舎を造る－都市と森林の再生－」



新入生向け少人数セミナー「森のつくりだすもの」



新入生向け少人数セミナー「海的环境と生物資源」



新入生向け少人数セミナー「海岸生物の生活史」



海域・陸域統合管理論セミナー



森里海連環学実習・由良川源流域調査



森里海連環学実習・中流域調査



森里海連環学実習・沿岸域調査

○研究活動



WakWak プロジェクト・間伐材漁礁の設置



NaGISA プロジェクト



古座川プロジェクト



森林生態研究プロジェクト

○社会貢献



京都大学総合博物館平成16年度春季企画展



時計台対話集会



芦生公開講座

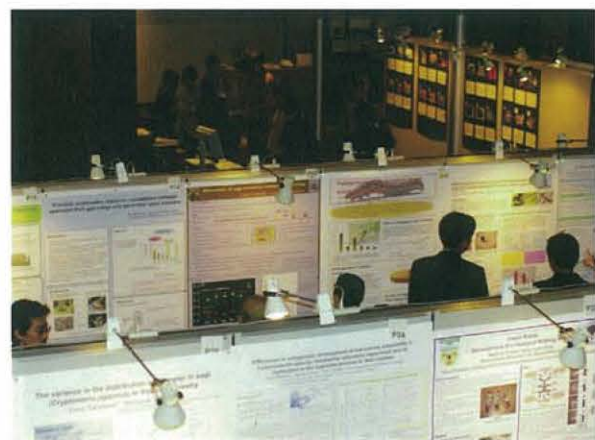


瀬戸臨海実験所・水族館

○国際交流



第6回国際異体類生態学シンポジウム



21世紀 COE 昆虫科学国際シンポジウム・パネルセッション

はじめに

京都大学において、今後の地球環境問題に関する教育と研究を担う3本の柱を構築することが企画され、生態学研究センター・地球環境学堂について、平成15年4月1日に設置されたのがフィールド科学教育研究センターである。その使命は、フィールドに根ざした学問の推進と教育の実践であり、その責務を果たすために理学研究科と農学研究科とにばらばらに所属し、京都のキャンパスから離れた場所に設置されているいわゆる隔地施設が、学部の垣根を取り払って連携し、より広い視点をもった総合的なフィールド科学を創生しようとしている。この自己点検評価書は、創設して初めてのものであり、この設立の理念が達成に向けて進み始めているかどうかを確認することを最大の目的としている。

本センターの最大の特徴は、コンクリートに囲まれたキャンパスでは決して学ぶことのできない、フィールドにおける教育を実践することができる点にある。京都大学に入学してきた学生は、みなペーパーテストで優秀な成績を取めることができるが、机の前以外で学んだ経験がほとんどない者が多い。さらに、実際に経験したことがなくても、バーチャル空間のなかで様々な事を体験しているような錯覚に陥りやすい。これは、ゲーム世代の若者に共通の特徴かもしれない。本センターでは、このような現状を憂慮し、森里海連環学実習・多数のポケゼミなどの全学共通科目や、従来から提供してきた研究林実習・臨海実習など、多数のフィールド実習を開講してきた。今後とも組織名に「教育」と冠する本センターの名に恥じないよう、多数の現場教育を展開していきたいと考えている。本評価書の中で教育の部分は特にページを割いて、その詳細について分析を行った。

本センターの研究の柱は「森里海連環学」である。本センターを構成する施設は、北は北海道（北海道研究林（標茶・白糠））から南は山口県（徳山試験地）まで地理的に広く分布しているだけでなく、森林域（芦生研究林・和歌山研究林）から里域（北白川試験地・上賀茂試験地・紀伊大島実験所）を通して海域（舞鶴水産実験所・瀬戸臨海実験所）までの、生物圏の重要な3要素をすべてカバーしており、この特徴を活かし、各々の要素の専門家が緊密に連携を取り合って、ひとつの要素だけを研究していたのでは決して理解することのできない、各要素の連環の実態を科学的な視点から明らかにしていきたいと考えている。もちろんこのような研究は一朝一夕には進まない。本評価書では、ようやく動き始めた各水系における森里海連環学研究の胎動をまとめた。

学内ばかりに目を向けることなく、本センターでは社会との接点をもつ努力も重ねている。これは、地球環境の問題を解決するためには、社会が変わらねばならないという当然の認識に基づいており、その努力の一環として社会連携教授に畠山重篤氏とC.W.ニコル氏をお迎えし、講義・実習の一部を担当していただいた。環境問題に積極的に取り組まれたすばらしい実績をお持ちのお二人から学生たちが受けるインパクトは、座学では得られない強烈なものである。また他大学の学生・高校生・社会人など、京大生以外にも門戸を広げて同じような体験学習の機会を提供している。特に、全日空およびNPO法人エコロジー・カフェとは、協定を締結した上で協力して市民講座を開講しており、少しずつではあるが、浸透し始めていると思う。

本センター最大の研究成果の社会への還元を目的としたイベントが時計台対話集会である。例年500名近い市民の皆様と時計台記念ホールにて、さまざまな話題をフィールド研のスタッフと一緒に考えてきた。本報告書では、このようなさまざまなフィールド研の取り組みについても、まとめている。

この報告書でまとめた、フィールド科学教育研究センターが将来にわたって継続していこうとしているさまざまな活動は、フィールド科学教育研究センターのスタッフが全員一丸となって実現してきたものである。しかし、自然を理解することは容易ではない。“Nature is always wiser than a man.”といわれるように、われわれができることは自然の叡智を解き明かし、豊かな自然環境を次の世代へ受け渡して行くことができるよう少しでも貢献することである。この自己点検評価書は、我々の活動を問い直し進むべき方向に向かって着実に歩を進めているかどうか見直す、格好の機会となった。その内容を自省をすると、残念ながら十分でない部分もあることが明らかになってきた。今後はこのデータを活用して、フィールド研の活動をさらに充実させていきたいと考えている。皆様方には、今後とも、より一層のご指導とご鞭撻をお願いいたします。

平成19年12月

京都大学フィールド科学教育研究センター長
白山 義久

目次

1	フィールド研の沿革・目的・概要	1
1.1	沿革	1
1.2	目的	1
1.3	概要	1
2	活動の記録	6
2.1	教育活動	6
2.1.1	大学院教育	
2.1.2	学部教育	
2.1.3	新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ）	
2.1.4	リレー講義森里海連環学、海域・陸域統合管理論および森里海連環学実習	
2.1.5	公開臨海実習	
2.1.6	3大学連携シンポジウム	
2.1.7	課題と展望	
2.2	研究活動	11
2.2.1	若狭湾海域・陸域統合プロジェクト（WakWak）	
2.2.2	古座川プロジェクト	
2.2.3	21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」	
2.2.4	NaGISA(Natural Geography In Shore Area)プロジェクト	
2.2.5	森林生態研究プロジェクト	
2.2.6	森林流域系の環境保全機能の解明プロジェクト（環境プロジェクト）	
2.2.7	研究成果の発表（専門誌の出版）	
2.3	社会貢献	17
2.3.1	京都大学総合博物館平成16年度春季企画展 「森と里と海のつながり - 京大フィールド研の挑戦」の開催	
2.3.2	時計台対話集会	
2.3.3	芦生公開講座	
2.3.4	水族館	
2.3.5	MIREC との学術交流協定	
2.3.6	全日空との連携	
2.3.7	エコロジー・カフェとの協定	
2.3.8	その他	
2.4	外部資金	20
2.4.1	科学研究費補助金	
2.4.2	受託研究	
2.4.3	奨学寄付金	
2.4.4	課題と展望	
2.5	国際交流	22
2.5.1	第6回国際異体類生態学シンポジウム	
2.5.2	21世紀COEシンポジウム	
2.5.3	海外フィールド調査	
2.5.4	海外学会発表	

2.5.5 外国人の受け入れ

2.5.6 課題と展望

3	管理と運営	26
3.1	教授会	26
3.2	教員会議	26
3.3	運営委員会	26
3.4	協議員会	27
4	課題と展望	28
5	センター教員による自己点検	37
6	資料	55
6.1	活動の記録（日記）	55
6.2	各施設 利用人数一覧	64
6.3	各施設 学生実習等調べ	65
	(1) センター提供科目等	
	(2) 学内利用	
	(3) 学外利用	
6.4	瀬戸臨海実験所 水族館入場者数	78
6.5	舞鶴水産実験所 船舶運転実績	78
6.6	瀬戸臨海実験所 船舶運転実績	78

1 フィールド研の沿革・目的・概要

1. 1 沿革

京都大学では、1990年代半ばに、21世紀を展望して新たな五つの独立研究科の設置が構想されるとともに、地球的最重要課題の環境問題の解決を目指して、地球環境科学の学問構築や教育研究のあり方を求めて「環境フォーラム」が、開催された。これらの具体化を目的に、平成11年（1999年）6月には将来構想検討委員会の中に地球環境科学研究構想専門委員会が設置され、多面的な検討の結果、2001年4月の生態学研究センターの改組、2002年4月の大学院地球環境学堂の設置に続き、平成15年（2003年）4月にフィールド科学教育研究センターが設置された。

フィールド科学教育研究センターは、理学研究科附属瀬戸臨海実験所（和歌山県白浜町）、農学研究科附属の演習林（北海道・京都府・和歌山県・山口県）、亜熱帯植物実験所（和歌山県串本町）、水産実験所（京都府舞鶴市）の4施設を統合し、全学共同利用施設として発足した。当センターは、京都大学の多くの附置研究所やセンターの中でも、現地（遠隔地）に基盤を置くことと、「教育」を冠に掲げた点で、大変ユニークな施設と位置づけられる。

1. 2 目的

当センターの目的は、以下の三点である。

- (1) 近年における人間活動の加速度的な膨張化と活動域の拡大は、共生系としての地球生物圏に予想をはるかに上回る速度と深刻さで影響を広げており、地域を取り巻く環境を極度に疲弊させている。この問題を打開するためには、環境の変化が具体的に発現する現場において、異なるそれぞれの実態を総合的に捉え、解決策を見出すことを目指す。
- (2) 温帯域は、人間活動が最も過度に集中する気候帯であり、地球環境問題の震源地となつていている。既存の冷寒帯並びに亜熱帯・熱帯域のセンターと連携し、フィールドベースの環境科学研究機構を形成する。
- (3) わが国の骨格的生態系は森林域と沿岸海洋域であり、連環機構の解明を目指し、森里海連環学という新しい学問を構築する。

1. 3 概要

(1) 企画研究推進部門

森－海連環学分野と国際共同研究分野から構成される。センターが共通の理念の下に機能的に統合化され、森－里－海連環学の創出を目指す。さらに、国際的にもオープンな組織へ自己革新するための役割を担う。とくに、来るべき環日本海時代を展望した日・中・韓の国際共同研究や、異質気候帯における比較研究のために東南アジア熱帯域における共同研究の展開を図る。

○森里海連環学分野

森林域、里域および沿岸海洋域を対象として、隣接する生物圏相互の関連に焦点を当てた研究部門間の共同研究を促進する。多様な共同研究を基礎に、森－里－海の連環に関する研究プロジェクトを企画し、全国の関連研究機関との連携の下、新たなフィールド科学の創出と展開を図る。

○国際共同研究分野

東アジアならびに東南アジアを主なフィールドとして、陸域と海域の連環を柱とした地球環境問題に関する国際共同研究を展開し、海外における連携拠点の構築を図る。当面は、世界規模で展開される沿岸域の生物多様性の総合調査（NaGISA・CoML）のリーダーとしての活動を通じて、国際共同研究の基盤を固める。

(2) 森林生物圏部門

本部門では、森林ならびに森林資源科学に関する大学院レベルの多岐にわたるフィールド研究ならびに教育が行われている。具体的には、森林資源情報学の統合的理解とシステム解析、自然環境や生態的構造、社会経済的状况に基づく森林景観の機能的評価と空間ゾーニング技術、持続的森林資源管理技術の体系化、林学的観点からの森林資源上の持続性と生態系としての生産性の向上、が含まれる。

○森林生態保全学分野

森林生態系が示す種・個体（遺伝子）、個体群、群集、集水域、景観といった階層性に注目し、各階層におけ

る多様性とシステムの形成維持メカニズムや多様な森林生物種の生活史の解明を主とした教育研究を行う。また野外操作実験を実施し、森林生態系の保全と生物資源の持続的な再生利用のための手法の提示も目指す。

○森林資源管理学分野

森林が有する環境、生物、文化としての資源の機能を評価し、これに基づく森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術についての実践的な教育研究を行う。特に当面の課題としては、近年、管理圧の低下から荒廃しつつある人工林・二次林の持続的管理手法の確立に向けた研究を行う。

○森林環境情報学分野

持続可能な森林管理に向けて、環境影響評価基準・指標の定量化、GIS/GPSによる森林利用機能区分、LCI/LCAによる環境低負荷型生産技術、森林認証・ラベリング等を中心とした実践的・問題解決型研究を展開する。

(3) 里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、そのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構築のための教育研究を行う。

○里山資源保全学分野

生活圏に接する森林において、人間との相互作用により成立した生態系の特性や機構を明らかにするとともに、多面的なアプローチから、生物多様性および森林の保全、森林と人間との新たな共存に向けて幅広い教育研究を行う。

○里地生態保全学分野

人里と一部に里山と里海を含む、いわゆる里地に分布する攪乱依存性植生ならびに攪乱依存性植物の起源と歴史および生態的特性を明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的利用に関する考察を行う。

○河口域生態学分野

陸域と海域の接点にあたる河口域は、多くの海洋生物の再生産に極めて重要な場であり、生物多様性の宝庫でもある。しかし、一方では人間の生活と生産活動の様々なインパクトが集積する場所でもある。有明海などのモデル的な河口域を対象に、資源生物学的ならびに保全生態学的教育研究を行う。

○里海生態保全学分野

陸域からの影響も含めたごく沿岸域の環境特性を把握し、生息する資源生物の生産生態との関係を解明する。とくに、藻場、砂浜域、干潟域などでの仔稚魚の分布、行動、摂餌、成長、生残等を明らかにし、魚介類の成育場としての里海の役割を定性、定量的に評価する。

○沿岸資源管理学分野

若狭湾西部海域をフィールドとして主要な資源生物の個体群動態を研究し、海洋環境構造や海況変動の影響を明らかにする。さらに、資源生物の分類と生活史・生態特性を調べ、それらの資源変動機構の解明に取り組む。

(4) 基礎海洋生物学部門

本部門では、主に温帯性海産無脊椎動物を材料として用い、分類学・進化生物学・発生生物学・生理生態学・生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更にその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その研究教育活動の内容を拡大している。

○海洋生物系統分類学分野

系統分類学は、生物の多様性を認識する基本であり、1922年の瀬戸臨海実験所の創設以来、連綿と続けて来た分野である。海洋生物の多様性は非常に高く、多くの未知の事柄が残されている。このような多様性の包括的な解明を目指して教育研究を行う。

○海洋生物進化形態学分野

形態観察は、生物の多様性を認識するために必須の作業である。本分野では、最新の装置を用いた精密な比較・機能形態学的研究や、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究と教育を行う。

○海洋生物多様性保全学分野

海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするとともに、畠山実験地における30年以上にわたる長期観察や、地球規模の環境変動を把握するための国際共同研究の中核的役割を果たす。

(5) 森林ステーション

○芦生研究林

1921年に旧知井村の九ヶ字共有林の一部(4,179.7ha)に、教育・研究を目的として、99年間の地上権を設定して設置された。北緯35°18'、東経135°43'、標高355~959mに位置し、年平均気温11.7℃、年降水量2,353mmである。冬季には1~2mの積雪がある。京都市の北約35km、福井・滋賀の両県境に接する京都府の東北部に位置し、由良川の源流域にあたる。面積は4,185.6haで、スギを主体とした人工林250ha(人工林率6%)と天然林からなる。天然林のうち1,800haは伐採跡地に再生した森林で、残りは地上権設定以降人の手が加わっていない原生的なものとなっている。気候区分では日本海型と太平洋型の移行帯に位置し、植生区分では暖温带林と冷温带林の移行帯にもあたるため、植物の種数が多い。天然林の植生は、標高約600mまでは、コナラ、ウラジロガシ、ソヨゴなどの暖温带林構成種が見られる。それ以上の標高域ではブナ、ミズナラを主にした冷温带林構成種が見られ、斜面中腹から尾根周辺には天然生のスギを混じえる。日本海側の多雪地域に特有な種も多い。大規模面積の冷温带天然林としては西日本で屈指であり、森林生態系の長期的な動態把握を行っている。多様性に富んだ森林は、様々な教育・研究に最適なフィールドであり、社会教育の場としても広く利用されている。

○北海道研究林

北海道研究林は標茶区と白糠区からなる。標茶区は1949年に、白糠区は1950年に、いずれも旧陸軍省軍馬補充部用地跡に設置された。標茶区は根釧原野のほぼ中央、釧路湿原の北東端の緩やかな丘陵地に位置する(北緯43°19'、東経144°37'、標高30~149m)。面積は1,446.8haで、人工林率は29%、年平均気温は5.7℃、年降水量は1,157mmである。夏季は海霧による日照不足のため湿潤低温で、冬季は乾燥した北西季節風のため気温が-30℃まで低下して季節凍土が発達するなど、気象条件が厳しい。天然林の植生は針葉樹を欠き、ミズナラ、ヤチダモをはじめとする落葉広葉樹からなる。白糠区は、阿寒山群の南端に位置する(北緯43°01'、東経143°57'、標高64~270m)。面積は880.4ha、人工林率は14%である。年平均気温は、標茶区と比較すると海岸線に近いためにやや高く7.3℃で、年降水量は1,318mmである。天然林はトドマツ、ハルニレ、ミズナラなどからなる針広混交林で、標茶区には分布しない種もみられる。自然環境の異なる両区を用いて、天然林の動態、森林再生技術の開発等の比較試験が進められ、夏季と冬季には樹木識別、森林計測、雪氷調査法等の実習が行われている。

○和歌山研究林

吉野林業地に比較的近い暖温带林と冷温带林の境界域に、研究と実地演習を目的として、1926年に99年間の地上権を設定して設置された。有田川支流の湯川川最上流部に位置し(北緯34°04'、東経135°31')、面積842.0ha、標高455~1,261mにあり、年平均気温は12.3℃、年降水量は2,647mmである。地質は中生層に属し、土壌は比較的肥沃であるが、地形は急峻で、各所に断崖や滝が見られる。天然林は、標高約700~1,000m付近はモミ、ツガが主で一部広葉樹を交えた針広混交林、標高約1,000m以上の稜線に近い部分はブナ、ミズナラ、カエデ類、ヒメシャラなどが優占する落葉広葉樹林である。戦後の拡大造林期に植栽されたスギ、ヒノキを中心に、フィールド研の研究林の中で人工林率が52%と最も高い。モミ・ツガ林の動態研究のほか、急峻かつ多雨な条件下における持続的森林資源管理に関する試験研究が行われている。近年では、地元の小・中・高等学校を対象とした森林・林業・環境に関する社会教育活動にも力を入れている。

(6) 里域ステーション

○上賀茂試験地

1926年に設置され、1949年に現在地(北緯 35° 04'、東経 135° 46'、標高 109~225m)に移転した。面積は 47.0ha で、人工林率は 32%である。年平均気温は 14.6℃、年降水量は 1,582mm である。面積の 60%を占める天然林は、1970 年代以降にマツ枯れでアカマツが激減し、コナラ、ソヨゴなどの広葉樹と林齢 100 年前後のヒノキの混交林へと遷移している。設置当初から、世界各地の植物園、研究所など(現在、約 120 機関)との相互協力のもとに種子交換を行い、多くの外国産樹種の導入育成による樹木園造成を進めてきた。特にマツ属の収集と育成に重点が置かれた。現在は、樹木園および見本林園の再整備を進め、マツ属の成長量や気象の観測など基礎データを蓄積するとともに、二次林の成長量、植生変化についても調査している。本学から北に 5km と交通至便で、森林科学、生物学分野を始め、幅広い分野の試験研究および実習の場として、他大学、他機関からも数多く利用されている。

○徳山試験地

徳山試験地の前身は 1931 年に設置された徳山砂防演習地である。1942 年に砂防演習地の移転の際、徳山試験地として設置され、1966 年に現在地(北緯 34° 04'、東経 131° 50')に移転した。面積は 41.9ha、標高は 102~351m で、比較的急斜面が多い。気候区分は瀬戸内型で、年平均気温は 15.2℃、年降水量は 1,911mm で梅雨期に集中し、早春と夏季の乾燥が著しい。人工林率は 49%で、その 4 割は移転以前に植栽された林齢 70 年以上のヒノキ林である。照葉樹林帯に属するが、面積の 45%を占める二次林にはアカマツと落葉広葉樹が混交する。産地、系統別に植栽されたマツ属の生育比較試験や、マツ属の病虫害に対する抵抗性に関する研究が行われてきた。現在は、文化財建造物の補修用資材として必要とされながらも資源の枯渇が懸念されている桧皮(ひわだ)について、桧皮の生産と、剥皮が幹の成長および材質に及ぼす影響に関する調査が進められている。瀬戸内地域にわずかに残された天然生の照葉樹林の植生動態についての研究も行われている。

○北白川試験地

農学部が創設された翌年の 1924 年に、林学科(現・森林科学科)の苗畑として、本学北部キャンパスの北東部(北緯 35° 02'、東経 135° 47'、標高 60m)に設置された。面積は 1.3ha で、そのうち苗畑が 0.3ha、見本園が 0.7ha を占める。年平均気温は 15.1℃、年降水量は 1,465mm である。亜寒帯から暖温帯下部に至る国内産 250 種と、外国産 170 種(アジア・オセアニア原産 100 種、欧州・北米原産 70 種)、その他栽培品種 80 種の計 500 種が見本樹として植栽されている。国内の植物さく葉標本 3 万 3 千点が標本室に保存されており、また材鑑室には、各研究林および試験地から集められた裸子植物 4 科 20 種、被子植物 34 科 86 種の材鑑標本が収められている。森林科学を始めとする生物系分野の樹木観察などの実習や、苗畑や温室を用いた動植物の試験研究に多く利用されている。

○紀伊大島実験所

紀伊半島南端串本町潮岬の東 1.5km にある紀伊大島中央部の須江地区(北緯 33° 28'、東経 135° 50'、標高約 100m)に位置する。1937 年に大島暖帯植物試験地として設置された後、1967 年に亜熱帯植物実験所と改称された。面積は 11.8ha である。暖流黒潮の影響を強く受け、気候は温暖で年平均気温は 16.9℃、年降水量は 2,500~2,600mm である。所内の自然植生は、スダジイやヤマモモ、ヤブニッケイ、タブノキなどの多種多様な照葉樹とその林縁および林床植物からなる。実験所全体が和歌山県鳥獣保護区に指定され、鳥類や昆虫類も種類が豊富である。また、観賞用ツバキと花ウメ系統を自然樹形で多数保存している。通時プロジェクトとして紀伊大島生物相の史的解明、教官研究として照葉樹林文化圏と黒潮文化圏における資源植物複合の on situ 保全、伝統的管理水田における希少雑草の動態に関する研究を進めている。他研究機関との共同研究のほか、本学院生学生対象の授業やセミナー、地元住民を対象とした観察会や講演会も随時行われている。

(7) 海域ステーション

○舞鶴水産実験所

1972 年、京都市に移転した農学部水産学科の跡地に設置された。面積は 2.0ha、北緯 35° 29'、東経 135° 22' にあり、年平均気温は 14.3℃、年降水量は 1,786mm である。京都大学から北北西 64km に位置する。海の生き物と環境に関する多面的な研究を展開しており、沿岸に暮らす魚類・無脊椎動物の生活史や環境との関わりについての野外研究と飼育実験的研究、ならびに魚類の系統分類学的研究を主に行っている。特に、ヒラメ・マアジなど浅海域を成育場とする魚種や、スズキなどの海と川を行き来する両側回遊性魚種については国内有数の研究拠点である。

日本海側で唯一の大学附置水産実験所であり、国内外の研究者の研究拠点として、さらに理科系教員ならびに他大学学生の実習拠点としても広く利用されており、関連試験研究機関と連携した研究も積極的に進めている。また、地域には大学がないことから社会教育に貢献すべく、市民を対象とした公開講座や見学会を開催している。

○瀬戸臨海実験所

1922年、理学部附属臨海研究所として、紀伊半島西岸の田辺湾口に位置する番所崎桔梗平と呼ばれた場所（北緯 33° 41'、東経 135° 20'）に設置された。敷地 4.1ha、畠島実験地 2.7ha、建物 5,680m² からなる。周辺の気候は温暖で、冬季の平均気温は 7℃ 前後であり、夏季は 27℃ 前後まで上がる。降水量は梅雨時と台風シーズンに特に多い。付近の海域は、黒潮分流の影響を強く受けており、周辺の表面水温は年平均で約 20℃ である。冬季でも 12℃ 以下になることは稀であり、一方で夏季も 29℃ を越えることはほとんどない。表面水の塩分は 31~35psu で、透明度は約 8m、潮位差は 1.4~2.0m に達する。周辺の海岸・海中の多様な景観や、そこに見られる豊富な生物相は、現在も比較的よく保護されており、所員や外来研究者（延べ約 1,500 人・日）による研究、学内外の臨海実習（延べ約 1,500 人・日）などに利用されている。

2 活動の記録

2. 1 教育活動

2. 1. 1 大学院教育

協力講座として農学研究科へ3分野と1流動分野、理学研究科へ1分野が参画して大学院教育を行った(表1)。
また、大学院農学研究科、理学研究科、地球環境学堂へ多数の科目を提供し(表2)、京都大学の大学院教育に対して多大な貢献をしていると評価される。

表1. 大学院研究科への協力講座としての参画(平成18年3月)

農学研究科森林科学専攻	
森林育成学分野	助教授3名、助手1名
森林情報学分野	教授1名、助教授1名、講師2名、助手1名
農学研究科応用生物科学専攻	
海洋生物増殖学(流動分野)	教授1名、助教授1名、助手1名
里海生態保全学	教授1名、助教授1名、助手3名
理学研究科生物科学専攻	
海洋生物学分科	教授1名、助教授1名、講師1名、助手2名

表2. 大学院研究科への提供科目(平成16,17年度)

	講義名	科目番号	対象	開講期	単位
農学研究科					
農学専攻	雑草学専攻実験	I 45	修士1,2回生	通年	10
森林科学専攻	森林情報学特論Ⅰ	Ⅱ 113	修士1,2回生	後期	2
	森林情報学特論Ⅱ	Ⅱ 114	修士1,2回生	後期	2
	森林育成学特論Ⅰ	Ⅱ 115	修士1,2回生	後期	2
	森林育成学特論Ⅱ	Ⅱ 116	修士1,2回生	後期	2
	森林情報学専攻演習	Ⅱ 207	修士1,2回生	通年	8
	森林育成学専攻演習	Ⅱ 208	修士1,2回生	通年	8
	森林情報学専攻実験	Ⅱ 307	修士1,2回生	通年	10
	森林育成学専攻実験	Ⅱ 308	修士1,2回生	通年	10
	海洋生物増殖学特論	Ⅳ 215	修士1,2回生	前期	2
	海洋資源生物学特論	Ⅳ 216	修士1,2回生	後期	2
	海洋資源生物学演習	Ⅳ 307	修士1,2回生	通年	6
	里海生態保全学演習	Ⅳ 317	修士1,2回生	通年	6
	海洋資源生物学専攻実験	Ⅳ 407	修士1,2回生	通年	12
	里海生態保全学専攻実験	Ⅳ 418	修士1,2回生	通年	12
	海洋生態学特論	Ⅳ 225	修士1,2回生	前期集中	2
理学研究科					
生物科学専攻動物学系	動物系統解析特論A	M011	修士1,2回生選択	前期	2
	動物系統解析特論B	M012	修士1,2回生選択	後期	2
	海洋生物学特論	M121	修士1,2回生選択	前期	2
	海洋生物学ゼミナールA	M560	修士1,2回生必修	前期	2
	海洋生物学ゼミナールB	M561	修士1,2回生必修	後期	2
	海洋生物学ゼミナール		博士後期	通年	-
地球環境学堂					
景観生態保全論分野	景観生態保全論	3217	修士1,2回生	前期	1
	里山再生論	3507	修士1,2回生	後期集中	1
	環境マネジメントセミナー	3002	修士1,2回生	前期集中	2
	里域植生保全論	3563	修士,博士	前期集中	2

2. 1. 2 学部教育

平成 15 年度は初年度であったために、新入生向け少人数セミナー（ボケゼミ）および実習 1 科目（森里海連環学実習Ⅰ）以外に、全学共通教育への提供科目はなかったが、16 年度にはボケゼミに加えて、リレー講義 1 科目と実習 3 科目、17 年度にはリレー講義 2 科目、実習 3 科目を提供した。また、全学共通教育、農学部、理学部にも多数の科目の提供と協力を行い（表 3）、教員が 20 数名の小部局であるが、全学共通教育および学部教育に対して多大な貢献を行っている。

表 3. 学部教育への提供・協力科目（平成 17 年度）

	講義名	対象	開講期	単位
全学共通科目				
B 群	森里海連環学—森は海の恋人か?—	（講義） 全回生	後期	2
	海域・陸域統合管理論	（講義） 全回生	後期	2
	森里海連環学実習Ⅰ	（実習） 全回生	前期集中	2
	森里海連環学実習Ⅱ	（実習） 全回生	前期集中	2
	暖地性積雪地域における冬の自然環境	（実習） 全回生	後期集中	1
B 群（少人数セミナー）	有明海にみる生きものたちの危機	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	“森は海の恋人”の故郷に学ぶ	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	京都大学に木造り校舎を作る—都市と森林の再生	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	海の環境と生物資源	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	海岸生物の生活史	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	海洋生物の多様性を探る	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	魚類心理学入門	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	原生的な森林の働き	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	森のつくりだすもの	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	森里海のつながりを清流古座川に見る	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	森林の更新と動態	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	世界の森林、日本の森林、現在・未来!	（ゼミ） 1 回生	前期	2
	節足動物学入門	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
	有機農業の可能性 … 持続可能な農業をめざして	（ゼミ） 1 回生	前期集中	2
以上はフィールド科学教育研究センター提供				
B 群	生物圏の科学—生命・食糧・環境—	（講義） 全回生	後期	2
	英語講義：グローバル化の下での食料と環境	（講義） 全回生	後期	2
	基礎生物学 A	（講義） 1,2 回生	前期	2
A・B 群	自然と文化—農の営みを軸に	（講義） 全回生	前期	2
	地球環境学のすすめ	（講義） 全回生	前期	2
	森林環境学概論	（講義） 1,2 回生	前期	2
以上は他部局提供科目への協力				
農学部				
資源生物科学科	資源生物科学基礎Ⅱ	A104 1 回生	後期	2
	資源生物科学概論Ⅲ	A107 2 回生	後期	2
	動物生理学	A112 2 回生	前期	2
	資源生物科学基礎実験	A117 2 回生	後期	1
	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ	A205 2 回生	前期集中	2
	海洋生物科学技術論と実習Ⅱ	A206 2 回生	前期	2
	海洋生物科学技術論と実習Ⅲ	A207 2 回生	前期	1
	植物調査法と実習	A208 2 回生	前期集中	2
	海洋生物生態学	A224 3 回生	前期	2
	資源生物科学実験及び実験法Ⅰ	A239 3 回生	前期	6
	資源生物科学実験及び実験法Ⅱ	A240 3 回生	後期	6
	海洋生物生理学	A248 3 回生	後期	2

森林科学科	海洋生物資源学演習	A512	4 回生	通年	2
	課題研究	A518	4 回生	通年	10
	森林基礎科学Ⅳ	E106	1 回生	後期	2
	緑地植物学	E125	4 回生	前期	2
	森林育成学	E128	3 回生	後期	2
	森林植物学	E129	3 回生	後期集中	2
	森林管理システム及び応用技術論	E130	3 回生	後期	2
	雪氷学基礎論	E131	3 回生	後期	2
	森林科学実習Ⅳ	E214	2 回生	後期	1
	森林総合実習及び実習法	E221	3 回生	前期	2
	研究林実習Ⅰ	E236	2 回生	後期集中	1
	研究林実習Ⅱ	E237	3 回生	後期	1
	研究林実習Ⅲ	E238	3 回生	後期集中	2
	研究林実習Ⅳ	E239	3 回生	後期集中	2
理学部					
生物科学系	海洋生物学	2705	2 回生	前期	2
	無脊椎動物学	2708	2 回生	後期	2
	臨海実習第 1 部	2733	2 回生	夏期集中	2
	臨海実習第 2 部	3767	3 回生	春期集中	2
	臨海実習第 3 部	3768	3 回生	春期集中	2
	臨海実習第 4 部	3769	3 回生	夏期集中	2
	海洋生物学（課題研究）	5707	卒業研究科目	通年	12
	公開臨海実習（夏期）	－	2 回生以上	夏期集中	2
	公開臨海実習（春期）	－	2 回生以上	春期集中	2

2. 1. 3 新入生向け少人数セミナー（ボケゼミ）

新入生向けの少人数セミナーに部局として積極的に科目を提供した。平成 15 年度以降毎年提供科目数を増やし、17 年度は講師以上の教員（15 名）のほぼ全員がボケゼミを担当し（14 科目）、京都大学全体のボケゼミ科目数の 1 割程度を占めた（表 4）。

表 4. ボケゼミ科目と参加者数

講義名	担当教員（敬称略）	受講者数
平成 15 年度		
森林資源学ゼミナール	竹内、梅本	6 名
照葉樹林の構造と維持ゼミナール	西村	2 名
原生的な森林の利用と管理	中島	2 名
海洋環境と生物資源	山下	10 名
紀伊半島南部の里域生物相調査	白山、久保田、山河、梅本、 宮崎、大和、和田、田名瀬	8 名
平成 16 年度		
お魚好きのための魚類研究入門	田川、中山	6 名
海の環境と沿岸資源生物	山下	6 名
海辺から学ぶフィールド科学	益田	5 名
海洋生物の多様性を探る	白山	17 名
紀伊半島南部の里域生物相調査	白山、久保田、梅本、宮崎、 大和、田名瀬	4 名
原生的な森林の働き	中島	6 名
森林の更新と動態	安藤	1 名
道東根釧地方の自然	竹内、梅本	9 名

氷河期の大陸遺産 - 有明海の不思議な生きものたち	田中	6名
有機農業の可能性・・・持続可能な農業をめざして	西村	8名
平成17年度		
有明海にみる生きものたちの危機	田中	7名
“森は海の恋人”の故郷に学ぶ	田中、竹内	5名
京都大学に木造り校舎を作る - 都市と森林の再生	田中、竹内、柴田ほか	6名
海の世界と生物資源	山下	4名
海岸生物の生活史	久保田	8名
海洋生物の多様性を探る	白山	3名
魚類心理学入門	益田	10名
原生的な森林の働き	中島	8名
森のつくりだすもの	徳地	5名（近畿大3名）
森里海のつながりを清流古座川に見る	梅本	9名
森林の更新と動態	安藤	2名
世界の森林、日本の森林、現在・未来！	芝	4名
節足動物学入門	宮崎	3名
有機農業の可能性・・・持続可能な農業をめざして	西村	8名

2. 1. 4 リレー講義森里海連環学、海域・陸域統合管理論および森里海連環学実習

フィールド科学教育研究センターでは、森から海までのつながりを解明する「森里海連環学」を部局の教育、研究の中核に位置づけ、「森里海連環学」を基盤とした特色のある教育と実習を実施している（表5）。

表5. 全学共通教育に提供するリレー講義科目と実習

講義名	担当教員（敬称略）	受講者数
平成15年度		
森里海連環学実習Ⅰ（A）	山下、西村、中島、上野、梅本、益田	14名
平成16年度		
リレー講義森里海連環学	竹内、柴田、西村、中島、徳地、田中、白山、山下	136名
森里海連環学実習Ⅰ（B）	白山、久保田、徳地、梅本、宮崎、大和、田名瀬	10名
森里海連環学実習Ⅱ	竹内、山下、中山、坂野上	16名（うち北大2名）
平成17年度		
リレー講義森里海連環学	竹内、柴田、西村、中島、徳地、田中、白山、山下	115名
リレー講義海域・陸域統合管理論	白山、竹内、西村	68名
森里海連環学実習Ⅰ（A, B）	白山、山下、芝、久保田、徳地、益田、梅本、宮崎、大和、深見、上野、中西、甲斐	A：12名 B：12名（うち北大8名）
森里海連環学実習Ⅱ	竹内、安藤、中山、甲斐	16名（うち北大9名）

森里海連環学実習は、森林系、里系、海洋系の教員と施設が協力して参加し、実習生が森・里・海のつながりを現場で実際に体験する実習であり、ⅠAはフィールド研芦生研究林・由良川・丹後海（フィールド研舞鶴水産実験所）、ⅠBは北海道大学和歌山研究林・古座川・串本湾（フィールド研紀伊大島実験所および瀬戸臨海実験所）、Ⅱはフィールド研標茶研究林・別寒辺牛川・厚岸湖（北海道大学厚岸臨海実験所）をフィールドとして実施された。平成16年度から始めた森里海連環学実習Ⅱと17年度以降の実習ⅠBには北海道大学の学生も参加し、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターとの共同実施という、大変ユニークな試みを行っている。

また、17年度から開講したリレー講義海域・陸域統合管理論は日本財団の助成を受け、17年度には外部講師を招いて講義と並行して森里海連環学に関するパネルディスカッションとセミナーを開催し合計約250名の学生、

大学院生、教員が参加した（表6）。リレー講義森里海連環学、海域・陸域統合管理論ともに文系の学生が約半数を占めており、文理を融合した統合的な環境管理を考えるという両講義のねらいは十分に達成された。

表6. 森里海連環学、海域・陸域統合管理論合同セミナー実施状況（平成17年度）

日時	講師名	所属	テーマ
10/14	谷内茂雄	総合地球環境学研究所	流域管理からめざす地球環境学
1/13	中田英昭	長崎大学水産学部	沿岸環境の再生に向けて
1/27	松田 治	広島大学（名誉教授）	瀬戸内海の水環境管理と再生
	長坂晶子	北海道林業試験場	森川海と生物のつながり
2/27	室田 武	同志社大学経済学部	生命を支える海陸間の物質循環
	依光良三	高知大学（名誉教授）	深刻化する森・川・海をめぐる課題
3/17	恩田裕一	筑波大学生命環境科学研究科	人工林の荒廃が下流環境に及ぼす影響
	中村太士	北海道大学農学研究科	陸域・水域エコトーンにおける生物生息場形成と生活史戦略
	向井 宏	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター	陸域の利用形態と河川・沿岸環境

2. 1. 5 公開臨海実習

公開臨海実習は、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議に所属する主として理学系の臨海実験所やセンター20施設が、毎年全国の大学の大学生、大学院生を対象に、それぞれの独自の専門分野で、それぞれの好適な時期に、1回の実習につき1週間前後の期間で開講する実習である（1大学が複数回実施可能）。文部科学省の財政的支援を受けており、参加学生には単位互換制度にもとづき、実施大学が1-2単位を与える。瀬戸臨海実験所では1989年度から夏と春の2回実施し、各回5～11大学、7～18名が参加した（表7）。

表7. 公開臨海実習参加大学数と参加学生数

年度		大学数	学生数
平成15年度	夏	8	9
	春	11	18
平成16年度	夏	5	7
	春	6	7
平成17年度	夏	7	11
	春	7	8

多様で恵まれた自然環境に立地する瀬戸臨海実験所周辺に生息する無脊椎動物の多様性の認識を基礎とした「系統分類・生態・進化」について、磯浜や実験所所有の島島での現場観察、船舶（実習研究船ヤンチナⅢ）からの採集・観察、各種の観測機器による海洋観測、実習室での各種装置・機器や顕微鏡などを使用した観察や解析、さらには一般公開している水族館を活用した各種動物群の形態、生態、遺伝子解析、系統分類など多岐にわたる実習を実施している。

参加全大学が一律に実施するアンケート調査によると、瀬戸臨海実験所に対する評価は高い。実施時期（夏季と春季の1回ずつ）、期間（7泊8日ずつ）は適正であり、多岐の内容にわたる実習では、生息環境に関する体験やデータの採取などとあわせ、各動物門の系統分類・生態・進化などに関する基礎的な知見と認識が得られたことが常に記されている。また、他大学の学生・院生との交流の場としての機能も評価されている。

2. 1. 6 3大学連携シンポジウム

京都大学フィールド科学教育研究センターは、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター、琉球大学熱帯生物圏研究センターと共同で、フィールド科学に関する3大学連携シンポジウムを毎年開催している。平成15年度は12月8日に京都大学フィールド研舞鶴水産実験所（京都府舞鶴市）において、「森と里と海と生物」のテーマで開催し、13課題の口頭発表があった。平成16年度は12月4日に琉球大学熱帯生物圏研究センター（沖縄県本部町）において開催され、9題の口頭発表と8題のポスター発表が行われた。平成17年度は7月6～8日に北海道大学北方生物圏フィールド科学センター（名寄市、札幌市）で開催され、5題の口頭発表と20題のポスター発表が行われた。3大学が持つ陸域と海域の生態系間の相互作用という共通の教育研究課題に関して、有益な最

新情報を交換し、また、教員だけでなく大学院生が3大学の間で密に交流することができた。平成17年度以降は3大学連携シンポジウムを全国大学フィールド科学シンポジウムに拡大しており、フィールドサイエンスに関する教育と研究において、重要な役割を果たすフィールド科学ネットワークとして機能することが期待されている。

2. 1. 7 課題と展望

京都大学フィールド科学教育研究センターは、研究林、試験地、臨海実験所、水産実験所などのフィールド施設を有効に利用し、京都大学におけるフィールドを基盤とした教育研究において大きな役割を果たしていると評価できる。今後もこれまでの高い活性を維持するとともに、以下のような展望を持って教育、研究を推進する必要がある。

(1) 国際的な教育研究拠点の形成：国内における森里海連環学の教育と研究の拠点は整備されつつある。森里海連環学に関する教育・研究をさらに推進するためには、とくに我が国では得がたい熱帯環境を有するフィールドが必要であり、東南アジアの大学と密接な連携を図り、熱帯域フィールド拠点の構築をめざすことが重要な課題として残されている。

(2) 海域・陸域の統合的管理に関する教育研究部門の設立：個別に細分化された縦割りの専門教育では、深刻さを増す地球環境問題に対処できる人材を育てることはできない。京大フィールド研では、森里海連環学を核に、経済や法律なども含めた科学分野を広く複合的に把握できる人材を育成するため、森里海連環学教育に特化した専門セクションを構築する意義は大きい。民間からの外部資金などを積極的に導入し、教育研究部門の設立を目指す必要がある。

(3) 独自の大学院の設置：京大フィールド研は独自の大学院を持たない。しかし、大型の教育研究プログラム等では、大学院のない部局は主体的な応募ができないことが多く、特色のある教育研究の推進において、大きな障害となっている。関係する他部局との連携の中から、直接的に大学院生を指導できる新たな研究科の設置を目指す方向性を模索すべきである。

(4) 他大学と連携した実習の強化、実習情報の共有、実習教育技術の改善：すでに北海道大学北方生物圏フィールド科学センターと森里海連環学実習を共同開催しているが、フィールド実習における大学間、部局間の交流をさらに推進すべきである。また、実習において得られた情報を大学間、部局間で共有できる体制の構築は、実習の効率的な運営において大きな意義がある。新たな実習教育技術の導入等に関して大学間や部局間で情報交換を行い、効果的なフィールド教育コンテンツの開発を目指すシステムが求められている。

2. 2 研究活動

2. 2. 1 若狭湾海域・陸域統合プロジェクト (WakWak)

研究期間：2004年～

研究経費の項目：科学研究費補助金等

連携研究機関等：京都大学大学院農学研究科、福井県立大学生物資源学部

2003～2005年度の活動

WakWakは2004年度から開始し現在も進行中の研究プロジェクトである。由良川は京都府の北部を流れる幹線流路延長約146 km、流域面積1,880km²の河川であり、流域は京都府面積の約40%を占めている。また、源流を京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林に発し、河口は舞鶴水産実験所のある舞鶴市に位置する。これらの条件から、森里海連環学を実践する最適なフィールドとして、由良川を中心に若狭湾西部海域に流入する河川の流域構造と河口および沿岸域の生物生産機構について、芦生研究林と舞鶴水産実験所が共同で研究を進めている。研究経費としては、科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「エコフィジオロジーモデルによるヒラメ稚魚育成場機能の南北間比較」(代表者山下洋、2003～2005)、萌芽研究「樹木を直接海へ-森と海の生態系連環機構解明のための基礎研究-」(代表者田中克、2004～2006年度)がある。WakWakには、フィールド科学教育研究センターの他、京都大学農学研究科、福井県立大学生物資源学部の教員と大学院生も参加している。

2005年度までに次のような課題で研究を行った。(1) 丹後海におけるヒラメ稚魚の生産構造のモデル化、(2) 由

良川河口域における底生動物の食物網解析、(3) 由良川河口域におけるミズクラゲの生産構造に関する研究、(4) 間伐材魚礁の効果とそのメカニズムに関する研究、(5) 伊佐津川における両側回遊性エビ類の生活史の解明、(6) 若狭湾に流入する 5 河川（野田川、伊佐津川、南川、北川、耳川）の下流、河口域における生物生産構造の比較研究、(7) 若狭湾に流入する 3 河川（野田川、伊佐津川、耳川）の水質と底生微細藻類の種組成比較。

2006 年度以降は、基盤研究 (B) (一般)「沿海岸域における陸域起源有機物の挙動と資源生物生産に対する役割の解明」(代表者山下洋、2006-2008) が採択されており、由良川河口・沿岸域における生物生産に対する、陸域および海洋域を起源とする有機物の貢献とそのメカニズムについて研究を展開する予定である。

2. 2. 2 古座川プロジェクト

研究期間：2004 年度～

研究経費：運営交付金等

連携研究機関等：古座川流域協議会ほか

古座川の概要と現状

古座川は、本州中部の紀伊半島南部に鎮座する霊峰、大塔山（標高 1,121m）を源流に持ち、緩やかに太平洋へ注ぎ込む、全長が約 56km の清流である。小川（こがわ）、佐本川など、7 本以上のきわめて清浄な支流を持つ。古来より熊野と呼ばれている地域の南半分近くを古座川は集水域とする。流域は鬱蒼とした照葉樹林帯に覆われ、伝統的な文化構成要素が今なお息づいている。最近、熊野地方の紀伊山地と霊場が「世界遺産」に登録されたが、古座川流域および暖流黒潮とともに古座川河川水の影響を強く受ける串本湾はそうした風土的基盤の一つである。

昭和 31 年(1956 年)、古座川本流中流部に治水と発電を主な目的とした七川（しちかわ）ダムが完成、供用された。ところが、発電のための水位調節可能幅が狭小な上に、日本一の多雨地帯に近く、台風や集中豪雨に見舞われるため、ダム施設そのものを洪水から守るべく、放流または緊急放流を実施してきた。この放流処置の結果、ダムの下流、特に河口域から串本湾に広がる里海の生態系に甚大な影響を及ぼすことになった。流域および沿岸住民からは、ダム設置やダム放流とそれに伴う水質の変容が、近年見られる魚貝類や青海苔の漁獲量の減少、ひいては流域全体の繋がりや「へたり」と関連しているのではないかと噂されて来た。

古座川プロジェクトの目的と意義

2004 年から着手した「古座川プロジェクト」の第 1 の目的は、この古座川水系を中心に据え、森林生態系と沿岸海洋生態系の密接な関連を、里域からの影響を考慮しつつ明らかにすることにある。また、本プロジェクトから得られた研究調査成果を地域住民に還元し、社会連携しながら清浄・適正な古座川と串本湾を取り戻すことが第 2 の目的である。こうした背景のもと、本プロジェクトから得られる共生モデルが国際的に認知され評価されるように最善の努力を注ぎたいと考えている。

フィールド研が目指す森里海連環学の創生を、フィールドに軸足を置きながら、理解されやすい形で実行するためには、対象とする自然域と里域が包含する森林、川、里、海が程よい大きさであることが望まれる。また、対象里域がもつ文化的基盤の同質性も重要である。この点で、流域面積が約 300km² の古座川水系は至適である。さらに、古座川および串本湾域とその近くには、フィールド研が擁する紀伊大島実験所や白浜瀬戸臨海実験所だけでなく、北海道大学和歌山研究林が位置し、長期にわたる総合的研究調査にも好適である。住民感情もすこぶる良好である。

古座川プロジェクトの総合的展開

このプロジェクトは、単なる研究プロジェクトではなく、森里海連環学の理念を実現するモデルとして、森里海連環学の将来を担う若手研究者の養成、全学共通教育フィールド、小中高フィールド教育の場、社会人生涯教育の場などとしても整備を進めるとともに、古座川町ならびに和歌山県との多様な地域連携を進めるモデルケースにもなるなど、総合的な展開が期待される。例えば、京都大学の全学共通教育である森里海連環学講義、同実習 B やポケットセミナー「清流古座川に森と里と海のつながりを見る」のほか、古座川シンポジウムや講演会など多様な取り組みを進めている。

古座川プロジェクトの展開状況

2004 年度からフィールド研が創始した「古座川プロジェクト」を支援すべく、2005 年度から古座川シンポジ

ウム（年2回）ならびに古座川合同調査（下記項目参照）が行われている。また、2005年度における古座川流域協議会設立準備会を経て2006年度からは古座川流域および串本湾岸域に関連する県、地方自治体、各種団体を統合した古座川流域協議会を発足させ、総会ならびに幹事会を通して古座川プロジェクトは地域と密接な連携を取りながら、各種検討会の開催、現地共同調査を実施することにした。いずれの活動も地域やマスコミの注目を引き、全国紙や地域紙、NHKや民放、地域ケーブルTV、紀伊大島実験所HPなどで逐次紹介されている。

「古座川プロジェクト」と「古座川合同調査」は、古座川流域ならびに串本湾岸域の方々、関係機関その他各位、手弁当で参加していただいていた調査メンバー各位のご援助の中、森里海環環学的視座の元、古座川の清流化、関係地域の水相、生物相、文化相の適正化を目指し、少なくとも50年間継続する予定である。

第1回合同調査 2005年7月

合同調査記事

古座川魚類相予備調査報告（2005年7月16～17日）・・・原田慈雄・三輪一翔

古座川流域キノコ相予備調査報告（2005年7月16～17日）・・・大槻国彦・梅本信也

古座川文化圏予備調査報告（2005年7月16日）・・・梅本信也

古座川エビ類予備調査報告（2005年7月16～17日）・・・梅本信也・大和茂之

第2回合同調査 2005年9月

合同調査記事

プランクトン相（2005年9月17日）・・・河村真理子・柴田敏治

魚類相調査（2005年9月17～19日）・・・原田慈雄・渡邊薫・三輪一翔

魚類班（2005年9月17～19日）・・・三輪一翔

古座川プロジェクト・第2回合同調査（2005年9月17～19日）報告書・・・阪口翔太

ダム建設とその後の植物相変容・・・道下雄大・坂口翔太・梅本信也

第3回古座川合同調査 2005年11月

合同調査記事

古座川水系の魚族：第3回調査・・・原田慈雄・三輪一翔

七川ダム湖の鉛直プロファイリング・・・柴田敏治・河村真理子

11月期・七川ダム湖のプランクトン・・・河村真理子・柴田敏治

古座川減流域における高カルシウム濃度水の起源・・・宮下奈緒子・田村茂樹・梅本信也

古座川流域におけるヨシ属里域集団の多様性解析・・・梅本信也・村井みゆき

古座川流域におけるキノコ相調査・・・大槻国彦

第4回古座川合同調査報告 2006年2月

合同調査記事

古座川河口域および近傍の碎波帯に出現する仔稚魚・・・三輪一翔

紀伊半島南西海岸域に分布する7つの島々で観察した大型担子菌類・・・種坂英次

庚申信仰と森里海連環・・・梅本信也

古座川魚類相調査・・・原田慈雄ら

古座川流域キノコ相・・・大槻国彦

古座川流域の地質・・・田村茂樹

2. 2. 3 21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」

研究期間：2004年度～2008年度

研究経費名：COE研究拠点形成等補助金

平成16年度、149,000千円、平成17年度、129,000千円

研究組織：拠点リーダー：藤崎憲治（京都大学大学院農学研究科）

事業推進担当者所属機関：農学研究科、フィールド科学教育研究センター

プログラムの内容

21 世紀 COE プログラムとは、我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、文部科学省が重点的な支援を行う事業のことで、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的とし、平成 14 年度から実施された。本拠点は平成 16 年度に「革新的な学術分野」で採択された。

地球上の動物の中で最大群を成す昆虫類は、4 億年という長大な進化史を通して、きわめて多様な形態と機能（生態）を培ってきたが、それは言わば生き延びるための“智慧”の結晶のようなものである。その智慧に学び、それを食料・環境問題など地球的課題の解決に資する教育・研究の拠点を創ろうとするのが、本プログラムの目的である。

2004 ～ 2005 年度の活動

2004 年度

○国際研究集会のための英会話教室の開催、1 月～3 月、大学院博士課程在学学生・博士課程進学予定者・ポスドク対象、参加者 51 名

○第 1 回 COE 昆虫科学国際シンポジウム "Development and Metamorphosis"、3 月 2～3 日、京大会館、参加者 150 名、学生による国際シンポジウムポスターセッションの運営および発表

○第 1 回～第 6 回 COE 昆虫科学セミナーの開催

2005 年度

○第 1 回昆虫 COE フィールド教育プログラム、7 月 9～10 日、芦生研究林、参加者 28 名

○大学院生による昆虫科学とフィールド研究シンポジウム「秋の京都で語り合おう in 上賀茂試験地」（第 2 回昆虫 COE フィールド教育プログラム）、9 月 12～14 日、上賀茂試験地、参加者 128 名（教員 22、院生 90、学生他 16）

○「古座川塾－フィールドから未来型食料環境学を考える－」（第 3 回昆虫 COE フィールド教育プログラム）、11 月 18～21 日、紀伊大島実験所・瀬戸臨海実験所、参加者 16 名

○国際研究集会のための英会話教室の開催、平成 17 年 5 月～8 月、大学院博士課程在学学生、博士課程進学予定者、ポスドク対象、参加者 47 名

○第 2 回 COE 昆虫科学国際シンポジウム "Innovative Food and Environmental Studies Pioneered by Entomomimetic Sciences"、10 月 31～11 月 2 日、芝蘭会館（京都）、参加者 100 名超

○第 7 回～第 12 回 COE 昆虫科学セミナーの開催

○COESS（COE Student Seminar：学生セミナー）の開催、第 1 回～第 4 回

2. 2. 4 NaGISA (Natural Geography In Shore Area) プロジェクト

研究期間：2000～2010 年（予定）

研究経費の項目：寄付金（スローン財団：アラスカ大学フェアバンクス校、日本財団、神戸国際観光コンベンション協会、中内力コンベンション振興財団）など

連携研究機関等：国立環境研、アラスカ大学フェアバンクス校、サイモンボリバー大学、ピサ大学、インドネシア科学院海洋研究所、ブーケット海洋生物学センター、ベトナム海洋生態学研究所、フィリピン大学バサイヤス校、マレーシア科学大学

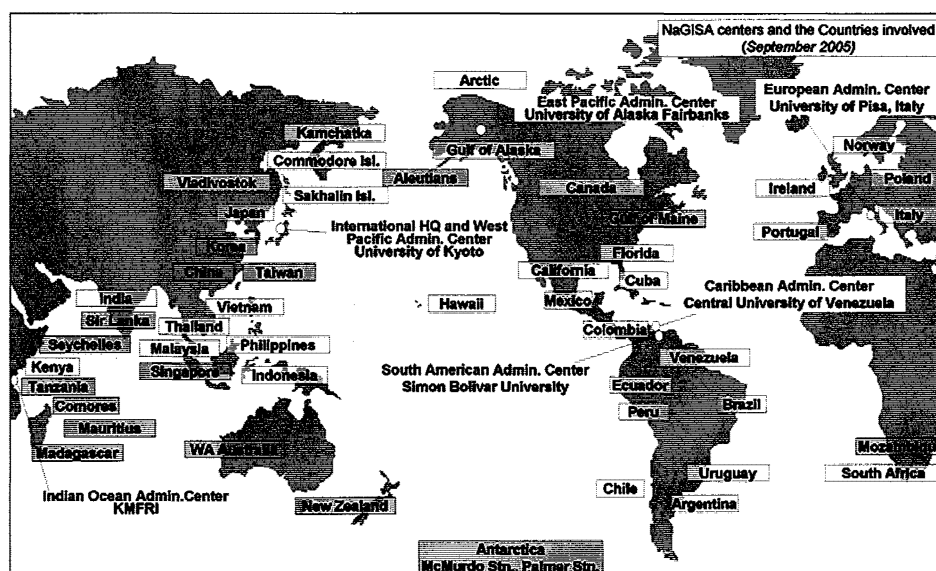
URL:<http://www.nagisa.coml.org/>

2003 ～ 2005 年度の活動

NaGISA (Natural Geography In Shore Area) プロジェクトは、世界中に生息する海洋生物の多様性、分布、個体数を評価し解明するために企画された科学研究プログラムである海洋生物のセンサス (Census of Marine Life, CoML, <http://www.coml.org/>) プロジェクトの中のひとつのフィールドプロジェクトである。白山が研究主任を務め、瀬戸臨海実験所を本部として北米・南米・東南アジアなどを中心に、すでに 20 カ国以上が参加している国際プロジェクトでもある。

このフィールドプロジェクトは、沿岸生物の多様性の地理的パターンを地球規模で明らかにすることを目指しており、すべての参加者が統一された方法で海洋生物を採集・分析し、そのデータを持ち寄って地域間比較をする。2010 年までに、全世界にわたるデータを集積し、今世紀初頭での世界の沿岸生態系の全体像を明らかにすると共に、今後心配される地球環境の変化に伴う海洋生態系の変化をモニターするための基礎資料を提供しようとしている。

2003～2005年度には、本プロジェクトに参加する研究者の組織づくりと、予備的なサンプリングを各国において実施した。これらのサンプルの分析とその結果の相互検討のために、2006年には、神戸で国際会議を開催すべく、準備を進めている。この国際会議での研究発表は論文集として、2007年上半期に瀬戸臨海実験所の出版する学術雑誌（Publications of the Seto Marine Biological Laboratory）から出版する予定である。



NaGISAに参加している各国と、各地域に設置した地域センターの場所

2. 2. 5 森林生態研究プロジェクト

研究期間：2003年度～2007年度

研究経費の項目：運営交付金、委任経理金（阪本奨学会、（財）自然環境研究センター）

連携研究機関：なし

2003～2005年度の活動

本研究プロジェクトでは、フィールド研所属の研究林・試験地の自然林における樹木の生態や森林の動態や維持機構の解明を目的に、大規模な調査区の設定による長期的なモニタリングを実施してきている。またデータベース化によって、将来の研究・教育・管理などに資することも目的としている。課題としては、「温帯域の森林生態系の解明と保全管理法の開発」という大課題の下、中課題3題を掲げ、その内の2題（「森林の動態と多様性維持機構の解明」、「森林生物種の生活史と相互作用の解明」）について研究を進めてきている。具体的には、北海道研究林・標茶、同・白糠、芦生研究林、和歌山研究林、上賀茂試験地、徳山試験地の6施設の自然林内に大・中サイズのプロットを設け、胸高直径5cm以上の木本植物を対象とした毎木調査を行った。また各プロットの一部域ないしは全域に種子トラップ（開口部面積0.5㎡）を多数設置する一方で、それぞれの種子トラップに隣接して実生追跡枠（面積1㎡）を設け、落下種子の回収・選別を行うとともに実生の発生・死亡を追跡した。これまでの調査から、各々の樹種の地形依存的な出現の有無、種子の豊凶パターン、実生の消長パターンといった生態的特性を明らかにしてきている。なお、各研究林・試験地における調査区の概況は、下表の通りである。

	北海道研究林		芦生研究林	和歌山研究林	上賀茂試験地	徳山試験地
	標茶	白糠				
自然林タイプ	北方落葉広葉樹林	北方針広混交林	冷温帯針広混交林	モミ・ツガ林	ヒノキ林	暖温帯常緑広葉樹林
プロットサイズ (ha)	4.08	3.6	14.0	4.0	0.64	0.56
種子トラップ数	221	218	281	213	145	128
実生枠数	221	218	281	213	145	128

2. 2. 6 森林流域系の環境保全機能の解明プロジェクト（環境プロジェクト）

研究期間：2003～2007年

研究経費の項目：科学研究費補助金、総合地球環境学研究所研究プロジェクト（5-2プロジェクト）、河川財団助成、環境省モニタリングサイト1000事業

連携研究機関等：総合地球環境学研究所

2003～2005年度の活動

森林生態系のもつ様々な機能を定量的に評価するための基礎データを収集することを目的とし、研究林内のわが国を代表する植生タイプをもつ森林生態系において、降水および渓流水による物質の動態をモニタリングした。

生物地球科学的アプローチによる森林生態系機能の把握のためには、森林を集水域単位で捉え物質収支の把握を行うことが望ましい。そのため、和歌山研究林に科研（徳地）ならびに総合地球環境学研究所との共同研究により新たな3つの量水堰が設置され、既存の芦生研究林の量水堰とあわせ合計4量水堰において継続的な観測が行われている。さらに、生態系プロジェクトにおいて対象としている流域の土壌特性などの調査も行われ、一部はAcid Rain 2005においてポスター発表（Tokuchi 2005）がなされた。また、和歌山研究林では調査地を環境省のモニタリングサイト1000へ登録することにより、研究が長期的に外部資金によって行われていることも評価すべきであろう。生物地球科学的データベースの構築なしには生態系機能の解明は不可能である。データベースが十分であるとはいいがたいが、一応の成果を挙げているといえるだろう。

2. 2. 7 研究成果の発表（専門誌の出版）

フィールド科学教育研究センターでは、専門誌として、森林系の研究成果を発表する森林研究（和英文誌）と海洋系のものを発表する英文誌“Publication of Seto Marine Biological Laboratory”の2誌を出版している。前者は森林ステーションが、後者は瀬戸臨海実験所が編集を担当している。

自己点検評価期間中には次の論文が発表された。

森林研究

Vol. 75 (2003)

Authors	Title	Pages
森下和路・崋元道徳	林冠部の違いに対する生育形の異なる低木3種（クロモジ、タンナサワフタギ、ツリガネツツジ）の地上部形態の応答	1-9
嶋田俊平・竹内典之	針広混交林化したヒノキ不成績造林地の成長解析－京都府美山町の24年生ヒノキ人工林を事例として－	11-17
Ris Hadi Purwanto, Kanji Ito and Seiichi Oohata	Yields of cash crops in a planted teak forest under agroforestry management in Madiun, East Java, Indonesia	19-25
Yasunori Mukogawa, Tadashi Nobuchi and Mohd. Hamami Sahri	Tension wood anatomy in artificially induced leaning stems of some tropical trees	27-33
牧野留美・上野友紀子・藤井義久・奥村正悟	有限要素法を用いた木質床壁小型模型の振動モード解析および衝撃応答解析	35-43

Vol. 76 (2005)

Authors	Title	Pages
Ris Hadi Purwanto and Masami Shiba	Allometric equations for estimating above ground biomass and leaf area of planted teak (<i>Tectona grandis</i>) forests under agroforestry management in East Java, Indonesia	1-8
三好悠・野淵正	徳島県木頭地方における長伐期施業スギの成長と材質	9-20
安田禎仁・増田稔	画像のもつ特徴と与える印象の関係の一考察	21-31
Tadashi Nobuchi, Yuuko Higashikawa and Togal L. Tobing	Some characteristics of growth ring structure and heartwood of teak (<i>Tectona grandis</i>) -Comparison of two plantation sites, central and west Java, Indonesia-	33-38

Authors	Title	Pages
Chavtur, V. G. & Stovbun, G. G.	Revision of pelagic ostracods of the subfamily Archiconchoecinae	139-219
Genzano, G. N. & Kubota, S.	Synchronous mass release of mature medusae from the hydroid <i>Halocordyle disticha</i> (Hydrozoa, Halocorydylidae) and experimental induction of different timing by light changes	221-228
Hiwatari, T.	Taxonomic studies on <i>Hyale</i> (Crustacea, Amphipoda, Hyalidae) from the coast of Japan and adjacent waters	229-262

Author	Title	Pages
Ariyama, H.	Nine species of the genus <i>Aoroides</i> (Crustacea: Amphopoda: Aoridae) from Osaka Bay, central Japan	1-66
Miyamoto, H. & Morino, H.	Taxonomic studies on the Talitridae (Crustacea: Amphopoda) from Taiwan. II. The genus <i>Platorchestia</i>	67-96
Hashizume, K.	Comparative morphology of the thelycum of the planktonic shrimp genus <i>Lucifer</i> (Crustacea: Decapoda: Luciferidae) and its significance in taxonomy	97-105
Miyazaki, K.	On the position of genital pores in a sea spider, <i>Austrodecus tubiferum</i> (Pycnogonida: Austrodecidae)	107-111
Honma, Y., Ushiki, Hashizume, H., Takeda, M., Misaki, H., Inagi, A. & Ishibashi, T.	Histological observations on the ovaries of two species of taeniosomatous fishes (Lampridiformes) caught in waters adjacent to the Japanese main island	113-120

Author	Title	Pages
Kawamura, M. and Kubota, S.	Two species of <i>Koellikerina</i> Medusae (Cnidaria, Hydrozoa, Anthomedusa) from Japan	121-130
Brinckmann-Voss, A., Arai, M. N. and Nagasawa, K.	<i>Leukartiara acuta</i> (Hydrozoa, Anthoathecatae, Pandeidae), a new species from the Pacific	131-139
Yamaoka, T.	On fourteen monostiliferous Hoplonemertean from the Izu Peninsula, Middle Japan	141-158
Adrianov, A., Malakhov, V. and Mayorova, A.	Microscopic anatomy of the Tentacles of <i>Thysanocardia nigra</i> Ikeda, 1904 (Sipuncula) from the Sea of Japan	159-169
Kobayashi, T. and Ishimaru, S.	A new species of <i>Moolapheonoides</i> (Crustacea: Amphipoda) from Sagami Bay, Japan	171-177
Budnikova, L. L.	Two new species of <i>Psammonyx</i> and identity of the genus <i>Wecomodon</i> (Amphipoda, Gammaridae)	179-197
Honma, Y., Ushiki, T., Takeda, M. and Kubota, S.	Histological studies on some organs of two male deep-sea fishes, <i>Trachipterus ishikawae</i> , caught on the beach of Shirahama, Wakayama prefecture, Pacific coast of Japan	199-204

2. 3 社会貢献

フィールド科学教育研究センター（フィールド研）は、“森と里と海のつながり”をキーワードに新たな統合学問領域として「森里海連環学」の創生を目指して、平成15年4月に設立された。この新しい学問領域は、森と里と海の自然科学的ならびに文化的なつながりの解明とともにわが国の豊かな自然の再生にとって不可欠な“つながり”や“めぐり”の新たな価値観の創生をも目指している。このような目標を達成するためには、基礎的な研究を展開するとともに、教育ならびに社会・地域連携事業を通してこのような理念の共有化を大きく広げることが不可欠である。フィールド研では、「京都大学の社会に開かれた窓」として、また、フィールド研の理念共有化の拡大機会として、設立以来様々な社会・地域連携事業を行ってきた。

2. 3. 1 京都大学総合博物館平成16年度春季企画展「森と里と海のつながりー京大フィールド研の挑戦」の開催

フィールド研の理念やこれまでの研究業績を広く市民や中・高・大学生に知ってもらうことを目的に、平成16年6月1日～8月29日に京都大学総合博物館平成16年度春季企画展「森と里と海のつながりー京大フィールド

研の挑戦」が開催された。少しでも多くの市民や中・高・大学生に見てもらうことが重要と考え、“見学者1万人”を目標に、広報活動とともに、土・日曜日を中心にセンター教職員による公開講座やレクチャー＆ガイド、夏休み学習活動等を展開した。最終的な見学者は、当初の努力目標としていた1万人を大きく越え、11,786人となった。フィールド研教職員の協力のもと総力を挙げて取り組んだ本企画展は、「森と里と海のつながり」の重要性を対外的にアピールする上で極めて有意義であった。京都大学総合博物館には本企画展開催の機会を与えていただき、また、開催にあたっては学内外の多くの人々から多大なご支援を頂いた。これらの厚意に応えるためにも、一定程度の研究成果を蓄積できた段階で再度の企画展を開催する必要があるであろう。

- 6月1日 内覧会：尾池総長はじめ関係者約100名の参加を得て記者発表・開会式
- 6月2日 開館
- 6月5日 レクチャー＆ガイド「日本人と森」
- 6月12日 公開講座「日本の森林は今」
- 6月19日 公開講座「海の中の弱肉強食」
- 6月26日 公開講座「宝の海から」
- 7月3日 公開講座「日本海文化と黒潮文化」
- 7月10日 レクチャー＆ガイド「森林生態系の仕組みー水土保持機能について」
- 7月17日 時計台対話集会「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」
- 7月24日 時計台対話集会「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」
- 7月31日 レクチャー＆ガイド「魚の赤ちゃんの大冒険」
- 8月7日 レクチャー＆ガイド「森からの宅急便」
- 8月14日 レクチャー＆ガイド「若狭湾の水中散歩」
- 8月21日 レクチャー＆ガイド「無用の用“自然？環境？森の働き？”」
- 8月25日 夏休み学習教室「丸太を切ってコースターを作ろう」
- 8月25日～29日 夏休み学習教室「森と里と海のつながり」ガイドツアー
- 9月1日 図録「森と里と海のつながり 京大フィールド研の挑戦」発行

2. 3. 2 時計台対話集会

第1回時計台対話集会を京大総合博物館平成16年度春季企画展「森と里と海のつながりー京大フィールド研の挑戦ー」と連携して、「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」をタイトルとして京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて平成16年7月17日と24日の両日にわたって開催した。両日とも会場はほぼ満席で、参加者は計1,034名を数えた。参加者の年齢層は50代と60代を中心に10代から80代と幅広く、大半は学外からの参加者であった。両日ともに会場からの活発な質問や意見表明があり、非常に高い率で回収されたアンケートにも多くの共感・期待・意見などが寄せられた。

第2回時計台対話集会「森と川と海の対話ー安心・安全な社会を求めて」は平成17年12月18日に開催した。京大フィールド研は、森と川と海のつながりに人と自然の共存原理を求める新しい統合科学「森里海連環学」を創生し、安心・安全で持続的発展が可能な社会の再構築に寄与することを目標としている。安心・安全な社会の再構築は現代社会の大きな関心事であり、寒くて足元の悪い日であったにも関わらず参加者は350名にも及んだ。次世代を担う高校生・大学生・大学院生の参加者も多く、若い人々からの発言も活発で、実りの多い対話集会であった。

時計台対話集会は、平成18年に第3回を開催しさらに継続する予定である。フィールド研の社会連携事業の核として今後も継続していくことが重要であろう。

2. 3. 3 芦生公開講座

第13回芦生公開講座「森のしくみと働き」（平成15年7月29～31日）、第14回芦生公開講座「森のしくみとその役割ー森とくらす」（平成16年7月29～31日）、第15回芦生公開講座「森のしくみとその役割ー森にくらして」（平成17年7月28～30日）を開催した。この公開講座は、森林に対する市民の関心が高まり始めた平成3年（1991年）に、市民と森の架け橋として、市民にできる限り正確な森林の現状や問題点を伝えることを目的として始められたものである。フィールド研への移行後は、フィールド研の基本理念を伝えることをも目的に付け加えて実施している。本講座経験者が、他の公開講座、時計台対話集会、公開シンポジウムに参加し、「森里海連環学」の理解者、支援者へと移行していくこともあり、今後とも本公開講座を開講する意義は大きいと考

える。

2. 3. 4 水族館

瀬戸臨海実験所に併設されている水族館は、昭和4年に昭和天皇が本所を訪問され、その1年後の昭和5年(1930)6月1日に昭和天皇行幸1周年を記念し、観覧設備を加えて水槽室を水族館として一般公開したのが始まりである。平成17年度は、ちょうど開館75周年にあたるため、それを記念した写真展を6ヶ月間にわたって開催した。また、12月にフィールド研が開催した時計台対話集会のときに、長年にわたって水族館で飼育する水族の収集に多大な協力をしてくださった、白浜漁協・南部漁協および岡本昭生氏にセンター長より感謝状を贈呈した。

現在全国22箇所に国立大学法人所属の臨海臨湖実験所が設置されている。それらの実験所には、水族館が併設されているものが多かった。しかし現存するものは、京大瀬戸臨海実験所のものだけになってしまった。主たる理由は、観客の減少とそれに伴う経費負担の増加である。本水族館も、バブルの崩壊後、観客数が激減している。そこで少しでも観客を増やそうと、所員が一丸となって取り組んでおり、勤務日をやりくりして、平成16年度から正月期間も含めて完全年中無休化を実施した。またさらに、平成17年度からは春、夏、冬の学校の休み期間には、教員・技術職員が手分けして解説ツアーをほぼ毎日実施している。このような努力の成果は少しずつ実を結びつつあり、一時は5万人近くまで落ち込んだ年間入館者数も、少しずつ増えてきて、平成17年度には6万人弱になった。この数字は、水族館が京都大学のなかでもっとも大きく開いた社会への窓であることを示しており、今後もこの貴重な京都大学と市民とを結ぶチャンネルを何とか維持していきたいと考えている。

2. 3. 5 全日空との連携

地球環境問題解決への取り組みは、学校教育現場に限らず様々な個人・団体・企業などによる多様なものへと広がっている。とりわけ、先進的な企業は環境問題への取り組みを自社の基本理念として、対外的な社会貢献活動を展開している。日本の翼を代表する全日本空輸株式会社(以下「ANA」)も環境・社会貢献部を立ち上げ、ANA便の就航する空港近隣において「私の青空・森づくり」活動を展開している。

フィールド研は、ANAと以下の内容の「森・里・海的环境再生教育に関する合意書」を平成16年12月21日に締結し、『全日空「私の青空・森づくり」』において青空塾を開講し、ANAとの連携のもと環境再生教育を展開している。この青空塾は、フィールド研の理念である森里海連環思想の全国的普及に大きな力を発揮している。

1. フィールド研は、ANAが国内で展開する「私の青空・森づくり」に協力し、現地において「京都大学フィールドセミナー(青空塾)」を開講する。
2. ANAは、フィールド研が持つ森林域・里域・海域の各施設の市民教育への開放を支援する。
3. フィールド研とANAは、エコツアー「フィールドツアー(仮称)」を共同で企画開発する。
4. ANAは、フィールド研が進める森里海連環に関する市民参加型研究を支援する。

これらの合意点のうち1. 2. についてはある程度の実績を積み上げてきたが、3. 4. については、今後両者での綿密な打ち合わせによって新たな道を切り開いていく必要がある。

2. 3. 6 京都・まいづる立命館地域創造機構(MIREC)との学術交流協定

京都・まいづる立命館地域創造機構(以下「MIREC」)は、フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所が立地する京都府舞鶴市に、平成16年7月に設置された地域・産学官連携拠点機構である。舞鶴水産実験所とMIRECは、若狭湾環境改善に関するいくつかのプロジェクトにおいて、研究交流を行ってきた。それをフィールド科学教育研究センター全体に拡大し、森林域・里域・海域の各施設との共同調査研究事業を展開し、かつ、MIRECが持つ地域・産学官のネットワークを活用したフィールド研の市民学習・教育活動を推進することを企図して、平成17年1月28日に以下の内容の学術交流協定を締結した。

1. フィールド研とMIRECは、地域振興および学術交流・教育の発展を目的として、それぞれの自主性に基づいて、相互の交流を図るものとする。
2. フィールド研とMIRECが、交流の具体化を図る場合は、上記の趣旨に則り、別途、個別に協議を行い、必要な場合には新たに合意書を作成する。
3. フィールド研とMIRECは、必要に応じて、連携・協力を推進するための協議を行う。

2. 3. 7 NPO 法人エコロジー・カフェとの協定

フィールド研では、平成 17 年 7 月 19 日に NPO 法人 エコロジー・カフェと「生物多様性保全のための市民参加型教育研究に関する協定書」に調印している。

フィールド研とエコロジー・カフェが双方の生物保全活動に対し相互協力を行うことにより、以下のような事業を展開し、市民の種多様性および環境の保全などの活動への参加を促進すると共に、市民教育・啓蒙活動を通じて、フィールド研の教育研究およびエコロジー・カフェの活動の理念を広く普及することを目指している。

1. フィールド科学教育研究センターは、エコロジー・カフェが展開する固有種・絶滅危惧種の保護活動に協力し、積極的に知見や情報を提供する。
2. エコロジー・カフェはフィールド科学教育研究センターが開講する市民開放型の講座・セミナー・シンポジウムなどの企画開発に参加すると共に、実施に協力する。
3. フィールド科学教育研究センターとエコロジー・カフェは、森林域・里域・海域の生態系を保全するための共同研究を立案し、コラボレートを実現する。

2. 3. 8 その他

フィールド研は、下記に記したもの以外にも、数多くの公開シンポジウム、公開講座、放送大学面接授業、SPP 事業などを主催し、また、「京の子供夢大使（大志）派遣事業 科学探偵士」などに講師を派遣することによって、「京都大学の社会に開かれた窓」として、また、フィールド研の理念の共有化拡大に向けて、十分な社会・地域貢献を果たしてきた。数少ない教員によって構成されるフィールド研としては、今後事業量の拡大の可能性は低く、事業内容の充実に向けた取り組みが必要であると考ええる。

2. 4 外部資金

運営費交付金が漸減の状態にある現在、フィールド科学教育研究センターでは、各教員に積極的に外部資金を獲得するように働きかけを行っている。評価期間に獲得された外部資金は以下にまとめた通りである。

2. 4. 1 科学研究費補助金

科学研究費補助金の研究種目ごとの件数（分担、継続を含む）と受託額

科学研究費補助金 研究種目	2003年度		2004年度		2005年度	
	件数	受託額合計	件数	受託額合計	件数	受託額合計
学術創生研究費	1	4,500	1	2,500		
特定領域研究 (A)	1	2,900				
基盤研究 (A) (1)	2	1,865	2	1,100	1	200
基盤研究 (A) (2)	1	21,450	1	16,250	1	11,310
基盤研究 (A)						
基盤研究 (A) 海外学術調査					1	11,700
基盤研究 (B) (1)						
基盤研究 (B) (2)	1	9,800	1	2,200	1	2,200
基盤研究 (B)						
基盤研究 (C) (1)	1	700				
基盤研究 (C) (2)	3	3,300	3	4,600	2	2,400
基盤研究 (C)					5	8,300
萌芽研究	2	2,600	2	2,200	3	4,100
若手研究 (A)						
若手研究 (B)	1	1,700	1	1,000	2	2,900
合計	13	48,815	11	29,850	16	43,110

2003-5年度合計 121,775 (千円)

科学研究費補助金（特別研究員奨励費） 職種	2003年度		2004年度		2005年度	
	件数	受託額合計	件数	受託額合計	件数	受託額合計
特別研究員（PD）	1	1,100				
特別研究員（DC1）	1	1,000	2	2,000	1	900
特別研究員（DC2）					1	900
外国人特別研究員	2	1,800	1	1,100	2	2,300
合計	4	3,900	3	3,100	4	4,100

2003-5年度合計 11,100（千円）

2. 4. 2 受託研究

受託研究 委託者	2003年度		2004年度		2005年度	
	件数	受託額合計	件数	受託額合計	件数	受託額合計
（独）水産総合研究センター中央水産研究所	1	2,500	1	2,400	1	2,400
（独）国立環境研究所	1	5,504	1	5,669		
（独）森林総合研究所	2	3,501	2	3,535	2	3,301
（独）水産総合研究センター	1	2,500	1	2,969	1	1,500
（財）日本科学技術振興財団	1	1,300				
（財）地球環境産業技術研究機構			1	2,468		
京都市			1	420	2	1,210
（独）水産総合研究センター西海区水産研究所					1	2,000
合計	6	15,305	7	17,461	7	10,411

2003-5年度合計 43,177（千円）

2. 4. 3 奨学寄付金

寄附金（奨学寄附金） 寄附者（団体）	2003年度		2004年度		2005年度	
	件数	受託額合計	件数	受託額合計	件数	受託額合計
アラスカ大学フェアバンクス校					1	50,704
（財）京都理学研究協会	1	400	1	400	1	400
（財）漁港漁場漁村技術研究所						
（財）阪本奨学会	3	4,900	5	4,900	5	4,900
（財）森公弘済会	1	720				
（財）河川環境管理財団	1	3,000	1	1,500		
（財）昭和聖徳記念財団			1	500		
（財）アサヒビール学術振興財団			1	550	1	550
大日本除蟲菊株式会社			1	500		
（財）藤原ナチュラルヒストリー振興財団			1	500		
（財）京都大学教育研究振興財団					1	1,980
国土環境株式会社					1	1,000
（株）村田製作所					1	2,000
日本財団					2	20,700
（財）斉藤報恩会					1	300
（財）自然環境研究センター					2	2,500
（株）森林テクニクス大阪支店					1	1,000
カリフォルニア大学					1	4,746
（財）日本科学協会					1	272
合計	6	9,020	11	8,850	19	91,052

2003-5年度合計 108,922（千円）

2. 4. 4 課題と展望

科学研究費補助金については、毎年10数件が新規採択・継続されている。教職員一人あたり、年間約0.5件を担当していることになる。科研費の平均的な採択率が約22%であることを考えると、比較的良好な状態である。しかしながら、少額の研究種目が多く、補助金額総額は必ずしも多くはない。また、全教職員が申請している状況ではない。引き続き、科学研究費補助金への積極的な申請、とくに、基盤研究の(A)や(B)への申請件数を増加する努力が必要と考えられる。

受託研究については、件数は6～7件で変動はなかったが、平成17年度には受託額が減少した。継続して委託する組織・団体があるが、引き続き研究を受託できるよう努力するとともに、フィールド科学教育研究センターの研究活動を積極的に広報し、委託者の新規開拓をめざす必要がある。長期生態研究(LTER)やモニタリングサイト1000への参加による研究費獲得については、今後積極的に推進する必要がある。

奨学寄附金は、アラスカ大学と日本財団からの寄附があった平成17年度にそれまでの約10倍と大幅な増額があった。日本財団からの寄附はフィールド科学教育研究センターが推進する森里海連環学に関係したものである。平成17年度の寄附金レベルを維持することは難しいが、できる限り獲得できるよう全教職員の努力が必要である。

研究活動として、森里海連環学を推進するための研究プロジェクトの企画立案と実施が重要であり、これを実現するためには大型の研究費の獲得が必須となる。科研費以外に、概算要求事項としてのプロジェクトの提案や、COEや地球環境研究総合推進費などへ申請していくことが必要である。

2. 5 国際交流

2. 5. 1 第6回国際異体類生態学シンポジウム

平成17年10月20日～25日に舞鶴市において、フィールド科学教育研究センターが主催する第6回国際異体類生態学シンポジウムを開催した。本シンポジウムは3年に1度開かれる国際シンポジウムであり、これまでにヨーロッパで4回、アメリカで1回開催されている。第6回大会は、1. 索餌・産卵場、2. 卵・仔魚の生息環境、3. 稚魚の成育場環境、4. 漁業管理と栽培漁業、5. 養殖と生理、6. 人間活動の影響、の6セッションから構成され、23カ国から144名が参加した。また、シンポジウム期間中に市民向け公開講座を企画し、市民を対象にシンポジウムに参加している米国NOAAのJ. S. Burke博士、京大フィールド研の田中克教授、京大フィールド研社会連携教授である畠山重篤氏の講演を行った。本シンポジウムのプロシーディングスは、国際誌であるJournal of Sea Researchから、2007年に出版された。本シンポジウムでは、京都大学フィールド科学教育研究センターに所属する大学院生、特別研究員4名が研究発表を行い、また、多くの学生、院生がシンポジウムの運営に参加しており、国際シンポジウムの企画や外国人との情報交換などにおいて、大きな教育的効果があったと判断される。

2. 5. 2 21世紀COEシンポジウム

フィールド研の教員が構成員の一部となっている21世紀COEプログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」では、以下のシンポジウムを開催してきた。実施内容の詳細については、同COEプログラムのホームページ(<http://www.21coe-insect.kais.kyoto-u.ac.jp/events/index.html>)よりダウンロードできる。

平成17年3月2日～3日 第1回COE昆虫科学国際シンポジウム (京大会館)

同7月2日 第1回COE昆虫科学講演会「虫の見る目虫を見る目」(京大農学部総合館)

同9月12～14日 大学院生による昆虫科学と環境(フィールド)研究シンポジウム

「秋の京都で語り合おう in 上賀茂試験地」(上賀茂試験地)

同10月31日～11月2日 第2回COE昆虫科学国際シンポジウム (芝蘭会館)

2. 5. 3 海外フィールド調査

平成15～17年度までに行われた海外フィールド調査の主なものは以下の通りである。

平成15年度

安藤 信：乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響(トルコ)

芝 正己：森林管理・CoC認証システムの実態調査(ドイツ・スウェーデン・スイス)

徳地直子：シベリア

山下 洋・田中 克：タイ湾奥部河口域の生物生産に関する調査（タイ国プラパ大学）
山下 洋・益田玲爾：タイ国トラン沿岸域フィールド調査（タイ）
白山義久：タイ国トラン沿岸域フィールド調査 NaGISA サンプリング（タイ）
柴田昌三：インド・ミゾラム州における竹開花予定地予備調査（インド）、タイ・沿岸部における水系に関する予備調査（タイ）
西村和雄：ベトナム国におけるコーヒーの有機栽培の可能性について調査（ベトナム）
中西麻美：総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」に関するフィールド調査（ラオス・タイ）

平成 16 年度

徳地直子：緑化と環境保全のあり方に関する総合的研究（中国）、21 世紀のアジアにおける科学的陸域炭素管理に向けた統合的炭素収支研究（ロシア）
安藤 信：ポプラの生理についての生態学的調査・実験（中国・内蒙古）、乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響（トルコ）
芝 正己：ドイツにおける持続的森林管理の技術的問題に関する現地調査（ドイツ）
田中 克：マレーシア・サバ大学ボルネオ海洋研究所（講演）（マレーシア）
柴田昌三：京都大学地球環境学堂の研究拠点形成のための調査（ベトナム）、台湾における竹林経営及び竹産業の視察（台湾）、韓国における緑化工試験施工地の視察（韓国）、ミゾラム州における竹開花予定地における予備調査（インド）
梅本信也：野生ダイズの自生地保全に関する研究（文部省科学研究）
中西麻美：焼畑休閑林の植生調査（ラオス）、植物の種同定（タイ、カセサート大学）
白山義久：NaGISA サンプリング（ベトナム）
久保田信：プラパ大学との生物相の共同研究（タイ）

平成 17 年度

安藤 信：乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響（トルコ）
田中 克：仁川・錦江河口域フィールド調査（大韓民国）
柴田昌三：ベトナムでの京都大学地球環境学堂の研究拠点形成のための調査（ベトナム）、インドミゾラム州における竹開花予定地における調査（インド）
西村和雄：アフガン難民にたいする農業指導（イラン）
中西麻美：焼畑休閑林の植生調査（ラオス）
小路 淳：仁川・錦江河口域フィールド調査（大韓民国）
白山義久：NaGISA サンプリング（インドネシア）

2. 5. 4 海外学会発表

フィールド研の教員が運営または参加した国際学会の主たるものを以下に挙げる。

平成 15 年度

田中 克：第 27 回アメリカ水産学会仔稚魚研究集会（セッションコンビナー） Santa Cruz USA, August 2003.
田中 克：第 4 回 SEASTAR2000 ワークショップ（講演：タイ湾沿岸域における森里海連環学の展開）、タイ王国バンコク市、Dec. 11-13.
柴田昌三：第 4 回中国竹文化節、第 7 回世界竹会議
白山義久：CoML 科学推進委員会、IPCC 特別報告書執筆委員会、NaGISA ワークショップ（タイ）

平成 16 年度

徳地直子：5th International Workshop on Global Change: Connection to the Arctic, US-Japan joint workshop on biogeochemistry and hydrology in forest watershed associated with LTER (Long-term Ecological Research)
安藤 信：第 1 回東アジア生態学会（韓国）
田中 克：第 1 回 21 世紀 COE プログラム「昆虫科学」国際シンポジウム

山下 洋：The First EAFES International Congress, Mokpo Korea, The 33rd UJNR Aquaculture panel symposium, Nagasaki.

The 1st International Symposium of Entomological Science COE "Development and Metamorphosis", Kyoto.

柴田昌三：1st East Asian Federation of Ecological Societies (Mokpo, Korea)

田中 克・山下 洋・田川正朋・益田玲爾・中山耕至：第6回国際異体類生態学シンポジウム国内組織委員会

白山義久：CoML 科学推進委員会 IPCC 特別報告書執筆委員会、NaGISA ワークショップ（ベトナム）

久保田信：第10回国際サンゴ礁学会（講演）

益田玲爾：世界養殖学会例会（ホノルル）

平成 17 年度

徳地直子：Acid Rain, プラハ, ポスター発表（2件）, East Asia, Long Term Ecological Research, ポスター発表, East Asia, Long Term Ecological Research, 口頭発表

安藤 信：2nd EAFES International Congress（新潟）

中島 皇：IUFRO（International Union of Forest Research Organizations）

田中 克：International Symposium, JSPS（Japanese Society for Promotion of Science）Annual

Meeting Series, National Museum of Emerging Science and Innovation（Mirai）, Tokyo, Japan.

The 29th Annual Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain

山下 洋：The 29th Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain

柴田昌三：Opening workshop on disaster, environment and people（Hue, Vietnam）

1st International Symposium on Landscape and Ecological Engineering（Seoul, Korea）

Workshop on Education and research cooperation on environment and disaster management for human security（Hue, Vietnam）

益田玲爾：World Aquaculture 2005（Bali, Indonesia）にて栽培漁業のセッションを組織

甲斐嘉晃：7th Indo-Pacific Fish Conference（Taipei, Taiwan）

小路 淳：The 29th Larval Fish Conference, the University Pompeu Fabra, Barcelona, Spain.

Estuarine Research Federation 2005 Conference in Norfolk, Marriott Hotel Waterside, Norfolk, Virginia, US

白山義久：CoML 科学推進委員会 IPCC 特別報告書執筆委員会 SCOR High CO2 World Symposium

NaGISA ワークショップ（インドネシア）

宮崎勝己：6th International Crustacean Congress（Glasgow, Scotland）

深見裕伸：Workshop of Molecular phylogeny of scleractinian corals and reef connectivity in the South/East China Seaboard, in Taipei, Taiwan, Oct25-30, 2005.

Molecular Marine Barcoding Workshop in Bocas del Toro, Republic of Panama on September, 26-29, 2005.

2. 5. 5 外国人の受入れ

別表の通り、フィールド研では先進国・途上国を問わず、幅広い国から研究者および留学生を受け入れてきた。

招 へ い 外 国 人 学 者 受 入 一 覧

氏 名	国 籍	受入教員	受入期間	備 考	フィールド研部門
Jennifer Specker	米国	教授 田中 克	2005.02.25 ～ 2005.03.07		里域生態系部門
John Harold Youson	カナダ	教授 田中 克	2005.02.25 ～ 2005.03.05		里域生態系部門
Majed Safaa Ahmad	ニュージーランド	教授 田中 克	2002.04.12 ～ 2003.08.29		里域生態系部門
Mendiola Diego Martinez	スペイン	教授 山下 洋	2005.05.06 ～ 2005.06.11		里域生態系部門
Sergio Nestor Bolasina	アルゼンチン	教授 山下 洋	2003.11.24 ～ 2005.11.23	特別研究員 （日本学術振興会）	里域生態系部門
郭 又 哲	大韓民国	教授 田中 克	2003.07.21 ～ 2003.08.25		里域生態系部門
			2003.12.26 ～ 2004.02.12		
			2004.07.24 ～ 2004.08.30		
			2004.12.27 ～ 2005.02.10		
			2005.07.01 ～ 2005.08.10		
劉 沃 煥	大韓民国	教授 白山 義久	2002.04.01 ～ 2004.03.31	特別研究員 （日本学術振興会）	基礎海洋生物学部門
Arwut Kaenphet	タイ	教授 白山 義久	2003.11.29 ～ 2004.01.09		基礎海洋生物学部門

Chratsee Aungtonya	タイ	教授	白山 義久	2003.11.29 ~ 2004.01.09		基礎海洋生物学部門
Hari, La Iti Harmin	インドネシア	教授	白山 義久	2004.10.23 ~ 2004.11.21		基礎海洋生物学部門
Ernawati Widyastuti	インドネシア	教授	白山 義久	2005.01.24 ~ 2005.02.28		基礎海洋生物学部門
Chawaporn Jittanoon	タイ	教授	白山 義久	2005.01.28 ~ 2005.02.28		基礎海洋生物学部門
Patricia Robin Rigby	カナダ	教授	白山 義久	2004.04.01 ~ 2004.06.30		基礎海洋生物学部門
				2005.04.01 ~	特別研究員 (日本学術振興会)	

研 究 生 受 入 一 覧

氏 名	国 籍	受入教員		受入期間	備 考	フィールド研部門
呉 初 平	中国	助教授	安藤 信	2003.04.01 ~ 2004.03.31		森林生物圏部門
陳 炳 善	大韓民国	教授	山下 洋	2003.10.01 ~ 2004.03.31		里域生態系部門
Antonio Emily Sucaldito	フィリピン	教授	山下 洋	2005.10.01 ~ 2006.03.31	2007.04.01 より博士後 期課程へ進学 在学中	里域生態系部門
Desai Dattesh Vithoba	インド	教授	白山 義久	2003.04.01 ~ 2004.03.31		基礎海洋生物学部門
Yi-Ting Lien	台湾	教授	白山 義久	2006.01.01 ~		基礎海洋生物学部門

留 学 生 (修 士・博 士) 受 入 一 覧

氏 名	国 籍	受入教員		受入期間	備 考	フィールド研部門
呉 初 平	中国	助教授	安藤 信	2004.04.01 ~ 2006.03.23	修士課程在籍・修了 2007.04.01 より博士後 期課程へ進学 在学中	森林生物圏部門
Ris Hadi Puruwanto	インドネシア	教授	大島 誠一	2002.04.01 ~ 2005.03.23	博士後期課程在籍・修了	里域生態系部門
Md Shahidul Islam	バングラデシュ	教授	田中 克	2003.04.01 ~ 2006.03.23	博士後期課程在籍・修了	里域生態系部門
陳 炳 善	韓国	教授	山下 洋	2004.04.01 ~	博士後期課程在学中	里域生態系部門

2. 5. 6 課題と展望

これまで示してきた通り、フィールド研では国際シンポジウムを主催・共催するとともに、海外のフィールドでも調査を行い、そして多くの外国人研究員を受け入れてきた。

日本で行われる国際学会の多くは、東京を始めとする大都市の周辺で開催される。このため、我が国を訪れた外国人研究者の大多数は、東京と京都に滞在し、それを日本のイメージとして持ち帰る。そうした場合、国土の70%を占める山林と、複雑多岐な海岸線について知る機会が少ない。一方、フィールド研主催の異体類シンポジウムは、人口10万人足らずの舞鶴市で行われた。会場への往路の案内や食事・宿泊等に関する英語の案内はこれまで作られていなかったため、フィールド研のスタッフが作成した。小都市での開催は、主催者の負担は大きいものの、より広く深く日本を知ってもらい良い機会ともなる。フィールド研では、今後も積極的に外国人の研究者を受け入れ、フィールド施設を有効に活用してゆくことが望まれる。

タイ国をフィールドとして森と海のつながりを解明するプロジェクトについて、現地で調査を行ってきた。フィールド実験および現地調査に必要な費用については、今後、公的機関および民間から資金を獲得してゆく必要がある。

フィールド研を訪れる研究者の出身国は、極めて多様である。森里海連環のコンセプトは、多くの人口と切迫した環境問題を抱える途上国に対して、重点的に発信してゆくべきである。そうした意味でも、途上国からの留学生にフィールド研で学んでもらう意義は大きい。フィールド研に滞在した留学生や研究者が母国に戻った後もコンタクトを密にとることにより、強大なネットワークを構築してゆくことが可能である。

3 管理と運営

3. 1 教授会

フィールド研では、教授会を月に1回の割合で開催し、部局の重要事項について議論を重ねている。教授会の構成員は、全教授と農学研究科等事務部の事務部長・総務課長・経理課長・研究協力課長・フィールド研担当専門員・総務掛長である。教授会の議事録は各教員に文書で通知されている。

3. 2 教員会議

全教員から構成される教員会議は原則として年に4回（隔地2回と京都地区2回）開催されている。本会議では新たに同一の部局となった教員相互の理解を深めるために、教員による研究成果の発表とその時々のフィールド研の重要な懸案について自由に議論する時間をとっている。特に隔地で開催される場合には、宿泊を伴う事になるので、1日目の夜には、懇親の場を設けてまさに“同じ釜の飯を食べた”仲間となる機会となってきた。また2日目には、各施設の見学を実施してフィールドの状況を把握し、共同研究の可能性をさぐるきっかけとなっている。

3. 3 運営委員会

学内の有識者からなる運営委員会は、フィールド研の管理運営についての重要事項に関して、センター長から諮問を受け助言をすることを主たる目的としている。フィールド研の外部からの忌憚のない指摘を受け、センター長をはじめとする教授会のメンバーは、フィールド研の運営方針を提言を参考にしながら立案修正にあたっている。

各年度の運営委員は、下記のとおりである。

区分	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
議長	田中 克（フィールド研センター長）	田中 克（フィールド研センター長）	田中 克（フィールド研センター長）
1 号	大畠 誠一（フィールド研教授）	竹内 典之（フィールド研教授）	竹内 典之（フィールド研教授）
	竹内 典之（フィールド研教授）	山下 洋（フィールド研教授）	山下 洋（フィールド研教授）
	山下 洋（フィールド研教授）	白山 義久（フィールド研教授）	白山 義久（フィールド研教授）
	白山 義久（フィールド研教授）		
2 号	堀 道雄（理学研究科教授）	堀 道雄（理学研究科教授）	堀 道雄（理学研究科教授）
	谷 誠（農学研究科教授）	谷 誠（農学研究科教授）	谷 誠（農学研究科教授）
	森本 幸裕（地球環境学学教授）	森本 幸裕（地球環境学学教授）	森本 幸裕（地球環境学学教授）
	森 義昭（学術情報メディアセンター助教授）	森 義昭（学術情報メディアセンター助教授）	森 義昭（学術情報メディアセンター助教授）
	山村 則男（生態学研究センター教授）	山村 則男（生態学研究センター教授）	山村 則男（生態学研究センター教授）
	大野 照文（総合博物館教授）	大野 照文（総合博物館教授）	大野 照文（総合博物館教授）
			安藤 和雄（東南アジア研究所助教授）

3. 4 協議員会

フィールド研の最高議決機関である協議員会は、フィールド研の全教授と学内関連部局の長を中心とした関連教員から構成される。センター長の選任、教員人事の決定、概算要求事項の承認、組織の改編にかかわる事項の承認を行う。それ以外の事項については、原則として教授会に決定を委任している。もっとも重要な事項である、センター長の選任と人事の承認は、2/3 以上の出席が必要で、人事については 3/4 以上の承認を必要とする。

各年度の協議員は、下記のとおりである。

区分	職名	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
1 号	フィールド科学教育研究センター長	田中 克	田中 克	田中 克
2 号	フィールド科学教育研究センター教授	大島 誠一	竹内 典之	竹内 典之
	フィールド科学教育研究センター教授	竹内 典之	山下 洋	山下 洋
	フィールド科学教育研究センター教授	山下 洋	白山 義久	白山 義久
	フィールド科学教育研究センター教授	白山 義久		
3 号	高等教育研究開発推進機構長	赤岡 功 (~ H15.12.15) 丸山 正樹 (H15.12.16 ~)	丸山 正樹	丸山 正樹 (~ H17.9.30) 林 哲介 (H17.10.1 ~)
	理学研究科長	笹尾 登	笹尾 登	北村 雅夫
	理学研究科動物学教室教授	今福 道夫	今福 道夫	今福 道夫
	農学研究科長	高橋 強	高橋 強	矢澤 新
	農場長	谷坂 隆俊	谷坂 隆俊	谷坂 隆俊
	学術情報メディアセンター長	松山 隆司	松山 隆司	松山 隆司
	地球環境学堂長	中原 紘之	中原 紘之	嘉門 雅史
	生態学研究センター長	清水 勇	清水 勇	大串 隆之
	総合博物館長	山中 一郎	山中 一郎	中坊 徹次

4 課題と展望

フィールド科学教育研究センターは設立間もない部局であり、教育研究の体制が十分に整った成熟した段階には到達していない。さらに、多数の隔地施設の統合部局であるので、分散した各施設には特有の課題がある。そこで、本章ではそれぞれの施設の課題と展望をまとめた。

北海道研究林

課 題

1. 施設

標茶区の学生実習棟は昭和41年に建築され、今までも部分的な改築や修理を行ってきた。今後とも、近年の実習受け入れ人数や女子学生の増加に対応すべく整備していく必要がある。白糠区には学生実習棟がないため、実習の宿泊や講義に他施設を利用している。そのため、準備や移動等に多大な労力を強いられている。

2. 教育・研究設備

教育・研究の場となる造林地の間伐等の保育作業や天然林手入れ、さらに安全に運行できる林道の整備は実習施設として不可欠である。また、長年続けられてきた気象観測を継続していくために、観測の自動化等、観測体制の充実を図る必要がある。

3. 人員

標茶区・白糠区の離れた2つの研究林を管理し、効率の良い業務を行うために、人員の確保と体制作りが重要である。

4. 予算

請負化を推進し、作業の能率化をはかる。新規事業を行うための予算の獲得を講じる必要がある。

5. その他

地域貢献・社会教育事業への関わり、研究林における組織的研究に取り組むためにも、人員配置ならびに業務の見直し等、環境整備が必要である。

展望（将来計画）

1. 施設・設備整備

標茶区の学生実習棟の風呂の増築、白糠区職員宿舎の学生実習施設への転用など、学生実習施設の拡充整備を行う。老朽化した大型機械の整備と順次更新を行う。白糠区の林地気象観測設備を自動化する。構内および実習等で利用される林道や樹木園の樹名盤の取設や、遊歩道の整備を行う。

2. 予算の確保

間伐計画による収入を継続的に確保するとともに、外部資金等予算の獲得に努める。

3. 人員の充実

適正な人員の確保と、作業の分業化を徹底するための技術職員のグループ化を進める。

4. その他

小・中・高校、教育委員会等、地域社会と連携して、主催、共催可能な社会貢献事業（植物観察会・木工体験学習）を推進するとともに、教員の確保や退職職員等の協力を要請する。技術職員が積極的に取り組むべき研究テーマを整理する。

芦生研究林

課 題

1. 施 設

施設全体が老朽化しており、多数の課題がある。

(1) 宿泊所（大正 12 年、昭和 6 年築）

- ・実習・調査における女性利用者の増加により専用トイレ・浴室が必要である。
- ・炊事室が利用者自炊専用のため、衛生管理が整った炊事室が必要である（但し、特定給食施設としての改善には、有資格者の確保等の要検討部分がある）。
- ・食堂・宿泊室浴室・学生宿泊所のトタン屋根老朽により雨漏れの可能性があり、早急な張替が必要である。
- ・長期滞在調査が可能となるよう現有宿泊室の一部個室化・ベット化が必要である。

(2) 事務室（昭和 6 年築）

- ・廊下及び階段の壁が老朽化のため張替が必要である。
- ・技術班の部屋が狭く、廊下玄関部分に拡張改修が必要である。

(3) 専用自動車庫

- ・入口シャッターの老朽化により開閉に支障をきたしており新規更新が必要である。
- ・照明が暗く、照明機器の増設が必要である。

(4) 物品倉庫（2 階部分）及び自動車庫（1 階部分）

- ・鉄製外階段の老朽化により危険性が高いので早急な改修が必要である。

(5) 危険物倉庫

- ・スレート屋根老朽化のため改修が必要である。

(6) 公用車簡易給油装置（軽油専用）

- ・老朽化により故障が絶えず更新が必要である。

(7) 製材室及び木工小屋

- ・塗装劣化のため早急な塗替が必要である。
- ・目立室屋根部分の鉄板老朽化のため張替が必要である。

(8) 総延長 34km の林道を維持管理していくため大型建設機械による作業の効率化を図っているが、これら重機の老朽化が著しく段階的な更新が不可避である。

2. 教育・研究設備

- (1) 近年、長期研究調査利用が増加傾向にあり、それに対応できる生態系及び化学系の一次処理実験室が無いため、教員学生が毎日京都市内から通っている。効率良く研究調査を行うには一次処理実験施設が必要不可欠である。
- (2) 旧製材所を職員の手で 50 人定員の仮設講義室にし、公開講座や学生実習などに使用しているが、雨漏れやすきま風が入り込み、また周囲の雑音も入り、決して環境の整った講義室で無いため、改修が必要である。
- (3) 芦生研究林においては冷温帯林における森林動態調査を固定プロットで行い長期モニタリングも行っている。林道からのアクセスは徒歩であり、資材や採取資料を人力で搬送しているため効率が悪く、しかも調査職員の往来が激しく林床の荒廃につながっている。この問題を解決するためには、移動性や安全面、また運送手段として優れている固定プロット単位での乗用モノレールの設置を希望する。

3. 人 員

- (1) 学生実習や長期滞在型研究調査等において自炊の出来ない利用者も相当数あり、食事提供や宿泊室管理に専属出来る資格を持った職員 1 名を必要としている。
- (2) 渉外業務及び増加する実習や地域貢献事業に対応するため、また、その他各方面から林長を補佐するため常駐する助教の配置を期待する。

4. 予算

現状ではこれらを実施出来る予算は望めないため、要求はしていくが、年次計画で予算の範囲で実施して行かざるを得ない。

5. その他

- (1) 芦生研究林及びセンターにとって重要であると思われるテーマの共同研究や共同企画事業の要望に対し、どの

程度予算及び労働力の提供を行うかの精査が必要。

- (2) 増加する一般入林者の遭難事故や怪我などの安全管理問題をふまえ、フィールドの開放方法（入林制限方法）の再検討が必要かと思われる。

展望（将来計画）

1. 施設

- (1) 事務所管理棟・実験室及び宿泊施設は、新規に建替要求を提出済みであるが、引き続き予算獲得を望みたい。
- (2) 当面は、上記の老朽化対応や改修増設の要求で望みたい。

2. 教育・研究設備

- (1) 木材乾燥室を生態系実験室に改修し、実験台・乾燥機・顕微鏡などの設備を整えたい。
- (2) 旧製材所目立室を化学系実験室に改修し、純水装置・実験台・冷凍庫等の設備を整えたい。
- (3) 仮設講義室の床壁、間仕切改修を行いたい。

3. 人員

- (1) 宿泊所管理及び食事提供が出来る専任職員を1名採用したい。
- (2) 林長を補佐するため常駐する助教の配置が必要である。

4. 予算

- (1) 外部資金等による運営交付金削減分の補填に努める。
- (2) 林道・作業道等の林内基盤整備の恒常的な遂行・実施のため、事業経費以外の新たな予算（寄付その他）獲得を模索する。

和歌山研究林

課題

1. 施設

事務所がプレハブ（仮事務所）である点、作業機械が不十分である点をまず改善する必要がある。また職員宿舎がないことも問題で、今後の職員の借家確保も困難である。

2. 教育・研究設備

通信環境が未整備である点、講義室・実験室の充実が必要である点、測量機器が不十分である点、宿泊施設のない点、林道路網密度が低いことなどがあげられる。

3. 人員

事務職員がいないことが最大の問題である。

展望（将来計画）

どれもすべての問題が予算とかかわるので、今後予算の獲得に取り組みたい。

上賀茂試験地

課題

1. 施設

1949年に現在地に移転して以来、大きな施設の変化はない。現在の事務所棟及び実験棟は文化的価値の高い建築群であり、これを解体して新たな建築物を建築する必要は考えにくい。現有とは別の同じ機能を持った施設の必要性は高い。

2. 教育・研究設備

研究施設としては、現有の構造物として元温室、標本館がある。温室はかつては数棟が存在したが、老朽化によって多くが解体され、現有のただ一棟の温室も建物としての維持そのものが困難な状況にある。また、燃費が維持できないことから、本来温室であったものが現在では単なるガラス室となっている。温室の維持は、地球レベルで森林資源を評価する必要がある。現在、熱帯地域の木質資源を研究する上では不可欠であるが、現在のフィールド研でこの目的を達することのできる設備はない。また、実際に様々な計測を行う現場としての、様々な設備

も非常に非力であり、現状では、個人的な研究資金からの支援によってかろうじて維持されている状態である。

3. 人員

人員配置は定員削減が進む中で、改悪の一途をたどっており、教育研究を円滑に進める上で要求されるレベルで試験地を維持する上で大きな障害となっている。機械化、効率化を図ることが難しい山の管理において、定員削減は管理の質を低下させる大きな問題であり、人海戦術によってしか維持できない環境維持に対する理解を期待せざるを得ない状態である。

4. 予算

定員削減と同様に、管理に必要な予算の削減は、良好な教育研究環境の維持を困難にしつつある。このために必要な資金は、本来、競争的資金によってまかなわれるべきものとは考えにくい、試験地長をはじめとする教員が獲得してくる競争的資金を利用した予算でしか設備の向上が図れないのが現状である。

5. その他

上賀茂試験地は里域ステーションに所属する施設のうち、陸域施設の中心的存在であるが、海域施設である舞鶴水産実験所との交流は充分には行えていない。森里海連環学の発展を考える中で、里域生態系部門の連携が充分でないところが大きな問題の一つとして考えられる。

展望（将来計画）

1. 施設・設備整備

現有の施設のうち、現役の建物としては事務所棟、実験棟、作業小屋があるが、作業小屋はプレハブである。一方、前二者は文化的価値の高い建物であり、そのまま資料館として、標本館と共に維持されることが望ましい。そのため、現役建物としては機能していない建物群と作業小屋をあわせて改築し、新たな事務・研究棟の計画を持っている。将来は、試験地入り口付近に計画されているこの建物を中心とした教育研究を進めていくことが望まれている。

設備に関しては温室の再建が望まれる。課題で述べたように、熱帯性木質資源の研究が行えない現状を考えたとき、その再生は不可欠であり、木文化再生の旗印の一つとしてフィールド研考えている jPod 工法を用いた新たな温室を計画中である。

2. 予算の確保

予算の確保は大きな問題であるが、現状では、大きな展開は望めない。当面は学内資金や外部資金を、組織として、あるいは個人的な努力によって獲得し、運営を行うしかないであろう。

3. 人員の充実

公的な資金によって新たな人員の充実の行うことがきわめて困難な現在、試験地周辺にある様々な文教施設との協力体制を取ることにによる人的資源の利用が考えられる。上賀茂試験地の場合、すでに、京都精華大学や京都造形芸術大学との連携関係を構築しつつあるが、今後は隣接する総合地球環境科学研究所や京都産業大学、あるいは、里山研究を推し進めている龍谷大学などとの連携を深めていく予定である。また、学内に関しても総合博物館等との連携を視野に入れている。

4. その他

課題でも書いたとおり、近い将来、少なくとも里域生態系部門に属する諸施設との連携を深め、里域における総合的な教育研究を推し進める方向性を探らなければならない。そのためには教員・職員を含めたより積極的な交流を図りたいと考えている。

北白川試験地

課 題

1. 施設

本試験地は、主に樹木実習用見本林としての役割を担っているが、年々樹木園の高年齢化に伴う風倒木の危険性が増加し、この処理に迫られている。全体として高齢化した危険な風倒木の除去と、同種の若令木の更新が必要である。

2. 人員

現在の陣容は、試験地長 1・技術長 1・技術職員 2 である。現在のままで充足していると評価できる。

3. 予算

高齢化した危険木の除去は、直営では技術職員に危険が伴うので、風倒可能性のある木の強剪定や伐倒作業を業者委託する費用を必要としている。

展望（将来計画）

1. 施設

高齢化した危険木の除去と、同種の若令木の更新作業を、予算との絡みで、出来る範囲で着々と行いたい。次期中期計画中に完了することを予定している。

2. その他

本試験地は、大学の北部構内に位置しており、貴重な憩いの場所として大学全体に貢献することができる可能性を持っている。今後はこの機能の充実のために、ベンチなどの設備の充実を図りたい。

徳山試験地

課 題

1. 施設

過去からの設置目的が変化してきているので、設置目的の明確化が必要である。

2. 教育・研究設備

教育研究利用者数が少ないので、利用者数の増加を促す企画を行う必要がある。この点を改善すべく、文化庁の「ふるさと文化財の森構想」に積極的に参加し、「ふるさと文化財の森－檜皮供給林－」の整備事業を開始した。

3. 人員

管理・運営のための職員数の減少が深刻な問題である。

4. 予算

森林系施設の全体的な予算減をうけて、元々予算規模が小さいためにその影響は大きい。地域や外部からの資金獲得に努める必要がある。

展望（将来計画）

1. 施設・設備整備

全国大学演習林協議会の文化財科研による研究利用が行われ、ヒノキ林から檜皮を採取する試験が行われるようになった。平成 17 年度には、昭和 2 年植栽のヒノキ造林地において、(社)全国社寺屋根工事技術保存会の桧剥皮技術研修が行われ、檜皮(荒皮)859kg が採取され 46,901 円で保存会に売却された。

平成 15 年度には開講していたポケゼミが、教員の移動等により開講されなくなったが、これを復活させる計画を立てている。

2. 予算の確保

森林系施設として、全体から見た十分な対応が必要である。一方で、外部資金獲得への努力が必要である。

3. 人員の充実

やはり作業等に応じた複数の職員が必要である。一人での作業等は危険であることから、少なくとも技術職員 2 名体制は必要である。

紀伊大島実験所

課 題

1. 施設

研究棟ならびに実習・講義棟、格納庫についてはセンターへの移行に伴い、若干の整備が行われたが、その際に見送られた構内道路や旧官舎の劣化や腐朽がはなはだしい。

2. 教育・研究設備

センターへの移行に伴い、かなりの規模で改善された。

3. 人員

古座川プロジェクト開始と長期展開に伴い、現地専任教員ならびに技術職員の不足が否めない。

展望（将来計画）

1. 施設・設備整備

来るべき南海・東南海地震に備えた耐震補強、古座川プロジェクトならびに黒潮文化資料館開設のための準備、構内道路の整備を計画している。

舞鶴水産実験所

課 題

1. 施設

下記のような問題があげられる。

- (1) 実習宿泊棟のボイラー能力が大幅に不足しており、実習シーズンには温水の供給能力が足りずにシャワーのみの利用に限定され、実習生全員が入浴を終えるのにかなりの時間を要する。
- (2) 女性利用者が増大しているが、女性用トイレが不足している。
- (3) 調査船係留用鋼鉄製浮き桟橋が老朽化しており、数年後には穴が空いて海水が進入し、使用不能となる可能性がある。
- (4) 調査船緑洋丸は平成2年に建造されかなり老朽化してきた。今後故障等が増加することが考えられ、維持費の増大が懸念されるとともに安全性の観点からも重要な問題である。また、より浅海域での調査に使用している白浪丸、ブルーフィンの2隻の小型船も非常に老朽化している。
- (5) 高圧受電設備について、経年劣化による電気的性能の低下により事故に至る確率が高くなるため機器の更新が必要である。
- (6) その他：大型水槽などの飼育機材が野ざらしになっており劣化が著しい、研究棟の調査機材洗い場の周りが未舗装のため使いにくい、一部フェンスのない場所があり人や動物（イノシシなど）が侵入する、などの問題が残されている。

2. 教育・研究設備

- (1) 海産生物飼育実験のための海水ろ過設備は、設置後20年以上経過しており老朽化が極めて著しい。本設備が故障すると全ての飼育生物が短時間に死亡し、利用者の計画に大きな支障を生じる。また、現在のろ過能力は毎時4トンしかなく、慢性的な海水不足に悩まされている。
- (2) オートアナライザー、クロロフィル分析装置、シーケンサー、走査型電子顕微鏡、超微量天秤、凍結乾燥機、多項目水質計など、フィールド施設として必要な高度調査・分析機器がいまだに整備されていない。

3. 人員

助手の予算定員は3名であるが2名しか配置されていない。3人目となる森林系の助手が平成16年度から在籍しているが、平成18年度末までの予定である。森里海連環学に対応した実習および高等学校の実習などを受け入れ始めたことにより、実習の負担が大きく増大しており、助手3名体制の確立が強く望まれる。

4. 予算

教員による科学研究費補助金を中心とした外部資金の獲得額はかなり増加した。しかし、運営交付金だけでは水産実験所の維持そのものが困難であり、維持費に外部資金を持ち出さざるを得ない状況にある。このため、教育

研究機材の整備などに支障が生じている。また、京都キャンパスで開催される会議（本部関係、農学研究科関係、フィールド科学教育研究センター関係）や講義（全学共通科目）へ参加するための旅費が全く支給されないことから、相当額の旅費を水産実験所予算から支出している。これは本来あるべきことではない。

5. その他

京都キャンパスでの会議等が多すぎて、教員によっては一人で年間 70 往復を越えることがある。上記の通り予算的にも、また時間的にも極めて大きな負担である。

展望（将来計画）

1. 施設

- (1) 実習宿泊棟のボイラー能力を大幅に増大させる。
- (2) 実習宿泊棟に女性用トイレを増設する。
- (3) 緑洋丸用鉄製浮き桟橋を大規模修繕する。
- (4) 調査船緑洋丸を大規模修繕し、将来的には代船の建造を目指す。また、白浪丸、ブルーフィンについても代船の整備を目指す。
- (5) 高圧受電設備機器の更新をする。
- (6) 飼育機材倉庫の設置、洗い場周辺の舗装、境界全域にフェンスを設置する。

2. 教育・研究設備

- (1) 海水ろ過設備を更新し、濾過能力を毎時 10 トン以上とする。
- (2) 高度調査・分析機器の整備に努める。

3. 人員

助手の 3 名体制を実現する。

4. 予算

水産実験所の維持に足るだけの運営交付金の確保に努める。大型プロジェクト（外部資金）を確保し、高額な高度研究機器の整備をはかる。また、京都キャンパスで開催される会議等については、主催部局が旅費を支給する制度を求める。

5. その他

京都キャンパスで開催される会議への往復を減らすために、テレビ会議システムを整備し普及させる。

瀬戸臨海実験所

課題

1. 設備

(1) 水族館の整備

瀬戸臨海実験所には、一般公開されている水族館が併設されている。水族館にかかわる建物は、平成 4 年に改築されているが、臨海地域に設置されていること、常時内部で海水を用いていることなどから、すでにより老朽化が進んでおり、職員のみならず観客に対しても安心安全の観点から問題が生じつつある。特に近年行っている水族館解説ツアーでは、水槽の裏側を見せることと行っており、このような活動に対応した施設の整備が必要である。

(2) 宿泊棟の整備

現在の宿泊棟には、エアコンが整備されていない。これは、周辺海域で造礁珊瑚の生育が観察できるような夏季にきわめて高温になる気候に立地している瀬戸臨海実験所の宿泊設備としては、利用者に大きなストレスを与えているといえる。周辺の臨海実験所（神戸大など）の宿泊設備には、エアコンが設置されていることから、現在の標準から大きく遅れているといわざるを得ない。また冬季に東南アジアなどから瀬戸臨海実験所を訪れる外来研究者にとっても、暖房のない宿泊設備は苦痛である。これらのことを考えると、早急に空調設備を整える必要がある。またこれに伴って、電気容量が不足するため、関連設備も整備の必要がある。

(3) 実習室・研究室の狭隘化

現在の実習研究棟の広さは、必ずしも十分ではない。特に理学研究科海洋生物学分科の学生が増えつつある現状から、研究スペースを増やす必要があり、また実習についても、現在のスペースでは、学外からの利用のニーズに十分応えることができなくなっている。したがって、これらの目的に沿った建物の新営が望まれる。

2. 教育・研究設備

(1) 船舶

ここ数年で教育研究に必要な高度研究機器はかなり整備されてきた。しかし最も基本となる船舶については大きな問題が残っている。主力の船舶であるヤンチナは、すでに耐用年限に近づいており、安心・安全な学生・研究者の教育研究環境を提供するという臨海実験所の本来の機能に重大な懸念がある。また、船舶そのものの機能も現在の高度化した海洋観測を支えるには全く不十分であり、十分な教育と研究に貢献できる状況ではない。

(2) 水族館駐車場・改札等

水族館の利用者のうち、自家用車による来館者は以前に比べて圧倒的多数になっている。一方駐車場は狭隘であり、十分なスペースがとられていない。さらに、水族館の観覧以外の目的で利用されるケースが多く、頭の痛い問題となっている。

水族館の入館者に対して現在は自動発券機で発券を行っているが、その後の改札は事務職員が担当している。人員の減少に伴い、常時改札に人がいる体制にはなっていないので、改札は事務職員の業務の合間に実施されており、きわめて非効率な状況となっている。

水族館の心臓部である、ポンプ・熱交換器などはどれも建物と一緒に整備されたもので、すでにほとんどのものが耐用年限を迎えており、早急な更新が必要である。

3. 人員

フィールド研発足当時、瀬戸臨海実験所には教員が6名いたが、そのうちの1名が現在定員削減の影響で欠員となっている。今後この欠員を早急に補充することが必要である。

また技術職員は現在船舶2名水族館4名の体制であるが、他の水族館に比べて一人当たりの飼育点数がはるかに多い。今後技術職員の定員削減がさらに進む可能性があるが、瀬戸臨海実験所については、これ以上の削減は施設の閉鎖につながりかねない。

4. 予算

瀬戸臨海実験所の予算の多くの部分が、水族館の維持管理に使われている。その額は水族館維持費として配当されている額を上回っており、臨海実験所本来の教育・研究のための予算をつぎ込んで、水族館を維持しているというのが、現状である。したがって、水族館の維持に必要なコストに見合う予算の配分が必要である。また、予算は何らかの査定がおこなわれているものと思われるが、入館者数の増加・減少と水族館維持費との関係がはっきりしないため、入館者数を増やす努力に水を差す体制であり、入館者数と予算とが連動するような仕組みが望まれる。

5. その他

瀬戸臨海実験所には、世界的に見ても貴重な図書のコレクションがある。このコレクションの維持と管理は、実験所の予算の大きな部分を占めている。一方、将来の発生が確実とされる南海地震が発生した場合、それに伴って臨海実験所を襲うであろう津波は、この貴重な図書に壊滅的な被害を与えるであろう。

瀬戸臨海実験所は伝統的に系統分類学の研究を推進してきた。その研究成果として、模式標本が多数保存されている。これらの標本の管理も臨海実験所の世界的な義務であるが、図書同様の危機にさらされている。

これらのものを、適切に保存・管理するために、十分な耐震性と津波の被害からも守ることができる高層の建物を早急に新営する必要がある。

展望（将来計画）

1. 設備

建物の新営・営繕などについては、学内の営繕・概算要求・総長裁量経費などで実現を図りたい。水族館の営繕がもっとも優先課題だが、建物の新営（実習・研究棟と水族館の増築）も、南海地震の発生が懸念される中、重点的な課題である。

2. 教育・研究設備

船舶の更新を最優先課題として取り組んでいきたいと考えている。これについては、金額からは特別設備費以外考えにくい、なかなか実現は難しい。しかし教育にも必須であり、安心安全な教育という面からは極めて重要な問題であるということを前面に打ち出して、実現を図りたい。

3. 人員

もっとも重要な課題は、技術職員の確保である。この点については、フィールド研内の技術職員組織と十分な連携をとりながら、定員の確保に努めたい。

4. 予算

水族館関係の維持費と入館者数との連動を実現し、瀬戸臨海実験所全体として入館者数の増加を目指すことによって、本来の運営費交付金の配分根拠に沿った予算の使用が可能となるよう、努力をしたい。また、間接経費のある外部資金を積極的に獲得することによっても、運営費交付金の増額につなげていきたい。

5. センター教員による自己点検

森林生物圏部門

■森林生態保全学分野

助教授 徳地 直子

1. 教育活動

以下の通り担当した。

(1) 全学共通教育

- | | |
|----------------|----------------------|
| ・ 森里海連環学（リレー） | 分担（平成 16, 17 年度） |
| ・ 生物圏の科学（リレー） | 分担（平成 15, 16, 17 年度） |
| ・ 森里海連環学実習 III | 分担（平成 15, 16, 17 年度） |
| ・ ポケットゼミナール | 担当（平成 16, 17 年度） |

(2) 学部教育

- | | |
|--------------|-------------------|
| ・ 森林育成学 | 担当（平成 15 ～ 17 年度） |
| ・ 森林科学Ⅳ（リレー） | 分担（平成 15 ～ 17 年度） |

(3) 大学院教育

- | | |
|---------------|-------------------|
| ・ 森林育成学特論 | 担当（平成 16 年度） |
| ・ 森林育成学演習 | 担当（平成 15 ～ 17 年度） |
| ・ 里海生態保全学専攻実験 | 担当（平成 16, 17 年度） |

(4) 他大学での講義

- | | |
|----------------------|--------------|
| ・ 京都府立大学「森林生態系生態学特論」 | 担当（平成 16 年度） |
|----------------------|--------------|

森林生態保全分野には、平成 17 年度の段階で大学院生として、修士課程 3 名、博士後期課程 9 名の 12 名が所属した。大学院生の研究指導、和歌山研究林としての実習指導、農学部科目、全学共通教育科目、とくにポケットゼミナールを毎年提供するなど、十分な教育活動を行ったと評価している。

2. 研究成果

平成 15 年度は原著論文国際誌 6 編、国内誌 3 編、学会発表 3 編、平成 16 年度は原著論文国際誌 4 編、学会発表 5 編、平成 17 年度は原著論文国際誌 2 編、学会発表 8 編の研究成果を報告した。第 51 回日本生態学会最優秀ポスター賞、優秀賞 2 編を、指導している大学院生および共同研究者とともに受賞した。また、18 年 2 月には京都市総合環境学研究所において、International Long Term Ecological Congress, East Asia シンポジウムを開催し開催委員を務めた。この様に活発な研究活動を展開し、十分な研究成果を報告したと評価している。

3. 社会貢献活動

自治体等の委員として以下の役割を果たした。京都市環境審議会委員（平成 16、17 年度）、天王山森林整備推進協議会会長（平成 16 年度～）、西山森林整備協議会会長（平成 16 年度～）。また、社会貢献としては、ANA との共催による青空塾や自然大学、有田川町立八幡小学校、有田川町立田鶴小学校など多くの講師を務めた。以上、社会貢献活動においても十分な実績を上げていると評価している。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

平成 15 年度から 17 年度まで教育プログラム委員会の委員を務めた。森林系において部局の運営について検討し、フィールドセンターのミッションである海里森連環学の為の科学研究費申請書類を作成するなど、フィールド科学教育研究センターにおける役割は十分に果たしていると評価する。

助手 嵩元 道徳

1. 教育活動

学部教育については、研究林実習（森林科学 2 回生対象）、森林総合実習及び実習法（森林科学科 3 回生対象）などを毎年行っただが、評価はまずまずといったところである。一方、大学院教育については、森林科学専攻・森林育成学に所属する博士課程院生 3 名の研究指導を行ってきた。学位取得へ向けて、さらなる指導に努める必要がある。

2. 研究成果

研究成果については、原著論文4編、口頭発表8編を公表した。大スケールで膨大な労力とデータ量を要する植生学分野にあって、新たな仮説提示を含む成果を国際誌などへ複数公表した点は評価されてもよいであろう。ただ、口頭発表した分を原稿に変える努力は、今後必要である。

3. 社会貢献活動

社会貢献としては、上賀茂試験地で春、秋、冬に行っている一般公開、芦生研究林で行っている公開講座、全国演習林協議会関連の技術職員研修、京都市立高等学校理科教員研修、NPO シニア自然大学など幅広い市民層に対する森林教育の講師を務めたが、並の貢献はしたと考える。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

センター内では、広報委員を勤めニュースレターの企画・編集を行い、年3回発行に努めてきた。一方、森林系内だけのことを述べると、森林生態研究プロジェクト・リーダーを勤め、全研究林・試験地での大面積生態学研究調査区の設定や各種生態学的調査の立案・指導を行ってきた。統一規格で全研究林・試験地に大面積調査区を設置し、着実にデータを収集できるようにしたことは画期的であり、評価されてよいと考える。データベース化や論文等によるデータ公表を進める必要があり、目下、取り組んでいる。

■森林資源管理学分野

教授 竹内 典之

1. 教育活動

フィールド科学教育研究センター（以下、「フィールド研」という）森林生物圏部門森林資源学分野教授として、森里海連環学（リレー講義、平成16,17年度）、海域陸域統合管理論（リレー講義、平成17年度）、森里海連環学実習（夏の北海道実習）（平成15～17年度）、「森林資源学セミナー」（新入生向け少人数セミナー、平成15年度）、「道東根釧地方の自然」（新入生向け少人数セミナー、平成16年度）、「“森は海の恋人”の故郷に学ぶ」（新入生向け少人数セミナー、平成17年度）、「京都大学に木造り校舎を造る」（新入生向け少人数セミナー、平成17年度）の講義や実習を担当し、フィールド研が目指す森里海連環学の創生の必要性や森里海の健全な連環を取り戻す上で森の保全とくに近年の管理圧の低下から劣化の激しい人工林や自然度の低い二次林の保全が不可欠であることを講義・討論・実地見学等を通して教育してきた。

また、大学院農学研究科森林科学専攻森林資源学講座（協力講座）森林情報学分野教授として、森林情報学特論Ⅰ（隔年開講、平成16年度）、森林情報学専攻演習（平成15～17年度）、森林情報学専攻実験（平成15～17年度）を担当し、3年間で修士7名、博士2名を社会に送り出した。

さらに、京都大学農学部併任講師として、森林基礎科学Ⅳ（平成15～17年度）、演習林実習Ⅰ（平成15年度）、雪氷学基礎論（平成15～17年度）、研究林実習Ⅲ（平成15,16年度）、研究林実習Ⅳ（平成15,16年度）、森林科学演習（平成15～17年度）など多くの講義・実習を担当し、森林科学とくに森林施業論の基礎教育にあたってきた。

2. 研究成果

フィールド研が目指す森と里（川）と海の新たな連環システムの構築には、森の保全とくに近年の管理圧の低下から劣化の著しい人工林や自然度の低い二次林の保全が不可欠である。平成15～17年度には、人工林の保全技術体系の確立に向けて、a. スギ・ヒノキ人工林の密度管理とくに長伐期高品質大径材生産のための密度管理に関する研究 b. スギ・ヒノキ人工林の針広混交林への転換の可能性に関する研究 c. 広葉樹人工林の造成に関する研究の成果を日本森林学会、IUFROなどで発表し、森林研究や森林応用研究に論文として取りまとめた。

3. 社会貢献活動

芦生研究林公開講座、フィールド研創設記念シンポジウム、ゼロエミッション研究会、木造建築振興シンポジウム、仁淀川シンポジウムなど数多くの機会に、森里海連環学の現代的意義や森の保全・間伐の必要性について講演した。

平成16年12月21日に全日本空輸株式会社との「森・里・海的环境再生教育に関する合意書」の提携以来、各地で展開された全日空「私の青空・森づくり」においてフィールドセミナーを開講した。

京都府教育委員会からの依頼により、科学探偵士として小学校2校において「植物の不思議」について講義した。

また、京都大学主催のシニアキャンパス・ジュニアキャンパス、フィールド研主催の時計台対話集会などにおいてもある程度寄与できたのではないかと考える。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

広報委員会委員長・企画情報室室長として各委員・企画情報室員の協力の下、「年報」や「ニュースレター」の発行にあたりとともにフィールド研の諸活動に関する情報収集、広報活動を行ってきた。

総合博物館春季展示企画委員会委員長として、平成16年6月1日～8月29日に京都大学総合博物館平成16年度春季企画展「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦－」をフィールド研全構成員の協力の下に開催した。期間中の入館者は1万人を越え、成功裡に終えることができた。また、企画展図録として「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦－」を発行することができた。

本部棟新営ワーキンググループ長としては、法人化など大学内外の諸事情もあってほとんどその機能を果たせなかった。

助教授 安藤 信

1. 教育活動

フィールド研の全学共通教育として、平成16年度より「ボケゼミ（森林の更新と動態）」を開講し、平成17年度からは「森里海連環学実習Ⅱ」を分担した。

学部教育としては農学部森林科学科3年生対象の「森林植物学」を担当し、リレー講義「森林基礎科学Ⅳ（森林の更新と環境）」、農学部提供の全学共通科目であるリレー講義「生物圏の科学（世界の植生・森林）」を分担した。実習は「研究林実習Ⅰ」、「森林総合実習及び実習法」、16年度からは「研究林実習Ⅲ」、「研究林実習Ⅳ」を分担した。大学院教育は、隔年で行われる「森林育成学特論Ⅱ」を分担し、「森林育成学専攻演習」、「森林育成学専攻実験」を担当し、2名の修士課程学生の指導を行った。

森林科学科の講義、実習に加え、フィールド研としての全学共通科目あるいは北海道で行われている実習に参加することになり、その準備やテキストづくりに多くの時間を費やした。しかし、少人数から森林科学科のきめ細かな講義、実習に加え、他学部の学生までを加えた全学科目の講義によって、フィールド研究の重要性を多くの学生に理解してもらえたものと思う。しかし、遠隔地勤務のため、森林育成学研究室の学生や院生に十分な指導はできなかった。

2. 研究成果

芦生研究林で長期大面積に行われている天然林調査、二次林調査、京都市周辺の森林の変遷とマツ林の再生技術、総合地球環境学研究所「乾燥地域の農業生産システム及ばす地球温暖化の影響」プロジェクトの共同研究員として取り組んでいるトルコ南部チクロバ平野領水域の温暖化に伴う森林植生に及ぼす影響に関する成果を、日本森林学会、日本生態学会、東アジア生態学会で発表し、総合地球環境学研究所所内誌、「森と里と海のつながり」及び「森林フィールドサイエンス」の2つの書籍で報告した。20年あまり継続している京都北山・八丁平湿原周辺森林の遷移に関する報告書、芦生、上賀茂のメタセコイア人工林の林分構造、現存量等に関する論文を作成した。

新たに始まった教育、北海道研究林の管理・運営や社会貢献の中で、期間内に十分な研究成果があげられなかったと考える。

3. 社会貢献活動

芦生公開講座における森林内での講義、国有林（京都）の景観保全に関する森林施業、モニタリングに関する提言を行った。京大博物館におけるフィールド研の企画展示では3枚のパネルを制作し、森林関係の展示物の説明を行った。北海道研究林では、標茶町林業推進協議会委員、標茶町緑化推進委員としての活動をはじめ、釧路支庁の地域政策推進事業「きれいな水を育む森林づくり事業」における講演、あるいは職員とともにANA、標茶町との共催の植樹祭への参加、近隣の小中学生等の野外教室等への協力や施設の開放を行った。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

平成16年6月まで北白川試験地長、7月からは北海道研究林長となった。北海道では年3回の実習の受け入れをはじめ、利用者の拡大、施設やフィールドの整備を行った。

研究プログラム委員会に属するが、十分な活動はできていない。

助手 坂野上 なお

1. 教育活動

全学共通教育として、平成 16 年度に「森里海連環学実習Ⅱ」を分担した。本実習は、本センターの北海道研究林および近隣河川、北海道大学厚岸臨海実験所を利用して、河川を媒介として森林と海との繋がりを実感する内容となっており、森林科学、海洋生物学などを専攻する多彩な学生達が対象であった。なかでも森林系の実習として、標茶区の天然林において毎木調査を行い、その際の指導を担当した。

農学部教育として平成 15～16 年度に「森林総合実習および実習法」、平成 16 年度に「研究林実習Ⅲ」を分担した。「森林総合実習および実習法」は、森林科学科 3 回生を対象に行うもので、うち 1 日かけて京北町（現京都市右京区京北）を廻る見学実習（森林、製材工場、プレカット工場等を訪問）の企画および引率を担当した。「研究林実習Ⅲ」は北海道研究林の白糠区、標茶区を利用して北海道東部の自然観察と森林調査の基礎を学ぶもので、やはり森林科学科 3 回生が対象である。北海道東部の天然林と人工林の双方における調査、雄阿寒岳登山の指導等を行った。

2. 研究成果

4 編の口頭発表要旨・研究成果報告書等を出版した。

3. 社会貢献活動

京都大学公開講座「森のしくみと働き」において、講師として一般市民を対象に自然観察実習の指導等を行った。大学等地域開放特別事業「ウッズサイエンス」（和歌山県立有田中央高校清水分校共催）講師を担当し、高校三年生を対象に森林・林業の基礎に関する講義を行った。

和歌山県清水町教育委員会主催「海山探検隊 山観察会」において講師を担当し、和歌山研究林内における自然観察の指導を行った。

有田郡清水町立八幡小学校「森林作業体験」において講師を担当し、和歌山研究林内における自然観察の指導を行った。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

社会連携委員会委員として活動を行った。

■森林環境情報学分野

助教授 芝 正己

1. 教育活動

該当期間における教育活動は、フィールド科学教育研究センター主体の講義・実習メニュー、協力講座である大学院農学研究科森林科学専攻森林資源学講座・森林情報学分野の講義・実習メニュー、講師併任である農学部森林科学科の講義・実習メニューに基づいている。フィールド研部門としては、全学部・回生を対象として、森林系、里域系、海洋系の各教員が連携して野外実習方式による「森里海連環学実習Ⅰ（森林系分担）：全学共通科目 B 群」、全学部・一回生を対象として、ゼミ・野外実習の組み合わせによる単独の B 群少人数セミナー「世界の森林、日本の森林、現在・未来！」を担当した。従来のカリキュラム編成や実施方法に囚われない自由で活発な講義・実習が行えたと思う。ただし、講義内容、提供資料・教材、野外実習スケジュール・日程、支援体制等は今後改善すべき点であると思われる。

次に、農学研究科森林科学専攻の大学院教育部門としては、森林情報学研究分野竹内教授の下、「森林情報学特論Ⅱ（単独講義）」、「森林情報学専攻演習（分担）」、「森林情報学専攻実験（分担）」をそれぞれ担当した。研究室のゼミや個人指導を通して、課題研究の作成支援や進路就職指導、また、学内外の研究会やボランティア活動等への参加を支援した。その結果は、研究職や公務員、民間企業への就職等、当該研究分野の卒業生の就職面での成果として現れた。今後、民間企業でのインターンシップの積極的な活用、海外の大学・研究機関等での中短期的研修、留学機会の提供等、現実的かつグローバルな視点を持つ学生の養成を課題とするつもりである。

学部教育部門としては、「森林管理システム及び応用技術論（単独講義）」、「森林総合実習及び実習法（分担実習）」、「森林科学実習Ⅳ（単独実習）」、「研究林実習Ⅰ（分担実習）」を担当した。講義内容の充実を目標に、教材・文献資料の編集や収集方式、対話型の質疑応答の講義、必要に応じた外部専門家の話や検討会の導入、英語表現・専門用語を多用した和英バイリンガル講義等、工夫を凝らしたものとした。これらは該当評価期間を通して一応の成果が出たものと思われる（定期試験での学生評価・コメントによる）。今後、その素養や経験、興味、理解度等、

様々なレベルの学生をいかに平準化してその質を高めていくかに力点を置きたい。なお、学外での教育活動の一環としてこれまでに、名古屋大学、愛媛大学、三重大学、琉球大学、京都府立大学での非常勤講師、韓国林業試験場での特別講師等を行っている。

2. 研究成果

研究活動の実績は、日本森林学会、森林利用学会、森林計画学会等の学会会員、ミュンヘン工科大学 TUM、スイス連邦工科大学 ETH との共同研究、米国 COFE 会員、IUFRO 役員、FSC 国際会員としての海外学会活動の成果であり、京都大学での学内講義、三重大学・名古屋大学・愛媛大学・琉球大学・京都府立大学等の学外講義の基礎資料となっている。

これまでの主要な研究テーマを大別すると、①長伐期育成循環型人工林の収穫計画・配分シミュレーションモデルの開発、②日本型森林認証・ラベリング制度の運用システムの構築、③持続可能な森林管理 SFM への森林認証及び作業コード FPC の互換性の検討、④森林作業への潜在的補助労働資源としてのボランティアの評価、⑤高解像度衛星画像データとオブジェクト指向型判別ソフトによる林層構造・サイトの評価、の通りである。評価期間中の当該テーマに関する成果は、著書（共著分担）：2、原著論文：28、報告・その他：14 として公表した。また、これらの研究に関した外部からの研究助成支援（外部資金）として、(独) 日本学術振興会 科学研究費 基盤 C (一般) 代表 2004-2005 年度「日本型 SFM を指向した適応型人工林管理システム (AFMS) の構築、(株) アサヒビールアサヒビール学術振興財団研究助成代表 2004-2005 年度「日本型森林認証・ラベリング制度の運用システムの構築、(財) 森公弘済会代表 2003-2004 年度「長伐期育成循環型施業を志向した人工林の新たな収穫計画・配分モデルと解析システムの開発、を得た。今後の課題として、フィールド研の目指す「森里海連環学」を具現化する研究、例えば、モデルフォレスト展開のための評価基準・指標の検討、環境保全型森林・水域の利活用モデルの検討、流域管理システムのための機能区分・ゾーニング法の検討に取組む必要がある。

3. 社会貢献活動

社会連携としてフィールド研が主催あるいは協賛する諸活動に参画して来た。主要なものを列举すると、芦生研究林公開講座、大学地域開放特別事業「森林体験学習 ANA 私の青空」、美山町小学校合同自然体験教室「美山っ子グリーン・ワールド」、文科省「豊かな体験活動推進事業 WOSI」、北桑田高校「郊外森林体験実習プログラム」、JTB カルチャーサロン (第 3 回)、SPP 事業「森林環境教育のワークショップ」、府下森林組合「グリーン・ワーカー」研修、シニア大学等である。その他、この間に相当数の一般開放事業が行われ、その企画実行に加わった。今後、芦生研究林の利用希望は増加するものと思われるが、教材資料の作成、案内説明等の技術的向上が必要である。なお、その他の主要な学外での社会連携活動として、「森林認証制度」の普及に深く係わっており、FSC 国際森林認証審査委員、国内認証機関の技術顧問、NPO 法人日本森林管理協議会理事を兼務している。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

フィールド研における常設委員会のメンバーとして、創設記念式典企画委員会委員、遠隔講義システム等整備ワーキンググループ委員、研究プログラム委員会委員を務めてきた。ただし、その活動は必ずしも十分ではなかった。なお、その他全学委員として学術環境機構運営委員会 (旧学術情報メディアセンター学内共同利用運営委員会) 委員を担当。

講師 中島 皇

1. 教育活動

平成 15 年度

全学共通教育：原生的な森林の利用と管理 (ポケゼミ)、森里海連環学実習

学部教育：雪氷学基礎論、森林科学実習Ⅳ、森林総合実習及び実習法、森林科学演習、食料環境経済学実習

大学院教育：森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

他大学等：フィールドワーク (京都造形芸術大学)、地域資源管理学演習 (名古屋大学)

平成 16 年度

全学共通教育：森里海連環学－森は海の恋人か？－、暖地性積雪地域における冬の自然環境 (実習)、原生的な森林の働き (ポケゼミ)

学部教育：雪氷学基礎論、森林科学実習Ⅳ、森林総合実習及び実習法

大学院教育：森林情報学特論Ⅰ、森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験

平成 17 年度：

全学共通教育：森里海連環学－森は海の恋人か？－、暖地性積雪地域における冬の自然環境（実習）、原生的な森林の働き（ボケゼミ）

学部教育：雪水学基礎論、森林科学実習Ⅳ、森林総合実習及び実習法

大学院教育：森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験、大学院生による「昆虫科学とフィールド研究」シンポジウム

2. 研究成果

7 編の講演要旨、報告書等に研究成果を発表した。

3. 社会貢献活動

平成 15 年度：公開講座「森のしくみと働き」、亀岡市地球環境こども村自然体験教室、綾部市立豊里小学校総合学習

平成 16 年度：亀岡市子ども環境会議トータルアドバイザー、総合的な学習の時間（京都市立市原野小学校）、出前授業（亀岡市立育親中学校）、レクチャー＆ガイド（総合博物館平成 16 年度春期企画展）、森と里と海のつながり（JTB カルチャーサロン）

平成 17 年度：春の自然観察会、秋の自然観察会、冬の炭焼き体験会（上賀茂試験地）、森と里と海のつながり（JTB カルチャーサロン）、環境教育プログラム（大伸社）、フィールドセミナー（全日空・私の青空、山口宇部）

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

施設長（芦生研究林長、上賀茂試験地長）として、各施設の運営・管理にあたった。センターにおける常設委員会であるナラ枯れシンポジウム実行委員会、社会連携委員会、教育プログラム委員会の各委員を務めた。また、21 世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」の拠点メンバーとして、フィールド教育プログラムを企画したり、国際シンポジウムに参加した。

里域生態系部門

■里山資源保全学分野

助教授 柴田 昌三

1. 教育活動

フィールド科学教育研究センター里域生態系部門里山資源保全学分野及び地球環境学堂地球親和技術学廊景観生態保全論分野両任助教授として、前者では森里海連環学（リレー講義、平成 16、17 年度）、「京都大学に木造り校舎を造る」（新入生向け少人数セミナー、平成 17 年度）の講義を、後者では景観生態保全論、里山再生論、野外実習を担当した。いずれにおいても、フィールド研及び地球環境学堂が目指す、里山環境に関する考え方の整理とその実践を教育してきた。

また、大学院農学研究科森林科学専攻森林資源学講座（協力講座）森林育成学分野助教授として、森林育成学特論Ⅱ（隔年開講、平成 15、17 年度）、森林育成学専攻演習（平成 15～17 年度）、森林育成学専攻実験（平成 15～17 年度）を担当した。

さらに、京都大学農学部併任講師として、森林基礎科学Ⅳ（平成 15～17 年度）、緑地植物学（平成 15～17 年度）など多くの講義・実習を担当し、森林科学及び造園緑化工学分野の基礎教育にあたってきた。

2. 研究成果

里域に相当する分野を研究対象地として、緑化あるいは植生管理の観点からさまざまな研究を行った。その対象は里山においては竹林や二次林、植林地が対象となり、調査対象地は京都を中心として天王山や北山林業地域、あるいは京都大学上賀茂試験地である。また、開発に伴う自然の喪失に対する対策として、二次林植生のそのまま移植の試み（第二名神高速道路施工現場）や喪失の激しい海岸植生の保全のための試み（関西国際空港二期島）などにも参画している。これらの成果は日本森林科学学会、日本生態学会、日本造園学会、日本緑化工学会などで発表するほか、随時論文として公表した。

3. 社会貢献活動

学外からの多様な要請に応え、毎年平均 10 件程度の講演活動を行ってきた。そのテーマは竹林管理、里山管理、緑化工学、などが主である。また、学外のいくつかの NPO 組織等に所属し、活動を行った。それらには、JICA の支援を得て行ったネパールにおける環境教育活動のほか、国内では竹資源の有効活用を模索するためのコンソーシアムのアドバイザーとしての活動などがある。また、京都府、京都府井手町、などが組織する種々の委員会の委員長あるいは委員としての活動も多数行った。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

地球環境学堂における職務が第一の本務であったため、フィールド研に関しては研究プロジェクト委員会委員、本部棟新営 WG 委員としての活動にとどまった。また、平成 16 年 6 月 1 日～8 月 29 日に開催された京都大学総合博物館平成 16 年度春季企画展「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦－」においては、構成員の一人として出展、企画に協力した。

講師 西村 和雄

1. 教育活動

全学共通教育については、リレー講義の形式で、3つの科目を受け持っている。学部および大学院教育については、この間、博士課程を指導し、芦生研究林で毎降雨と降雪を三週に一度、随行して採集し、わが国に降下する黄砂に由来するリンの動態について、貴重なデータをえた。

2. 研究成果

里域資源保全の分野として、長期持続可能な農業携帯を策定するため、有機農業における特に技術的基盤を確立することに研究努力を注いだ。この分野では、都市から出る生ゴミや畜産廃棄物の有効利用と、無公害化を兼ね備えた堆肥化をすでに考案し、多くの農家が規模の大小を問わず、実用化している。また、栽培方法についても、病気や害虫、特に害虫の被害を最小限にとどめるような栽培方法の確立に向けて、研究調査を行った。その結果、巷間よく言われる「農業なしで作物の栽培は出来ない」とする、通説は、単なる通説であって、農薬を使用せずとも、ほとんど虫害を受けない栽培方法が確立できる見通しを得た。

3. 社会貢献活動

社会人教育については、とくに日本各地を巡って、農家および消費者を対象とした、有機農業における土作りや作物栽培方法など、有機農業全般に渡る技術的背景について、啓蒙活動を含めた実地教育を行ってきた。また、農業教室を毎月一回、通年で行い、滋賀県近江八幡市・福井県三方町・京都府南丹市の三カ所で実施。のべ、百五十人以上に実地教育を行った。

また、これらとは別に、各地で農民を指導し、農薬を使わずに出来る病虫害の回避方法・長期持続型の堆肥の作り方、短期間で地力のある農地にする方法などについて、指導を行ってきた。行った農家の数は、この三年間で、全国で千を越える。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

フィールド研内部では、北白川試験地の試験地長として、試験地の維持管理に関わる以外、社会貢献委員会などで委員を務めている。

■里地生態保全学分野

助教授 梅本 信也

1. 教育活動

「森里海連環のつながりを清流古座川に見る」(全学 1 回生向けボケゼミ、夏期集中・4 泊 5 日)、「植物調査法と実習」(農学 2 回生向け、夏期集中・4 泊 5 日)、「森里海連環学実習」(全学向け、夏期集中・5 泊 6 日)、「里域植生保全論」(学堂院生向け、夏期集中・3 泊 4 日)に対して、それぞれ、「優」、「優」、「可」、「優」と自己評価する。長期宿泊型で夏期に集中し、多くが私一人で行うため体力的につらいものもある。

2. 研究成果

この 3 年間は、当センターの最重要課題である森里海連環学を構築するためのモデル的存在の一つである「古

座川プロジェクト」遂行のための諸作業に、従来展開してきた照葉樹林圏文化論と黒潮圏文化論の知見を統合しながら、真摯に取り組んできた。関係住民等に対する「古座川シンポジウム」や各種報告会開催、学内外有志による古座川合同調査の展開、和歌山県、関係自治体、諸組合、企業合同の古座川流域協議会の設立などのガバナンス形成や社会貢献にも勢力を費やし、関係啓蒙書籍発行、「古座川合同調査報告書」取りまとめ、講義・実習を通じた森里海連環の視座の普及なども行ってきた。しかし、学術関係誌への投稿活動がやや停滞気味であり、忸怩たる思いである。

3. 社会貢献活動

上記研究成果に記したもののほか、日常的に地域教育関係者からの相談に応じている一方、和歌山県立看護学校の「生物学」非常勤講師担当、自治体教育委員会・各学会研修会講師活動する一方、地域の里域再興事業（例：和歌山県那智勝浦町宇久井地区、同県串本町田原地区）に脳&筋肉参加してきた。精力的だったと自己評価したい。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

当初は、過剰な委員会担当を命ぜられ、緒戦であることも相まって四苦八苦したが、最近は2-3の委員会担当となり、負担は軽減した。しかし、主に作業や相談をする京都市から遠隔であること、私が責任者である紀伊大島実験所の職員の少なさ、社会連携作業の増大のため、積極性が低減していると自己評価する。

■河口域生態学分野

教授 田中 克

1. 教育活動

全学共通教育：「森里海連環学－森は海の恋人か？」（分担2004、2005）、新入生向け少人数セミナー「氷河期の大陸遺産」（2003）、「氷河期の大陸遺産－有明海の不思議な生きものたち」（2004）、「有明海の生きものたちの危機」（2005）、「“森は海の恋人”の故郷に学ぶ」（2005）、「京都大学に木造校舎を造ろう」（2005、分担）
学部教育：「海洋生物生態学」（2003～2005）、資源生物科学概論Ⅲ（2003～2005、分担）、海洋生物資源学演習（2003～2005）、課題研究（2003～2005）
大学院教育：海洋生物資源学特論（2003、2005）、資源生物学演習（2003～2005）、資源生物学専攻実験（2003～2005）、海洋生物増殖学特論（2003、2005）
他大学での教育：滋賀県立大学「水産資源学」（2003、2004分担）、京都府立嵯峨野高校特別講義「魚の子供達不思議な生態に学ぶ」（2004）

フィールド科学教育研究センターに流動分野として移り、全学共通教育、とりわけ新入生向け少人数セミナーを複数受け持ったことは、時間的には負担となったが、新入生の新鮮な感覚から受ける刺激も多く、よかったと評価できる。ただし、もっと十分な準備をして、より教育効果を高める必要があることを痛感した。大学院の講義「海洋生物増殖学特論」は英語での講義を行い、最後には受講生全員に自分の研究内容を紹介することを試み、プレゼンテーションのトレーニングとした。

2. 研究活動

著書5編を発表したほか、2003～2005年に原著論文を42報（和文3報）出版した。そのうち30報は国際誌への発表であった。年平均14報と1ヶ月に1編を上回るペースであり、量的にも質的にも（国際誌への投稿）高い業績と評価できるが、ファーストオーサーの原著論文を1報も発表していない点は、反省すべきことと考えられる。

3. 社会貢献活動

平成15年度

- 9月25日 環境省有明海・八代海総合評価調査委員会ヒアリングにおいて「森里海連環に基づく有明再生方向」を提言
- 10月24日 滋賀県漁業協同組合連合会主催「魚が語る琵琶湖」にパネラーとして参加し、森と川と湖のつながりについて提言
- 12月12日 SEASTAR2000 ワークショップ（バンコク）において森里海連環学のめざすところを講演
- 3月5日 北海道大学北方生物圏フィールド科学シンポジウムにおいて「フィールド科学への期待」を講演

平成 16 年度

- 6 月 12 日 有明海・八代海研究者会議公開シンポジウムにおいて「河口域の魚類」を講演
- 7 月 24 日 時計台対話集会“森と里と海のつながりー“心に森”を築くにおいて「渚から森と海を思う」を講演
- 8 月 20 日 学生生活研究セミナー“少子化時代の大学教育”において「大学新入生教育としてのポケット・ゼミ」を講演
- 8 月 28 日 シンポジウム“水産研究の今、そして未来”において「生態・行動学」を講演
- 10 月 25 日 第 4 回地域ゼロエミッション研究会において「森里海連環学に自然再生の夢を託す」を講演
- 11 月 16 日 京都府立嵯峨野高校において「魚の子供達の不思議な生態に学ぶ」を特別講義
- 11 月 20 日 公開シンポジウム“有明海を科学し再生の道をさぐる”において、「大陸沿岸から“分家”した河口域生態系の不思議を探る」を講演
- 11 月 26 日 高知県海洋漁業センターにおいて「森・里・海のつながり」を講演
- 12 月 4 日 第 3 回 3 大学連携シンポジウムにおいて「京大フィールド研における森里海連環学の展望」を講演
- 1 月 19 日 第 3 回全日空環境フォーラムにおいて「森里海のつながりから木文化再生へー海の生物研究者が森を思うわけ」を講演
- 3 月 28 日 産官学連携プロジェクト「21 世紀の環境・経済・文明」シンポジウムにおいてパネル討論に参加

平成 17 年度

- 5 月 12 日 京都大学・高知大学・高知県主催“21 世紀に森・川・海が再生するために”において「森里海連環学」を講演
- 5 月 30 日 高知県橋本大二郎知事に森・川・海再生「高知プロジェクト」を提案
- 6 月 2 日 琵琶湖海区漁業調整委員会において「森里海連環学のすすめー森は海の恋人運動に学ぶ」を講演
- 6 月 4 日 産官学連携プロジェクト 21 世紀の環境・経済・文明公開シンポジウムにおいて「食文化・森里海連環学・木文化」を講演
- 7 月 16 日 全日空「私の青空 信州の森」/長野県ボランティア活動においてパネルトーク（田中知事、C. W. ニコル氏）に参加
- 7 月 23 日 第 5 回京 ECO セミナーにおいて「森里海のつながりから木文化再生へ」を講演
- 8 月 4 日 京都大学春秋講義において「森と川と海をつなぐ学問ー森里海連環学の展望」を講演
- 9 月 22 日 第 3 回木文化再生研究会“森里海連環学工務店懇話会”において「森と川と海をつなぐ学問」を講演
- 9 月 23 日 京都大学ジュニアキャンパス「森は海の恋人の世界を探る」を担当
- 10 月 23 日 市民向け公開講演会“海の生きものと人の未来：共存の道を探る”において「渚の先住人ーヒラメ稚魚のひとり言」を講演

平成 15～17 年度の 3 年間に合計 25 回の公開シンポジウムや公開講演会等において話題提供やパネラーとして、主に森と川と海のつながりや森里海連環学の普及に努めてきた。とりわけ高知県における仁淀川流域でのシンポジウムでは常に 300～400 人の入場者があり、関心の高さと広がりを実感された。これらの講演会を通じて、地域の諸団体との連携が深まった。

これらの他に、琵琶湖海区漁業調整委員、(独)水産総合研究センター養殖研究所機関評価委員、滋賀県農林水産関係試験研究外部評価委員、科学技術振興機構外部評価委員等を務めた。

4. フィールド研内での活動

平成 15～17 年度までセンター長を務め、教育・研究・社会連携を 3 つの柱に学内外にフィールド研の存在をアピールすることに努めた。特にフィールド研の理念であり目標でもある森里海連環学の普及のために総合博物館春季企画展の成功に工夫を凝らすとともに、時計台対話集会の成功と恒例行事としての定着化に努めた。大学内の委員としては、教育研究評議会委員（平成 15～17 年度）や部局長会議委員（平成 17 年度）をはじめ 10 数の委員会等の委員を務めた。フィールド研内では、教育研究評価委員会や将来計画構想委員会の委員であったが、後者は機能化させることができなかった。全体としては、研究プログラム委員会と教育プログラム委員会は継続的に活動を続けたが、助教授が委員長を務める他の委員会はほとんど開催されず、今後の大きな課題として残された。

助教授 田川 正朋

1. 教育活動

当研究室は流動分野であり、農学部・農学研究科としての講義・学生実験を担当する義務を負っている。これについては十分な貢献を行ったと自負している。一方、フィールド研としての全学共通教育は17年度にポケゼミを開講したに留まるが、研究活動とのバランスを考えると、私としてはこれ以上の担当は過分と考える。

2. 研究成果

私個人の研究としては、当該年度中に「収穫期」を迎えた研究プロジェクトが重なったこともあり、論文・学会発表ともに多くの成果を上げることが出来た。一方、森里海連環学への貢献は行えていない。フィールド研が分担している教育学研究科の科研費では、フィールド側の窓口の役割を実質的に果たしている。

3. 社会貢献活動

博物館公開レクチャー、および、平成15年度の栽培漁業中央研修会の講師を務めた。京都府教育委員会からの依頼により、科学探偵士として小学校3校において講義を行った。また、実行委員の一人として、異体類生態学国際シンポジウムの際に併せて開催した舞鶴市民向けの公開講演会を開催した。これらの多くはフィールド研関係で始まったものであり、農学研究科にのみ所属していた時と比べると、格段に社会貢献を行ったと考えている。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

フィールド研主催の異体類生態学国際シンポジウムで、裏方の中心の一人として活動した。一方、常設委員会の委員については、流動分野ということで負担を軽減してもらっており、この点は助かっている。

助手 中山 耕至

1. 教育活動

全学共通教育では、森里海連環学実習Ⅱ（分担 平成16、17年度）およびポケットセミナー2件（分担 平成16年度）を担当した。また、兼任である農学部・農学研究科では資源生物科学実験および実験法（分担 平成15～17年度）、資源生物科学基礎実験（分担 平成15～17年度）、海洋生物科学技術論と実習Ⅱ（分担 平成15～17年度）、海洋生物増殖学演習（分担 平成15～17年度）、資源生物科学基礎Ⅱ（リレー 分担 平成15～17年度）を担当した。実習、学生実験、演習を中心として助手として十分な教育活動を行ったと評価している。

2. 研究成果

魚類集団遺伝・系統、河口域魚類生態等の分野で研究を行い、成果を平成15年度に論文1編、学会発表7編、平成16年度に論文1編、学会発表7編、平成17年度に論文4編、著書1編、学会発表3編として報告した。研究内容に対して成果報告状況が悪く、より活発にする必要があると評価している。

3. 社会貢献活動

第36回日本魚類学会年会（平成15年度 京都市）、第6回国際異体類生態学シンポジウム（平成17年 舞鶴市）に実行委員会として参加した。また、日本魚類学会電子情報委員会副委員長（平成15～17年度）として活動した。しかし、社会人教育、小・中・高校生教育等には貢献できておらず、改善が必要と考えている。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

情報セキュリティ委員会（平成16、17年度）で活動した。

■海洋生態保全学分野

教授 山下 洋

1. 教育活動

以下の通り担当した。

(1) 全学共通教育

・森里海連環学（リレー）コーディネーター 分担 （平成16、17年度）

・森里海連環学実習Ⅰ	コーディネーター	分担	(平成 15、17 年度)
・森里海連環学実習Ⅱ		分担	(平成 16 年度)
・ポケットゼミナール		担当	(平成 15～17 年度)
(2) 学部教育			
・資源生物科学概論Ⅲ (リレー)		分担	(平成 15～17 年度)
・資源生物科学基礎実験 (リレー)		分担	(平成 16 年度)
・海洋生物科学技術論と実習ⅠⅡⅢ		担当	(平成 15～17 年度)
(3) 大学院教育			
・海洋生態学特論 (集中)		担当	(平成 6 年度)
・里海生態保全学演習		担当	(平成 16、17 年度)
・里海生態保全学専攻実験		担当	(平成 16、17 年度)
(4) 他大学での講義			
・滋賀県立大学環境科学部「水産資源学」		担当	(平成 15、16 年度)
・三重大学生物資源学研究科「水圏環境生物学」		担当	(平成 17 年度)

里海生態保全学分野には、平成 17 年度の段階で大学院生として、修士課程 4 名、博士後期課程 3 名の 6 名が所属した。また、短期・長期の外国人留学生 3 名（アメリカ合衆国、インド、スペイン）、外国人特別研究員 2 名（ニュージーランド、アルゼンチン）を受け入れた。大学院生の研究指導、水産実験所としての実習指導、農学部科目、全学共通教育科目、とくにポケットゼミナールを毎年提供するなど、十分な教育活動を行ったと評価している。

2. 研究成果

平成 15 年度は原著論文国際誌 6 編、国内誌 1 編、その他の論文 5 編、学会発表 4 編、平成 16 年度は原著論文国際誌 4 編、その他の論文 3 編、学会発表 16 編、平成 17 年度は原著論文国際誌 4 編、国内誌 3 編、その他の論文 5 編、学会発表 24 編の研究成果を報告した。これまでの研究業績が評価され、平成 17 年度日本水産学会進歩賞を受賞した。この他、第 29 回国際仔稚魚学会最優秀発表賞、第 6 回国際異体類生態学シンポジウム最優秀ポスター賞、第 13 回瀬戸内海研究フォーラム最優秀ポスター賞、DOBIUS 国際シンポジウム最優秀ポスター賞を、指導している大学院生および共同研究者とともに受賞した。また、17 年 10 月には舞鶴市において、第 6 回国際異体類生態学シンポジウムを開催し事務局長を務めた。この様に活発な研究活動を展開し、十分な研究成果を報告したと評価している。

3. 社会貢献活動

国、自治体等の委員として以下の役割を果たした。京都府漁業調整委員（平成 15～17 年度）、舞鶴市大学連携センター委員（平成 15～17 年度）、水産総合研究センター温暖化影響調査検討委員（平成 15 年度）、学術振興会特別研究員等審査会専門委員（平成 15～17 年度）、科学技術振興機構地域振興事業評価委員（平成 15 年度）、瀬戸内海研究会瀬戸内海再生方策検討委員（平成 16、17 年度）、全国豊かな海づくり協会ヒラメ調査検討協議会委員（平成 16、17 年度）、日本科学技術振興財団スプリング・サイエンスキャンプ運営委員（平成 16、17 年度）、国土交通省由良川下流水面利用調整委員（平成 17 年度）。また、社会貢献としては、由良川フォーラムの責任者を務めるほか、京都大学総合博物館公開講座、舞鶴地域産学連携セミナー、舞鶴市海からの見学会、綾部市学校教育研究会、JTB カルチャーサロン、国土交通省由良川懇談会、京都府漁連漁業者交流会、京都府理科教師研究会、国立少年自然の家指導者研究会、日本ボーイスカウト連盟環境学習会など多くの講師を務めた。さらに、高大連携を積極的に進めており、スプリング・サイエンスキャンプ、兵庫県立飾西高校体験実習推進事業、京都府立西舞鶴高校サイエンスパートナーシップ事業、京都府立海洋高校総合学習などを担当した。以上、社会貢献活動においても十分な実績を上げてしていると評価している。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

平成 15 年度から 17 年度まで教育プログラム委員会の委員長を務めた。フィールド科学教育研究センター発足後平成 17 年度までに、全学共通教育科目を、リレー講義である森里海連環学、海域・陸域統合管理論、実習科目として森里海連環学実習Ⅰ・Ⅱ、暖地性積雪地域における冬の自然環境、少人数ポケットセミナー 14 科目まで充実させることができた。また、海域・陸域統合管理論に対しては、日本財団の助成を受けることとなった。

担当しない科目も含め、全体のコーディネートを行った。教授会、教授懇談会において部局の運営について検討し、大型予算獲得のための申請書類を作成するなど、フィールド科学教育研究センターにおける役割は十分に果たしていると評価する。

助手 中西 麻美

1. 教育活動

全学共通教育では、森里海連環学実習 1A（芦生研究林－由良川－丹後海コース）（分担 17 年度）を担当した。農学部では森林科学実習Ⅳ、森林情報学専攻演習、森林情報学専攻実験（分担 15 年度）を担当した。異動があった 16 年度は担当を受け持つことができなかったが、担当分については十分な教育活動を行ったと考えている。

2. 研究成果

主に、上賀茂試験地におけるヒノキ二次林での小面積伐採が落葉や植生動態に及ぼす影響に関する研究を進めた。学会発表を積極的に行い、データ解析を進めたが論文投稿までには至らなかった。また上賀茂試験地をフィールドとした里山生態系に関する研究活動を内外の研究者と積極的に行った（平成 15 年度）。タイ北部のチーク林で行ってきた落葉供給と分解および林分動態に関する研究についても解析を進めて学会発表を行ったが、論文投稿までには至らなかった。総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」では、ラオス北部の焼畑フィールドの植生調査に共同研究者とともに着手し、継続して調査活動を行った。いずれのテーマについても、フィールド調査や試料処理など積極的に行い、データの蓄積を進めることができたが、発表、報告が不十分に終わった点が反省点であり、今後の改善が必要と考えている。

3. 社会貢献活動

平成 15 年度には、上賀茂試験地一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」、芦生研究林公開講座「森のしくみと働き」、シニア自然大学の上賀茂試験地見学および全国森林インストラクター会自主研修会 in 京都での上賀茂試験地見学への対応、シップ・アンド・オーシャン財団第 14 回海洋フォーラム・ワークショップ「森・川・海・空のパートナーシップ」：里から見た森・川・海・空。（パネリスト参加）などに積極的に対応を行った。平成 16 年度は、科学技術振興財団サイエンスキャンプにおいて異分野の内容ではあったが、野外調査に積極的に関わった。しかし、異動した初年度ということもあり、やや消極的だったと考えている。平成 17 年度は、特定非営利活動法人 森林再生支援センターの理事に就任し、森林ボランティアグループへの植生調査の指導（3 回）をはじめ、当センターの活動に関わった。積極的に活動できたと評価している。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

平成 15 年度は本部棟新営 WG で、図面作成および書類作成に積極的に参加したが、平成 16 年度は実質的な委員会活動がなかった。平成 17 年度は連携棟新営 WG と国際委員会の委員であったが、いずれも委員会の開催がなかった。

助手 甲斐 嘉晃

1. 教育活動

平成 16 年度：農学部実習担当。舞鶴水産実験所で開催されたボケゼミの一部に参加。農学研究科所属の学生の指導を一部担当。初年度であったため、担当は少なかった。

平成 17 年度：農学部実習担当、森里海連環学実習（由良コース）、森里海連環学実習（北海道）担当。舞鶴水産実験所で開催されたボケゼミの一部に参加。舞鶴水産実験所で行われる本学生向け実習はほぼ全て参加した。農学研究科所属の学生の指導を一部担当。三重大学学生の研究指導を一部担当。卒論生、院生の指導についてはもう少し増やす必要がある。

2. 研究成果

平成 16 年度：論文 2 報、学会発表 5 回などを発表した。海外での学会発表を行えなかったのが反省点である。

平成 17 年度：著書 1 点、学会発表 4 回など。国際学会での発表を行うことができたが、論文が間に合わなかったことが反省点である。

3. 社会貢献活動

平成 16 年度：舞鶴水産実験所で行われた一般の見学会などを担当した。他にも積極的に行う必要が感じられた。
平成 17 年度：舞鶴水産実験所で行われた一般の見学会などを担当した。また、総合博物館でのジュニアレクチャーシリーズ、高校生 SPP 実習の一部など、積極的に取り組んだ。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

平成 16 年度：特になし

平成 17 年度：広報委員、安全委員を担当。広報委員会では、フィールド研の新しいパンフレットの作成、年報の作成に係わった。安全委員会では、安全のしおりの作成に係わったが、印刷までできなかったのが反省点である。

■沿岸資源管理学分野

助教授 益田 玲爾

1. 教育活動

平成 16 年度より少人数セミナーを開講し、平成 17 年度からは資源生物学概論、平成 18 年度からは水圏生物学入門での講義を担当している。農学部海洋系臨海実習も従来通り担当している。

課題研究および大学院生については、海洋生物増殖学講座および里海生態保全学分野の学部生・院生合計 6 人の実質的な指導を担当している。

学部教育・大学院教育とも、十分な指導を行ってきたと思う。

2. 研究成果

マアジ稚魚の行動の発達について研究を進めている。水産総合研究センターから研究費を得ており、成果の一部は学術雑誌 (Fisheries Science) および学会 (日本水産学会, Larval Fish Conference) で公表してきた。

また舞鶴水産実験所周辺海域での定例目視潜水調査についても、2005 年 12 月までの 4 年分のデータについて、国際誌 (Marine Ecology Progress Series) に投稿中である。観察された魚類の写真については、実験所のホームページに掲載した。

3. 社会貢献活動

「舞鶴湾水中散歩」と題した市民向けの公開講演会を約 1 年に 1 回のペースで行っている。この他、小中学校や高校生、社会人を対象とした講演は年間 20 件程度にのぼる。さらに、水産実験所を利用しての高校生や他大学生対象の臨海実習では、シュノーケリングの講習等を担当している。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

科学委員会の委員として委員会に参加してきた。

助手 上野 正博

1. 教育活動

舞鶴水産実験所において行われた学生・大学院生を対象とする野外における実習、教育、調査について、そのほぼすべての計画段階から現場での実施ならびに事後のとりまとめを支援し、十分に職責は果たした。

2. 研究成果

原著論文 4 報、単行本 1 冊 (共著) を発表し、論文の一つは日本水産学会論文賞を受賞した。十分とは言えないが、職責は果たしたと思う。

3. 社会貢献活動

京都府北部に広く配布されているのタウン情報誌に隔週のペースで海と水生生物に関わるコラムを掲載しており、地域住民に広く親しまれている。

また、市民向け、漁業者向け、教員向けなど多くの講演会や実習を行い、中・高校生対象の実習や授業も担当した。職責は十分に果たした。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

全学情報セキュリティ幹事会幹事・フィールド科学教育研究センター情報セキュリティ委員会委員長を務め、フィールド科学教育研究センターの情報管理とセキュリティ体制の基礎を確立した。また、将来計画におけるフィールド科学教育研究センターセンター本館の基本構想作成に携わった。さらに、隔地施設からなるフィールド科学教育研究センターにおいて早急に整備が必要な遠隔講義・会議システムの基本構想ならびに予算書を作成した。十分に職責は果たした。

基礎海洋生物学部門

■海洋生物系統分類学分野

助教授 久保田 信

1. 教育活動（大学と大学院）

フィールド科学教育研究センター（以下「フィールド研」と略記）基礎海洋生物学部門海洋生物系統分類学分野助教授として、森里海連環学実習Ⅰ（平成16～17年度）、紀伊半島南部の里域生物相調査（平成16年度）、「海岸動物の生活史」＜新入生向け全学共通少人数セミナー＞（平成16年度）の講義や実習を担当し、フィールド研が目指す森里海連環学の創生の必要性や森里海の健全な連環を取り戻す上で海洋生物学の基礎である生物相の記録と近年の環境変化から生物相の変遷とその分析などを講義と実習等を通して教育してきた。

また、大学院理学研究科（協力講座）海洋生物学分科助教授として、動物系統解析特論A、B・形態機能系統特論A、B（平成15～17年度隔年開講）、海洋生物学特論（平成15～17年度）、海洋生物ゼミナールA、B、C、D（平成15～17年度）を担当し、3年間で、現在、博士課程3名を指導中である。

さらに、京都大学理学部非常勤講師として、無脊椎動物学（平成15～17年度）、臨海実習1部、2部、3部、4部（平成15～17年度）、海洋生物学課題研究（平成15～17年度）、公開臨海実習 春期、夏期（平成15～17年度）、加えて他大学（大阪市立大学理学部と大阪大学）の臨海実習講師（平成15～17年度）などの多くの講義・実習を担当し、海洋生物学、特に海洋無脊椎動物の系統分類学の基礎教育に当たってきた。

以上まとめると、講義と実習を、年平均、全学共通教育0.3件、学部教育9.0件、大学院教育6.3件となる。

2. 研究成果

フィールド研が目指す森・里・海の連環システムの構築には、海自体の保全はもとより海洋生物、特に里からの影響の大きい海岸動物の基礎研究が不可欠である。その研究成果として、研究分野の特性を生かし、平成15～17年度に、各種内外のよく知られた雑誌（Journal of Natural History; Invertebrate Biology; Biogeography; Dermatology; 日本生物地理学会会報；漂着物学会誌；沖縄生物学会誌；長崎県生物学会誌；南紀生物誌など）に、欧文原著論文をはじめ和文など専門とする腔腸動物の系統分類学的研究、特にライフワークであるカイヤドリヒドラ類や人類の夢の実現がかかっている神秘で不老不死のベニクラゲのこの方面の研究はもとより、地域特性を示す様々な分類群にまたがる海洋生物に関する博物学的研究成果を報告した。

これらに関する研究成果の一部は、日本プランクトン・ベントス学会、日本分類学会や国際的な2つの学会（International Conference on Coelenterate Biology; International Coral Reef Symposium）で発表（講演・投稿）し論文や著書として取りまとめた。論文・著書は、年平均で、著書1.0冊、学会誌は内外誌あわせ11.7篇、国内一般誌18.3篇（大部は学会誌に相当するとみなせる）、学内誌3.3篇である。

なお、海外での国際共同研究（南アフリカ共和国、タイ、韓国、中国）として、長期的なものから単発的なもので実施しており、上記の研究に共著論文として2篇は報告済みである。

以上の研究成果は、全体の8割以上が小生がファーストオーサーである。

3. 社会貢献活動

「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦－」と題する京大総合博物館平成16年度春季企画展での公開講座で「宝の海から」と題する講演および展示のガイド説明を実施した（期間中の入館者は1万人を越え、成功裡に終えられ、加えて、企画展図録「森と里と海のつながり－京大フィールド研の挑戦－」に2篇を掲載した。地域貢献としては、和歌山県白浜町の生活環境課や児童館主催・共催の地元小学生への講演と実習（平成15～17年度）、全国からの観覧者対象の瀬戸臨海実験水族館無料ガイドツアー講師（平成16～17年度）、和歌山県キャリア教育実践プロジェクトの一環として白浜町立白浜中学生対象の授業と実習（平成17年度）、神戸市立須磨水族園職員とボランティア対象の臨海実習およびイベント出演（平成16～17年度）。きしわだ自然資料館友の会磯観察会の講師（平成17年度）、クラゲのメーリングリストオフ会講師（平成17年度）、兵庫県と大阪府の高

校教員対象の臨海実習（平成 16～17 年度）、立命館宇治高校（平成 17 年度）、滋賀県立膳所高校（平成 17 年度）、和歌山県立田辺高校（平成 17 年度）、日本生物教育学会第 79 回大会における講演と実習（平成 17 年度）を実施した。

新聞で週間連載として、「宝の海から」と題する記事を紀伊民報に約 2 年間（平成 16～17 年度）、産経新聞に約半年間「おもしろ海洋生物」(平成 16～17 年度)を掲載した。また、海洋生物学および博物学的な多くのニュースを上記 2 社を中心とした各新聞社に掲載して頂けた。

他には、知名度の高いテレビ番組（アンビリバーボー、科学大好き土曜塾）などに出演するとともに、ラジオ放送として、和歌山県（WBS 和歌山放送；白浜町ビーチステーション）や京都および東京などでの放送（日本放送；KBS 京都；毎日放送ラジオ）に出演した。

以上は、年平均、公開講座 0.7 回、社会人教育 3.0 回、小・中・高校生教育 3.3 回で、新聞掲載は 61.3 回で、テレビ・ラジオ出演は 4 回である。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

教育プログラム委員会（平成 15 年度）、本部棟棟新営ワーキンググループ（平成 15 年度）、遠隔講義システム等整備ワーキンググループ（平成 15～16 年度）、連携棟新営ワーキンググループ（平成 17 年度）、広報委員会（平成 17 年度）として各委員・企画情報室員の協力の下、フィールド研の諸活動に関する委員を歴任してきた。

なお、学外委員としては和歌山県立自然博物館協議委員（平成 15～17 年度）として地方貢献もしている。

以上、各種委員は、年平均で 1.0+2.3 委員（学内で後者は当該センター）、学外が 1.0 委員を務めた。

助手 大和 茂之

1. 教育活動

以下の通り担当した。

全学共通教育：

ボケゼミ「紀伊半島南部の里域生物相調査」（平成 15 年度）

森里海連環学実習（平成 16、17 年度）

学部教育：

理学部・臨海実習 14 部（平成 15～17 年度）

大学院教育：

形態機能系統論（平成 15、17 年度）

動物系統解析論（平成 16 年度）

海洋生物学ゼミナール（平成 15～17 年度）

学部教育は、学生の休暇中の 8～9 月、3 月に、集中授業として多くの実習を行った。また、全国の大学生向けの公開臨海実習や、他大学の臨海実習（奈良女子大学（15 年度）、関西学院大学（15～17 年度））も担当した。これらは、臨海実験所の教員として、フィールドの特性を生かしたものであり、十分に教育的役割を果たしたものとする。大学院教育では、臨海実験所に常駐する大学院生に、ゼミナール・洋書購読などを通じて、海洋生物学に関する教育を行ったが、研究テーマが離れていることもあり、直接的な研究指導の面ではあまり貢献していない。

2. 研究成果

以下の分野での研究を行っている。

- ・ヨコエビ類の分類
- ・フジツボ類の性表現、矮雄に関する研究
- ・田辺湾の生物相の変動に関する研究
- ・古座川におけるエビ類の研究

それぞれのテーマについて、フィールドでの採集や調査を行い、所期のデータが得られた。成果については取りまとめ中であるが、この時期に実際に論文としてまとめたものはなく、今後数年の間に出版されるように努力する。

3. 社会貢献活動

瀬戸臨海実験所水族館におけるガイドツアー（平成 16 年の 12 月から、学校の冬休み、春休み、夏休み中に実施）として、入場者に海洋生物に関する説明を行った。小学生から老人までの多様な水族館入場者が、海洋生物のどのような側面に興味をもっているかがわかり、教える側として大いに刺激を受けた。これらの経験を、水族館の運営にも生かして行きたい。

「財団法人・天神崎の自然を大切にする会」の評議員（平成 17 年度から）として、ナショナルトラスト運動や自然保護活動に参画している。実験所が位置する田辺湾の自然環境の保全を考えるうえで、この会の活動は重要である。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

社会連携委員（平成 15 年度）では、総合博物館の展示において、瀬戸臨海実験所の展示に関する取りまとめ役となった。安全委員（平成 16～17 年度）では、安全マニュアルを作成しかけたが、途中で中断している。

瀬戸臨海実験所はフィールドセンターの現地の施設であり、そこに常時滞在することによって、施設の維持管理や職員との共同活動などあらゆる側面で、フィールドセンター教員としての役割を果たしているものと考えられる。

■海洋生物進化形態学分野

講師 宮崎 勝己

1. 教育活動

学部教育として理学部の各種臨海実習と無脊椎動物学（いずれも分担）を、大学院教育として各種ゼミナールを担当したほか、全国の大学生向けの公開臨海実習、他大学の臨海実習、また平成 17 年度からは、全学共通科目としてのポケゼミ（節足動物学入門）をそれぞれ担当し、概ね好評であった。

臨海実験所という遠隔地に在籍しているため、これらの教育活動の程度は、同年代の教員と比べやや少ないように思う。

2. 研究成果

当該年度中の主な研究成果として、原著論文 4 報、総説 1 報、各種報告書 2 報、国内学会発表 4 回、国際学会・シンポジウム発表 2 回が数えられる。また平成 17 年度から科研費基盤（C）の代表者となった他、17 年度に単年度の外部資金導入の実績がある。

以上の成果は、同年代の教員と比べ、特に優れた質・量とはいえず、今後更に努力する必要がある。

3. 社会貢献活動

当該年度においては、高校生及び高校教員対象の各種臨海実習の講師を担当した。また平成 17 年度には、和歌山県清水町主催の小学生対象の臨海実習の講師を担当し、いずれも好評であった。

一方、公開講座や講演会での実績はなく、今後はより多角的に社会貢献活動に取り組む必要がある。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

教育プログラム委員会及び施設・設備整備委員会遠隔講義システム等整備 WG の委員を担当したが、後者における実質的な活動はなかった。教員会議には、ほぼ毎回出席した。

一方、古座川プロジェクト等の、センターでの各種研究プロジェクトへの貢献はほとんど無く、今後は積極的に取り組む必要がある。

助手 深見 裕伸

1. 教育活動

京大臨海実習および公開臨海実習に携わった。大学院教育には制度上担当できないが、院生の実験および論文指導を 1 年通して行った。初年度だったができる限りのことはしたといえる。

2. 研究成果

国際誌に掲載された論文は Coral Reefs が 1 報（First author）で、後はパナマ共和国および台湾でそれぞれ行われた国際シンポジウムに招待され公演を行った。国内では、日本動物学会と日本サンゴ礁学会に参加し、ポスター発表を行ったまた、所内誌に共著で 1 報発表した。国際誌に発表できた数が少ないが、海外シンポジウムな

ど幅広く自分の研究を発表できた。

3. 社会貢献活動

春および夏休みに、水族館において解説ツアーを行い、一般の人々に海の生き物のよさを知っていただけたと思う。また、NPO 法人である“田辺湾のサンゴを守る会”に参加しており、地元の人々やダイバーに田辺湾のサンゴの大切さや今後の方針などについて話している。しかしまだ十分に社会貢献といえるほどのことはできていない。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

フィールド研が主体となって行っている古座川プロジェクトに参加しており、古座川およびその河口の水質調査を担っている。国際委員にもなっているが実質的な活動はなかった。

古座川プロジェクトはかなりの時間を割いて行っており、フィールド研にたいして貢献していると考えている。

■海洋生物多様性保全学分野

教授 白山 義久

1. 教育活動

フィールド科学教育研究センター（以下、「フィールド研」という）基礎海洋生物学部門海洋生物保全学分野教授として、森里海連環学（リレー講義、平成 16・17 年度）、海域陸域統合管理論（リレー講義、平成 17 年度）、森里海連環学実習 I（平成 16 年度）、森里海連環学実習 IB（平成 17 年度）、「海洋生物の多様性を探る」（新入生向け少人数セミナー、平成 16・17 年度）、「紀伊半島南部の里域生物相調査」（新入生向け少人数セミナー、平成 15・16 年度）の講義や実習を担当し、フィールド研が目指す森里海連環学の創生の必要性を強調した。また森林が河川を通していかに沿岸環境につよい影響を及ぼしているかを、フィールド実習の体験を通して理解させるよう努めた。さらに、沿岸域の生物多様性の重要性を、講義と実習を通して理解させることにも努めてきた。

大学院理学研究科生物科学専攻海洋生物学分科（協力講座）教授として、動物系統解析論・形態機能系統論（交代で隔年開講、平成 15～17 年度）、海洋生物特性論（平成 15～17 年度）、海洋生物学演習（平成 15～17 年度）、海洋生物学特別実験（平成 15～17 年度）を担当し、3 年間で修士 1 名、博士 6 名（共同指導を含む）を社会に送り出した。

さらに、京都大学理学部非常勤講師として、海洋生物学（平成 15～17 年度）、無脊椎動物学（平成 15～17 年度）、生物科学セミナー（平成 15～17 年度）、臨海実習 I - IV（平成 15～17 年度）、など多くの講義・実習を担当し、海洋生物学の基礎教育にあたってきた。さらに、基礎生物学 A（リレー講義、平成 16・17 年度）を担当し、マクロ分野の基礎的な生物学の教育も行った。

2. 研究成果

平成 15～17 年度には、主に次に挙げる内容の研究を進めた。

(1) 沿岸海洋生物の多様性の地理的パターンの解明

Natural Geography In Shore Area (NaGISA) と命名したこのプログラムでは、全世界で共通のプロトコルに基づいて沿岸生物の採集、分析を行い、その結果を持ち寄って地域間比較を行うことにより、多様性の地理的パターンを地球規模で明らかにすることを目指している。すでに 50 カ国をこえる国から参加があり、現在各国でサンプリングが実施されている。

実施体制の調整のための国際会議を、平成 15 年度と 17 年度とに開催した。開催場所は前者が京都、後者がフランクフルトである。これらの会議において、今後のプログラムの実施方法などを討議した。

サンプルの分析には、分類学的な知見が必須である。そのためには各国の研究者が同じ分類水準でサンプルの同定をすることが求められる。そのため、この計画では、分類学のトレーニングワークショップを開催している。このワークショップは、平成 15 年度に多毛類についてタイで、16 年度に端脚類と棘皮動物についてベトナムと日本で、17 年度に藻類と十脚甲殻類についてアメリカとインドネシアで開催した。この活動は、日本学術振興会、東京大学海洋研究所が主催する国際共同研究“沿岸海洋学”の一部ともなっている。

(2) 二酸化炭素の大気中濃度の上昇に伴う海水の酸性化が、海洋生物に与えるインパクトの研究

二酸化炭素の大気中濃度が上昇すると、それに伴って海水が酸性化する。このことが、海洋生物に与えるインパクトの研究を、特に長期間の飼育に基づいて明らかにしてきた。その結果、現在の勢いで大気中二酸化炭素濃度が上昇すると、将来浅海の海洋生物、特に炭酸カルシウムの骨格を持つ種類に深刻な影響が出ることが懸念さ

れることが明らかになった。

(3) 基礎海洋生物学の研究

大学院生とともに、さまざまな内容の基礎海洋生物学的研究を実施してきた。特に発生生物学的研究については和田助手と協力して実施した。

これらの研究成果は、2003 - 2005 年の間に、17 編の英文原著論文として発表した。またその他の著作は 26 篇を出版した。

3. 社会貢献活動

放送大学非常勤講師として、毎月1回キャンパスプラザ京都において、ゼミを開講した(平成15～17年度)。また、面接授業(土日型)を、瀬戸臨海実験所において、毎年2回、合計6回実施した。

NPO 法人地球環境大学の講師として、海洋生物学の視点から見た地球環境問題について、2回の講義を行った。また NPO 法人エコロジーカフェの学術フェローとして、フィールド研との協定の調印を仲介し、第1回の関西支部シンポジウムにおいて講演を行った(平成16年度)。

いわゆる学識経験者として、各種委員会委員としての社会貢献をしている。環境省関係では、海洋環境モニタリング検討会委員、赤泥海洋投入処分検討会委員、経産省関係では、二酸化炭素海洋処分技術委員会委員、同海洋環境分科会主査を務めた。また日本学術会議動物科学研究連絡委員会の委員を務めた。その他に、JAMSTEC 深海調査研究計画委員会委員、GBIF 国内委員会委員、文科省科学技術専門調査員、日本学術振興会科研費選考委員などを務めた。

学会の幹部として日本動物分類学会評議員・沿岸海洋編集委員・日本線虫学会編集委員などを務めた。国際的な活動として、IPCC において CCS に関する特別報告書の執筆委員、CoML における科学推進委員会の委員を務めた。

4. フィールド科学教育研究センターにおける役割

研究プログラム委員会委員長として、各種研究プログラムの設立と資金調達に尽力した。しかし残念ながら、この期間中には、プログラムの本格的な始動はできなかった。

全学的な委員会の委員としては、全学共通教育「生物部会」委員を務めた。また、地球環境学堂の三才学林委員、生態学研究センター運営委員を務めた。

6. 資料

6. 1 活動の記録（日記）

- (1) 2003 年 4 月 1 日
フィールド科学教育研究センター発足
- (2) 2003 年 4 月 2 日
日本財団においてセンター教授 4 名がフィールド研設置の説明と今後の全般的協力要請を行った
- (3) 2003 年 4 月 8 日～10 日
第 6 回国際異体類生態学シンポジウム国際運営委員会（京都市・舞鶴市）を開催
- (4) 2003 年 5 月 13 日
フィールド科学教育研究センター看板上掲式ならびに総長・事務局長との懇談会を実施
- (5) 2003 年 7 月 11 日～
新入生向け少人数セミナーを開講
・舞鶴水産実験所「海洋環境と生物資源」 7 月 11～13 日
・徳山試験地 「照葉樹林の構造と維持」 7 月 22～24 日
・北海道研究林 「森林資源学ゼミナール」 8 月 8～14 日
・芦生研究林 「原生的な森林の利用と管理」 8 月 10～13 日
・紀伊大島実験所、瀬戸臨海実験所（共同）「紀伊半島南部の里域生物相調査」9 月 22 日～26 日
- (6) 2003 年 7 月 31 日～8 月 2 日
第 13 回芦生研究林公開講座「森のしくみと働き－芦生研究林への招待－」を開催 参加者 50 名
- (7) 2003 年 8 月 4 日～9 日
1～4 回生対象 森－里－海連環学実習（芦生研究林－舞鶴水産実験所）を開講
- (8) 2003 年 8 月 7 日～9 日
京都大学 長尾 真 総長の北海道研究林視察ならびに新入生向け少人数セミナーへの参加
- (9) 2003 年 8 月 12 日
オープンキャンパスに協力（北白川試験地）
- (10) 2003 年 9 月 13 日～18 日
熱帯域（タイ）におけるモデルフィールド探索調査（第 1 回）
- (11) 2003 年 9 月 25 日
環境省有明海・八代海総合調査評価委員会ヒアリングに参加し、森里海連環をもとに有明海の再生方向を提言
- (12) 2003 年 9 月 27 日
フィールド科学教育研究センターシンポジウム「芦生の森と‘ナラ枯れ’」を開催
- (13) 2003 年 10 月 24 日
滋賀県漁業協同組合連合会主催シンポジウム「魚が語る琵琶湖」に参加し、森と川と湖のつながりについて提言
- (14) 2003 年 11 月 7 日
フィールド科学教育研究センター創設記念シンポジウム・式典・祝賀会 を開催
- (15) 2003 年 11 月 17 日～20 日
熱帯域（タイ）におけるモデルフィールド探索調査（第 2 回）
- (16) 2003 年 11 月 22 日
上賀茂試験地において一般公開自然観察会を開催
- (17) 2003 年 12 月 2 日
日本財団において伊藤 隆 海洋船舶部長に海外モデルフィールド設置についての提案と協力要請を行った
併せてその研究教育統合拠点ともなる「フィールド科学教育研究連携棟」構想を提示した
- (18) 2003 年 12 月 8 日
北大－京大－琉大連携水圏フィールド科学シンポジウム『森と里と海と生物』（舞鶴水産実験所）を開催
- (19) 2003 年 12 月 11 日～13 日
SEASTAR2000 ワークショップ（バンコク）でセンターが目指す森里海連環学を講演

- (20) 2003 年 12 月 11 日～12 日
東京大学海洋研究所公開シンポジウム「海洋生命系のダイナミクス」で講演
- (21) 2004 年 1 月 19 日
フィールド科学教育研究センター講演会『森里海連環学から見た「モデル・フォレスト」』
(渡辺 弘之 名誉教授講演) を開催
- (22) 2004 年 1 月 29 日
フィールド科学教育研究センター 国際ミニシンポジウム
『Coastal management: The role of land processes』(Dr. Gunnar Kullenberg 講演) を開催
- (23) 2004 年 2 月 9 日
シップ&オーシャン財団海洋政策研究所ワークショップ「森・川・海・空のパートナーシップ」で講演
- (24) 2004 年 2 月 20 日～25 日
熱帯域(タイ)におけるモデルフィールド探索調査(第3回)
- (25) 2004 年 3 月 2 日
フィールド科学教育研究センター 講演会
『熱帯泥炭湿地林の土壌と河川環境』(原口 昭 北九州市立大学国際環境工学部教授講演)
『Alaska の温室効果ガス収支研究における現象解析と統合化』(原 蘭 芳信 アラスカ大学国際
北極圏研究センター客員研究員講演) を開催
- (26) 2004 年 3 月 5 日
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター公開シンポジウム「フィールド科学への期待」で
フィールド研が目指す森里海連環学を講演
- (27) 2004 年 3 月 7 日
市民公開講演会/展示会『京都大学におけるフィールド研究の現状と将来像を求めて』を
京都大学生態学研究センター・大学院地球環境学堂・フィールド科学教育研究センター共催にて開催
- (28) 2004 年 3 月 15 日
フィールド科学教育研究センター 大畠 誠一 教授 最終講義
『針葉樹の系統発生の地縁展開法則』とマツ属の種分化』を開催

-- 2004 年度(平成 16 年度) -----

- (29) 2004 年 4 月 8 日
第2回地域ゼロエミッション研究会(釧路公立大学)において「日本の森林資源・根釧内陸部の森林資源」を講演
- (30) 2004 年 5 月 10 日
平成 17 年度概算要求 総長ヒアリング
フィールド科学教育研究連携棟の新営並びに遠隔生態観測・遠隔講義システムの設置について説明
- (31) 2004 年 5 月 11 日
全国水産実験所長会議(東京都)を主催
- (32) 2004 年 5 月 21 日
舞鶴水産実験所、芦生研究林共同で間伐材魚礁の設置
- (33) 2004 年 5 月 26 日
古座川町公民館において森里海連環研究「古座川プロジェクト」の住民説明会を実施
- (34) 2004 年 6 月 1 日～8 月 29 日
京都大学総合博物館平成 16 年春季企画展「森と里と海のつながりー京大フィールド研の挑戦ー」を開催
6 月 1 日 内覧会
尾池和夫総長をはじめ関係者約 100 名の参加者を迎え記者発表・開会式を実施
6 月 2 日 開館
6 月 16 日 入館 1,000 人記念セレモニー
7 月 15 日 入館 3,000 人記念セレモニー
7 月 31 日 入館 5,000 人記念セレモニー
8 月 21 日 入館 10,000 人記念セレモニー
8 月 29 日 閉館入館者総数 11,786 名(内覧会参加者を除く)

- ・公開講座

6 月 12 日 「日本の森林は今」	竹内 典之
6 月 19 日 「海の中の弱肉強食」	山下 洋
6 月 26 日 「宝の海から」	久保田 信
7 月 3 日 「日本海文化と黒潮文化」	上野 正博・梅本 信也
 - ・レクチャー&ガイド 18～23

6 月 5 日 「日本人と森」	竹内 典之
7 月 10 日 「森林生態系のしくみー水土保全機能について」	徳地 直子
7 月 31 日 「魚の赤ちゃんの大冒険」	田川 正朋
8 月 7 日 「森からの宅急便」	芝 正己
8 月 14 日 「若狭の海の水中散歩」	益田 玲爾
8 月 21 日 「無用の用“自然?環境?森の働き?”」	中島 皇
 - ・割り箸細工 実演 小池 正孝（千葉県アマチュア美術会副会長）
 - 6 月 2 日～4 日
 - 6 月 24 日～26 日
 - 7 月 23 日～25 日
 - 8 月 26 日～29 日
 - ・夏休み学習教室
 - 8 月 25 日 「丸太を切ってコースターを作ろう」
 - 8 月 25 日～29 日 「森と里と海のつながり」ガイドツアー
 - ・その他
 - 7 月 11 日 竹製品製作実演
 - 8 月 20 日 留学生ガイドツアー
 - 8 月 27 日 博物館・フィールド研連携イベント「森の心と人の心を奏でる」
 - 6 月 15 日 テレビ取材（NHK）
 - 7 月 29 日 ラジオ中継（KBS）
 - 8 月 5 日 テレビ中継（KBS）
 - 9 月 1 日 図録発行「森と里と海のつながり 京大フィールド研の挑戦」
- (35) 2004 年 6 月 12 日
有明海・八代海研究者会議公開シンポジウム（九州大学）において「河口の魚類」を講演
- (36) 2004 年 6 月 12 日～13 日
瀬戸臨海実験所において放送大学面接授業「海洋生物の多様性」を開講
- (37) 2004 年 7 月 9 日
原 潔 監事が瀬戸臨海実験所を視察
- (38) 2004 年 7 月 15 日
原 潔 監事が舞鶴水産実験所を視察
- (39) 2004 年 7 月 17 日
京都大学フィールド科学教育研究センター時計台対話集会「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」を開催
第 1 回対話集会 参加者 530 名 講師：C. W. ニコル
- (40) 2004 年 7 月 24 日
京都大学フィールド科学教育研究センター時計台対話集会「森と里と海のつながりー“心に森”を築く」を開催
第 2 回対話集会 参加者 504 名 講師：畠山 重篤、寺島 紘士、安田 喜憲、田中 克、梅本 信也
- (41) 平成 16 年度 21 世紀 COE プログラム（7 月 21 日採択決定）
農学研究科・フィールド研提案の「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」が採択
フィールド研より 4 名の事業推進担当者が参加
- (42) 2004 年 7 月 26 日～28 日
瀬戸臨海実験所においてフルブライト記念財団 日米高校生交流プログラムを実施
- (43) 2004 年 7 月 29 日～31 日
第 14 回芦生公開講座「森のしくみとその役割ー森とくらすー」を開催 参加者 55 名
芦生研究林において地元との連携を深める方向で実施

- (44) 2004年8月2日～5日
瀬戸臨海実験所において文部科学省サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP）
「海洋生物の多様性」を実施
- (45) 2004年8月3日～5日
芦生研究林において文部科学省サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP）
「森林環境教育のワークショップ」を実施
- (46) 2004年8月16日～18日
北海道研究林標茶区において放送大学面接授業「道東地方の自然」を開講
- (47) 2004年8月20日
2004年度学生生活研究セミナー“少子化時代の大学教育”（京都大学）において「大学新入生教育としてのポケット・ゼミ」を講演
- (48) 2004年8月28日
シンポジウム“水産研究の今、そして未来”（広島大学）において「生態・行動学」を講演し、併せて森里海連環学の重要性を提起
- (49) 2004年8月31日～9月5日
マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所を訪問
フィールド研との部局間学術協定締結の事前折衝
- (50) 2004年9月9日～15日
1～4回生対象 森里海連環学実習Ⅱ（北海道研究林）を開講
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所との共同開講
- (51) 2004年9月13日～20日
瀬戸臨海実験所において平成16年度公開臨海実習（学部生対象（夏期））を実施
- (52) 2004年9月15日～17日
平成16年度全国演習林協議会秋季総会を開催
平成16年度・17年度幹事校として京大時計台記念館国際交流ホールで開催
- (53) 2004年9月20日～25日
1～4回生対象 森里海連環学実習Ⅰ（瀬戸臨海実験所、紀伊大島実験所）を開講
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター和歌山演習林の協力を得る
- (54) 2004年度新入生向け少人数セミナー11科目を開講
- | | | |
|----------------------------|-----------------|-------------|
| ・「お魚好きのための魚類研究入門」 | （舞鶴水産実験所） | 田川 正朋・中山 耕至 |
| ・「海的环境と沿岸資源生物」 | （舞鶴水産実験所） | 山下 洋 |
| ・「海辺から学ぶフィールド科学」 | （舞鶴水産実験所） | 益田 玲爾 |
| ・「海洋生物の多様性を探る」 | （瀬戸臨海実験所） | 白山 義久 |
| ・「紀伊半島南部の里域生物相調査」 | （瀬戸臨海実験所） | 白山 義久・梅本 信也 |
| ・「原生的な森林の働き」 | （芦生研究林） | 中島 皇 |
| ・「森林の更新と動態」 | （清水山、北山、芦生研究林等） | 安藤 信 |
| ・「道東根釧地方の自然」 | （北海道研究林） | 竹内 典之 |
| ・「氷河期の大陸遺産-有明海の不思議な生きものたち」 | （有明海筑後川河口域～干潟域） | 田中 克 |
| ・「有機農業の可能性-持続可能な農業をめざして-」 | （京都市近郊） | 西村 和雄 |
| ・「里山資源の保全」 | （芦生研究林） | 竹内 典之 |
- (55) 2004年10月1日～2005年1月21日
リレー講義「森里海連環学-森は海の恋人か?-」を開講
- (56) 2004年10月4日～11月29日（全5回）
JTBカルチャーサロン「森は海の恋人」をフィールドから探る『森と里と海のつながり』講座提供
- (57) 2004年10月13日
第6回国際異体類生態学シンポジウム国内組織委員会（第1回）を開催
- (58) 2004年10月19日
全日本空輸株式会社環境・社会貢献部と森の環境教育についてのフィールド提供・共同エコツアー開催など多面的連携を図ることを協議

- (59) 2004 年 10 月 20 日
日本財団海洋グループと寄附研究部門開設ならびにフィールド連携棟建設への助成について協議
- (60) 2004 年 10 月 20 日～24 日
東アジア生態学会（韓国）において“森里海連環学”の一環として「The role of river mouth estuaries as nursery grounds of juvenile flounder」を話題提供
- (61) 2004 年 10 月 25 日
第 4 回地域ゼロエミッション研究会（北海道研究林標茶区）において「森里海連環学に自然再生の夢を託す」を講演
- (62) 2004 年 10 月 27 日～28 日
全国臨海臨湖実験所長会議において水産実験所長会議との連携を提起
- (63) 2004 年 10 月 29 日
日本財団海洋グループ海野 光行 氏（海洋教育担当リーダー）と平成 17 年度開講全学共通教育科目「海域・陸域総合管理論」の開講ならびに平成 18 年度設置「寄附研究部門」について協議
- (64) 2004 年 11 月 1 日
本間副学長・原監事と日本財団助成寄附研究部門、フィールド連携棟建設などについて面談
- (65) 2004 年 11 月 10 日
古座漁協清流古座川を考える会との共同研究について協議
- (66) 2004 年 11 月 13 日
放送大学講義「海と地球環境」を瀬戸臨海実験所にて開講
- (67) 2004 年 11 月 16 日
京都府立嵯峨野高等学校コスモス科において「魚の子供達の不思議な生態に学ぶ」を特別講義
- (68) 2004 年 11 月 17 日
尾池総長と日本財団助成寄附研究部門、フィールド連携棟、北部キャンパス整備将来構想などについて面談
- (69) 2004 年 11 月 20 日
公開シンポジウム「有明海を科学し再生の道をさぐる」（長崎大学）において「大陸沿岸から“分家”した河口域生態系の不思議を探る」を講演
- (70) 2004 年 11 月 26 日
高知県海洋漁業センターにおいて「森・里・海のつながり」を講演
- (71) 2004 年 11 月 29 日～30 日
科学技術振興機構「地域結集型共同研究事業」現地評価会議（三重県鶴方町）
- (72) 2004 年 12 月 4 日
第 3 回 3 大学連携シンポジウム（琉球大学）において「京大フィールド研における森里海連環学の展望」はじめ 9 題を発表
- (73) 2004 年 12 月 8 日～10 日
東京大学海洋研究所公開シンポジウム「海洋生命系のダイナミクス」において 4 題を発表
- (74) 2004 年 12 月 21 日
全日本空輸株式会社との「森・里・海の環境再生教育に関する合意書」の締結
- (75) 2005 年 1 月 7 日
仁淀川魚族保存研究会発足式（高知県伊野町）において、森里海連環からの川の生きものの保存の必要性を提案
- (76) 2005 年 1 月 19 日
第 3 回全日空環境フォーラム（東京）において、「森里海のつながりから木文化再生へー海の生物研究者が森思うわけー」を基調講演
- (77) 2005 年 1 月 28 日
MIREC（京都・まいづる立命館地域創造機構）との学術交流協定の締結
- (78) 2005 年 2 月 2 日
地球環境学堂小林正美教授・鴻池組・トリスマなどが和歌山研究林を視察し、J.Pod 工法による教育研究棟建設計画を具体化
- (79) 2005 年 2 月 27 日
教育学研究科「第 4 回ラウンドテーブル・アワー」において森里海連環学の理念と木文化再生を話題提供
- (80) 2005 年 3 月 2 日～3 日
第 1 回 COE 昆虫科学国際シンポジウム“Development and Metamorphosis”において講演（2 題）、ポスター発表 14 題

- (81) 2005 年 3 月 13 日
「第 1 回古座川シンポジウム－アユの生態に学ぶ－」を古座川町公民館で開催（参加者約 100 人）
- (82) 2005 年 3 月 14 日～16 日
JTB カルチャーサロン連携フィールド教室「森は海の恋人をフィールドから探る」を紀伊大島実験所ならびに古座川流域において実施
- (83) 2005 年 3 月 19 日
平成 16 年度「聞き書き甲子園」発表大会を上賀茂試験地において開催（総合博物館と共催）
- (84) 2005 年 3 月 19 日～21 日
文部科学省スプリング・サイエンスキャンプ「魚類生態学入門コース～魚の子供達に焦点を当てて～」を舞鶴水産実験所において開催
- (85) 2005 年 3 月 27 日
全日空「私の青空・森づくり」（松山オイスカの森）においてフィールド教室を開講
- (86) 2005 年 3 月 28 日
産学官連携プロジェクト「21 世紀の環境・経済・文明」シンポジウム（国際日本文化研究センター）においてパネル討論に参加
- (87) 2005 年 3 月 29 日
高知県庁において橋本大二郎知事にシンポジウム「21 世紀に森・川・海が再生するために」の開催ならびに子供の森施設の林海実験所としての利用について協力を要請

-- 2005 年度（平成 17 年度）-----

- (88) 2005 年 4 月 8 日～9 日
宮城県気仙沼市、岩手県室根村において「森は海の恋人運動」のフィールドを視察（TV 朝日による取材）
- (89) 2005 年 4 月 10 日
全日空「私の青空 関西空港・高野山ゲンジの森」においてフィールドセミナーを開講
- (90) 2005 年 4 月 12 日
長野県アファンの森財団事務所において C.W. ニコル氏に“社会連携教授”の称号を授与
- (91) 2005 年 4 月 14 日
北白川試験地において尾池 和夫総長出席のもと j.Pod 建築モデル施設の公開と記者発表
- (92) 2005 年 4 月 16 日
全日空「私の青空 羽田空港・天城湯ヶ島の森」においてフィールドセミナーを開講
- (93) 2005 年 4 月 21 日
高知県庁において旧県立横浪子供の森施設管理棟を京都大学ならびに高知大学の共同利用による施設として利用することを記者発表
- (94) 2005 年 4 月 28 日
和歌山研究林において、辻 文三副学長の出席のもと j.Pod 建築モデル教育研究棟新築竣工披露式を開催
ミニシンポジウム「和歌山から森と都市の対話を」を同時開催
- (95) 2005 年 5 月 12 日
京都大学・高知大学・高知県主催シンポジウム「21 世紀に森・川・海が再生するために」を高知県須崎市において開催
本学を代表して辻 文三副学長が挨拶 参加者約 400 名
- (96) 2005 年 5 月 28 日
全日空「私の青空 山口宇部空港・阿知須の森」においてフィールドセミナーを開講
- (97) 2005 年 5 月 29 日
全日空「私の青空 釧路空港・標茶町湿原の森」においてフィールドセミナーを開講
- (98) 2005 年 5 月 30 日
高知県庁において橋本 大二郎知事に森・川・海再生「高知プロジェクト」を提案
- (99) 2005 年 6 月 2 日
琵琶湖海区漁業調整委員会において「森里海連環学のすすめ－森は海の恋人運動に学ぶ」を講演

- (100) 2005 年 6 月 4 日
産学官連携プロジェクト「21 世紀の環境・経済・文明」公開シンポジウム “21 世紀の環境と経済と文明－農と食と地球環境”
において「食文化・森里海連環学・木文化」を講演（宮城県気仙沼市）
- (101) 2005 年 6 月 5 日
第 17 回「森は海の恋人運動植樹祭－森を育み木々と語る集い」に参加（岩手県室根村）
- (102) 2005 年 6 月 9 日
舞鶴水産実験所において文部科学省サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP）「地球環境と海の生態系」
を実施（6 月 9 日、7 月 26 日、10 月 7 日、1 月 17 日、2 月 16 日の 5 回）
- (103) 2005 年 6 月 13 日
第 1 回木文化再生研究会（講師：OM ソーラー 小池 一三氏、アウトドアライター 天野 礼子氏）を開催
- (104) 2005 年 6 月 23 日
古座川町役場ならびに串本町役場において古座川プロジェクトの概要を町長・助役他に説明
- (105) 2005 年 7 月 5 日～7 日
北海道大学において平成 17 年度 3 大学（北大・京大・琉大）連携フィールド科学シンポジウムを開催
- (106) 2005 年 7 月 9 日～10 日
第 1 回昆虫 COE フィールド教育プログラム「芦生の森の樹木をめぐる植食者たち」を芦生研究林において開催
- (107) 2005 年 7 月 11 日
第 2 回木文化再生研究会（講師：グリーンベンチ工法研究会理事 栗原 光二氏）を開催
- (108) 2005 年 7 月 15 日～19 日
第 1 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ
- (109) 2005 年 7 月 16 日
全日空「私の青空 信州の森」／長野県森づくりボランティア活動（長野県信濃町）におけるパネルトークに参加
- (110) 2005 年 7 月 17 日～18 日
産学官連携プロジェクト「21 世紀の環境・経済・文明」研究会による「ネーチャーテクノロジー」に関する討論に参加
- (111) 2005 年 7 月 19 日
NPO 法人「エコロジー・カフェ」と「生物多様性保全のための市民参加型教育研究」に関する協定を調印
- (112) 2005 年 7 月 23 日
第 15 回京 ECO セミナーにおいて「森里海のつながりから木文化再生へ」を講演（京エコロジーセンター）
- (113) 2005 年 7 月 28 日～30 日
芦生研究林において公開講座 2005 「森のしくみとその役割－森にくらして」を開講 参加者 58 名
- (114) 2005 年 8 月 8 日～12 日
全学共通科目（1～4 回生対象）森里海連環学実習 IA（芦生研究林－由良川－丹後海コース）を開講
- (115) 2005 年 8 月 20 日
「仁淀川の再生をめざして。仁淀川の森と水を考えるシンポジウム」において「森と川と海をつなぐ学問」を講演（高知
県土佐市）
- (116) 2005 年 8 月 20 日
全日空「私の青空 広島空港・Asahi の森」においてフィールドセミナーを開講
- (117) 2005 年 8 月 24 日～25 日
全日空の協力を得て、和歌山研究林主催「森林体験学習」を芦生研究林で開催
- (118) 2005 年 9 月 3 日
第 1 回由良川フォーラムを綾部市で京都府農林水産部との共催で開催 参加者約 120 名
- (119) 2005 年 9 月 3 日～9 日
全学共通科目（1～4 回生対象）森里海連環学実習 II（夏の北海道実習）を開講
原 潔監事による実習現場ならびに実習施設の監査
- (120) 2005 年 9 月 12 日～14 日
第 2 回昆虫 COE フィールド教育プログラム 大学院生による「昆虫科学とフィールド研究」シンポジウムを上賀茂試験地
において開催
- (121) 2005 年 9 月 16 日～19 日
第 2 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ

- (122) 2005 年 9 月 16 日～23 日
瀬戸臨海実験所において平成 17 年度公開臨海実習（夏期）を実施
- (123) 2005 年 9 月 22 日
第 3 回木文化再生研究会「森里海連環学 工務店懇談会」を開催
- (124) 2005 年 9 月 23 日
京都大学ジュニアキャンパス 2005 において「森里海連環学－“森は海の恋人”を探る」を開講
- (125) 2005 年 9 月 25 日～30 日
全学共通科目（1～4 年生対象）森里海連環学実習 IB（紀伊半島の森と里と海）を開講
- (126) 2005 年 9 月 28 日～29 日
京都大学シニアキャンパス 2005 において「『ひとと自然 森を考える』フィールド学習」を開講
- (127) 2005 年度新入生向け少人数セミナーを開講
- | | | |
|----------------------------|-----------------|--------|
| ・「森林の更新と動態」 | （清水山、北山、芦生研究林等） | 安藤 信 |
| ・「森のつくりだすもの」 | （和歌山研究林） | 徳地 直子 |
| ・「原生的な森林の働き」 | （芦生研究林） | 中島 皇 |
| ・「世界の森林、日本の森林、現在・未来！」 | | 芝 正己 |
| ・「有機農業の可能性・・・持続可能な農業をめざして」 | （北白川試験地） | 西村 和雄 |
| ・「海的环境と生物資源」 | （舞鶴水産実験所） | 山下 洋 |
| ・「魚類心理学入門」 | （舞鶴水産実験所） | 益田 玲爾 |
| ・「森里海のつながりを清流古座川に見る」 | （紀伊大島実験所） | 梅本 信也 |
| ・「有明海にみる生きものたちの危機」 | | 田中 克 |
| ・「海洋生物の多様性を探る」 | （瀬戸臨海実験所、古座川） | 白山 義久 |
| ・「海岸生物の生活史」 | （瀬戸臨海実験所） | 久保田 信 |
| ・「節足動物学入門」 | （瀬戸臨海実験所） | 宮崎 勝己 |
| ・「京都大学に木造り校舎を作る－都市と森林の再生」 | | 田中 克 他 |
| ・「“森は海の恋人”の故郷に学ぶ」 | | 田中 克 他 |
- (128) 2005 年 9 月 29 日～11 月 15 日
「京の子ども夢大使（大志）派遣事業 科学探偵士」に講師派遣
- (129) 2005 年 10 月 2 日
和歌山の森林を考える会主催「みんなの森づくりシンポジウム」において基調講演
- (130) 2005 年 10 月 7 日～11 日
舞鶴水産実験所・芦生研究林において、文部科学省「豊かな体験活動推進事業」（兵庫県立姫路飾西高等学校）、高校生向け森里海連環学実習を共同実施
- (131) 2005 年 10 月 7 日～2006 年 1 月 27 日
全学共通科目（リレー講義）「森里海連環学－森は海の恋人か？－」を開講
- (132) 2005 年 10 月 7 日～2006 年 1 月 27 日
全学共通科目（リレー講義）「海域・陸域統合管理論」を開講（日本財団寄附講座）
- (133) 2005 年 10 月 14 日
第 1 回海域・陸域統合管理論セミナーを吉田キャンパスで開催（総合地球環境学研究所 谷内 茂雄助教授 講演）
- (134) 2005 年 10 月 20 日～25 日
第 6 回国際異体類生態学シンポジウム「生息域と加入の変異性－異体類生態学の未来を拓く－」を舞鶴市で開催
23 日 市民向け公開講演会「海の生きものと人の未来：共存の道を探る」を同時開催
- (135) 2005 年 10 月 21 日
高知県須崎市において「チャリティトーク・ライブ“森よ、川よ、海よ、甦れ！”」に参加
- (136) 2005 年 10 月 22 日
全日空「私の青空 高知龍馬空港の森・仁淀川の森」においてフィールドセミナーを開講
- (137) 2005 年 10 月 30 日
全日空「私の青空 宮崎空港・北郷町蜂之巣の森」においてフィールドセミナーを開講
- (138) 2005 年 11 月 18 日～21 日
21 世紀 COE プログラム「昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創生」“古座川塾”－フィールドから未来型食料環境学を考える－を開催

- (139) 2005 年 11 月 19 日
和歌山県古座川町において「第 2 回 古座川シンポジウム」を開催
参加者約 60 名 講師：畠山 重篤「牡蠣の森と“心の森”」
- (140) 2005 年 11 月 26 日～27 日
第 3 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ
- (141) 2005 年 12 月 18 日
第 2 回時計台対話集会「森と川と海の対話－安心・安全な社会を求めて」を開催
参加者 350 名 講師：C.W.ニコル、天野 礼子、畠山 重篤、尾池 和夫、司会：土田 芳樹
- (142) 2006 年 1 月 13 日
第 2 回海域・陸域統合管理論セミナー「沿岸環境の再生に向けて－「有明海異変」に学ぶ－」を開催
(長崎大学水産学部長 中田 英昭教授 講演)
- (143) 2006 年 1 月 27 日
全学共通科目「森里海連環学」、「海域・陸域統合管理論」合同パネルディスカッション
- (144) 2006 年 1 月 31 日
古座川流域協議会設立総会
- (145) 2006 年 2 月 16 日
第 1 回総長ランチミーティングにおいて、尾池 和夫総長、松本 紘理事、フィールド研若手研究者らが懇談
- (146) 2006 年 2 月 23 日
高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科及び高知県産業技術委員会と「横浪林海研究交流センターを活動拠点とした
研究・交流に関する協定」を締結
- (147) 2006 年 2 月 24 日～27 日
第 4 回古座川合同調査－京大フィールド研「古座川プロジェクト」関連ワークショップ
- (148) 2006 年 2 月 27 日
第 3 回海域・陸域統合管理論セミナーを開催
(同志社大学経済学部 室田 武教授、依光 良三名誉教授 講演)
- (149) 2006 年 3 月 17 日
第 4 回海域・陸域統合管理論セミナーを開催
(筑波大学大学院生命環境科学研究科 恩田 裕一助教授、北海道大学大学院農学研究科 中村 太士教授、北海道大学北方生
物圏フィールド科学センター 向井 宏教授 講演)
- (150) 2006 年 3 月 24 日
木造住宅振興シンポジウム「森と都市の対話 jPod 建築システムが目指すもの」(兵庫県、京都大学主催)において「森
里海連環学と“森と都市の対話”」を講演
- (151) 2006 年 3 月 26 日～4 月 1 日
瀬戸臨海実験所において平成 17 年度公開臨海実習(春期)を実施

6.2 各施設 利用人数一覧

平成 15 年度

(延人数)

施設名	教育利用		研究利用		公開講座等 イベント	一般利用	合計
	教職員等	学 生	教職員等	学 生			
芦 生 研 究 林	515	764	498	1,250	268	12,131	15,426
北 海 道 研 究 林	233	294	106	90	0	112	835
(標 茶 区)	(184)	(207)	(101)	(45)	(0)	(95)	(632)
(白 糠 区)	(49)	(87)	(5)	(45)	(0)	(17)	(203)
和 歌 山 研 究 林	178	10	94	290	0	22	594
上 賀 茂 試 験 地	262	858	295	949	69	260	2,693
北 白 川 試 験 地	19	119	141	1,185	102	123	1,689
徳 山 試 験 地	90	6	17	2	0	108	223
紀伊大島実験所	-	-	-	-	-	-	-
舞鶴水産実験所	81	832	586	3,165	311	198	5,173
瀬戸臨海実験所	194	1,584	262	499	198	51,429	54,166
計	1,572	4,467	1,999	7,430	948	64,383	80,799

平成 16 年度

(延人数)

施設名	教育利用		研究利用		公開講座等 イベント	一般利用	合計
	教職員等	学 生	教職員等	学 生			
芦 生 研 究 林	407	790	485	750	311	10,798	13,541
北 海 道 研 究 林	279	505	235	189	0	100	1,308
(標 茶 区)	(257)	(388)	(186)	(116)	(0)	(70)	(1017)
(白 糠 区)	(22)	(117)	(49)	(73)	(0)	(30)	(291)
和 歌 山 研 究 林	284	0	264	275	0	33	856
上 賀 茂 試 験 地	316	876	579	464	98	579	2,912
北 白 川 試 験 地	30	373	228	882	33	66	1,612
徳 山 試 験 地	135	0	19	12	0	44	210
紀伊大島実験所	56	203	33	118	0	133	543
舞鶴水産実験所	102	918	530	3,301	132	248	5,231
瀬戸臨海実験所	310	2,262	255	305	121	55,350	58,603
計	1,919	5,927	2,628	6,296	695	67,351	84,816

平成 17 年度

(延人数)

施設名	教育利用		研究利用		公開講座等イ ベント	一般利用	合計
	教職員等	学 生	教職員等	学 生			
芦 生 研 究 林	727	828	401	626	288	11,206	14,076
北 海 道 研 究 林	255	305	202	98	0	72	932
(標 茶 区)	(244)	(221)	(192)	(47)	(0)	(57)	(761)
(白 糠 区)	(11)	(84)	(10)	(51)	(0)	(15)	(171)
和 歌 山 研 究 林	304	133	248	244	0	48	977
上 賀 茂 試 験 地	475	909	707	374	97	339	2,901
北 白 川 試 験 地	29	376	142	927	0	109	1,583
徳 山 試 験 地	153	0	12	34	0	59	258
紀伊大島実験所	75	398	189	216	0	156	1,034
舞鶴水産実験所	79	823	846	2,884	401	88	5,121
瀬戸臨海実験所	355	2,033	269	520	144	58,730	62,051
計	2,452	5,805	3,016	5,923	930	70,807	88,933

6.3 各施設 学生実習等調べ

(1) センター提供科目

芦生研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.08.04 ~ 2003.08.06	3	京都大学 全学部	森－里－海連環学実習	全回生	62	(10)	
2	2003.08.10 ~ 2003.08.13	4	京都大学 全学部	少人数セミナー「原生的な森林の利用と管理」	1 回生	12	(4)	
3	2004.04.29 ~ 2004.06.13	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「森林の更新と動態」	1 回生	9	(3)	
4	2004.08.01 ~ 2004.08.02	2	京都大学 全学部	少人数セミナー「里山資源の保全」	1 回生	6	(2)	
5	2004.08.06 ~ 2004.08.09	4	京都大学 全学部	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	36	(4)	
6	2005.02.10 ~ 2005.02.13	4	京都大学 全学部	暖地性積雪地域における冬の自然環境	全回生	72	(12)	
7	2005.04.29 ~ 2005.06.18	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「森林の更新と動態」	1 回生	11	(3)	
8	2005.07.09 ~ 2005.07.10	2	京都大学フィールド科学教育研究センター、農学研究科	第1回昆虫COEフィールド教育プログラム「芦生の森の樹木をめぐる植食者たち」	学生	50	(11)	
9	2005.07.16 ~ 2005.07.18	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	27	(3)	
10	2005.08.08 ~ 2005.08.09	2	京都大学 全学部	森里海連環学実習ⅠA	全回生	44	(12)	
11	2006.02.10 ~ 2006.02.13	4	京都大学 全学部	暖地性積雪地域における冬の自然環境	全回生	72	(4)	
		34						
						401		

北海道研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.08.08 ~ 2003.08.14	7	京都大学 全学部	少人数セミナー「森林資源学ゼミナール」	1 回生	77	(35)	白糠区
2	2004.08.10 ~ 2004.08.16	7	京都大学 全学部	少人数セミナー「道東根釧地方の自然」	1 回生	77	(14)	白糠区
3	2004.09.09 ~ 2004.09.15	7	京都大学 全学部	森里海連環学実習Ⅱ（夏の北海道実習）	全回生	143	(24)	標茶区
4	2005.09.03 ~ 2005.09.08	5	京都大学、北海道大学	森里海連環学実習Ⅱ（夏の北海道実習）	全回生	103	(18)	標茶区
		26						
						400		

和歌山研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2005.07.26 ~ 2005.07.28	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「森林のつくりだすもの」	1 回生	36	(15)	
2	2005.09.25 ~ 2005.09.26	2	京都大学、北海道大学	森里海連環学実習ⅠB	全回生	34	(10)	
		5						
						70		

上賀茂試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2005.06.25	1	京都大学 全学部	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1 回生	9	(1)	
2	2005.09.12 ~ 2005.09.14	3	京都大学フィールド科学教育研究センター、農学研究科	大学院生による「昆虫科学とフィールド研究」シンポジウム「秋の京都で語り合う in 上賀茂試験地」	学生・院生	128	(22)	
		4						
						137		

徳山試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.07.22 ~ 2003.07.24	3 3	京都大学 全学部	少人数セミナー「照葉樹林の構造と維持」	1 回生	9 9	(3)	

北白川試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2004.04.20 ~ 2004.07.15	13	京都大学 全学部	少人数セミナー「有機農業の可能性・・・持続可能な農業をめざして」	1 回生	143	(13)	
2	2005.04.20 ~ 2005.09.20	18 31	京都大学 全学部	少人数セミナー「有機農業の可能性・・・持続可能な農業をめざして」	1 回生	162 305	(18)	

紀伊大島実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.09.24 ~ 2003.09.26	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「紀伊半島南部の里域生物相調査」	1 回生	24		
2	2004.09.06 ~ 2004.09.08	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「紀伊半島南部における里域生物相調査」	1 回生	12		
3	2004.09.20 ~ 2004.09.22	3	京都大学 全学部	森里海連環学実習Ⅱ	全回生	45	(15)	
4	2005.08.22 ~ 2005.08.26	5	京都大学 全学部	少人数セミナー「森里海のつながりを清流古座川に見る」	1 回生	55	(5)	
5	2005.09.26 ~ 2005.09.27	2	京都大学、北海道大学	森里海連環学実習ⅠB	全回生	34	(10)	
6	2005.11.18 ~ 2005.11.21	4 20	京都大学フィールド科学教育研究センター、農学研究科、理学研究科等	21世紀COEプログラム「古座川塾」	学生・院生	108 278	(6)	

舞鶴水産実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.07.11 ~ 2003.07.13	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「海洋環境と生物資源」	1 回生	27		
2	2003.08.06 ~ 2003.08.09	4	京都大学 全学部	森－里－海連環学実習	全回生	56		
3	2003.12.08 ~ 2003.12.09	2	京都大学フィールド科学教育研究センター、北海道大学、琉球大学	北大ー琉大ー京大連携シンポジウム	教員	79		
4	2004.07.02 ~ 2004.07.04	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「海辺から学ぶフィールド科学」	1 回生	33		
5	2004.08.09 ~ 2004.08.11	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「お魚好きのための魚類研究入門」	1 回生	24	(6)	
6	2005.07.01 ~ 2005.07.03	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「海の環境と沿岸資源生物」「魚類心理学入門」	1 回生	42		
7	2005.08.09 ~ 2005.08.12	4 22	京都大学 全学部	森里海連環学実習ⅠA	全回生	48 309	(2)	

瀬戸臨海実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.09.07 ~ 2003.09.14	8	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	72		
2	2004.03.16 ~ 2004.03.22	7	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	126		
3	2004.09.06 ~ 2004.09.08	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「海洋生物の多様性」	1 回生	48		
4	2004.09.08 ~ 2004.09.10	3	京都大学 全学部	少人数セミナー「紀伊半島南部の里域生物相調査」	1 回生	12		
5	2004.09.13 ~ 2004.09.20	8	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	56		

6	2004.09.23	～	2004.09.25	3	京都大学 全学部	森里海連環学実習	全回生	36	
7	2005.03.22	～	2005.03.28	7	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	49	
8	2005.05.01	～	2005.05.05	5	京都大学 全学部	少人数セミナー「海岸生物の生活史」	1 回生	45	
9	2005.07.29	～	2005.08.01	4	京都大学 全学部	少人数セミナー「海洋生物の多様性」	1 回生	12	
10	2005.09.12	～	2005.09.16	5	京都大学 全学部	少人数セミナー「節足動物学入門」	1 回生	15	
11	2005.09.16	～	2005.09.23	8	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	88	
12	2005.09.27	～	2005.09.30	4	京都大学、北海道大学	森里海連環学実習 I B	全回生	51	
13	2006.03.26	～	2006.04.01	7	全国大学	公開臨海実習（学部生対象）	他大学生	56	
				72				666	

(2) 学内利用

芦生研究林

番号	期 間	日数	所属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.05.17	～	2003.05.18	2 京都大学農学部森林科学科	森林科学科新入生芦生研究林見学	1 回生	48	(8)
2	2003.05.23			1 京都大学大学院薬学研究科	薬品資源学演習	4 回生外	19	(3)
3	2003.05.29	～	2003.05.30	2 京都大学農学部食料・環境経済学科	農学部食料・環境経済学 3 回生実習	3 回生	50	(6)
4	2003.06.14	～	2003.06.15	2 京都大学人間・環境学研究科	認識人類学のフィールド実習	院生	22	(2)
5	2003.07.04			1 京都大学農学部環境デザイン学研究室	景観生態保全に対する考察	学生・院生	17	(2)
6	2003.07.14	～	2003.07.15	2 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	生態環境論研究演習 I、Ⅲ	院生	30	(6)
7	2003.09.01	～	2003.09.05	5 京都大学農学部森林科学科	演習林実習 I	2 回生	150	(24)
8	2003.09.16	～	2003.09.19	4 京都大学農学部森林科学科	演習林実習Ⅱ	3 回生	57	(6)
9	2003.09.29	～	2003.10.02	4 京都大学農学部森林科学科	森林利用学実習及び実習法	3 回生	116	(12)
10	2004.05.15	～	2004.05.16	2 京都大学農学部森林科学科	森林科学科新入生芦生研究林植物相観察及び樹木識別	1 回生	42	(6)
11	2004.05.26	～	2004.05.27	2 京都大学人間・環境学研究科, ウイルス研究所	森林生態系とウイルス動態	院生・教員	25	(15)
12	2004.05.27	～	2004.05.28	2 京都大学農学部食料・環境経済学科	農学部食料・環境経済学 3 回生実習	3 回生	50	(6)
13	2004.06.14			1 京都大学人間・環境学研究科	認識人類学のフィールド実習	院生	12	(1)
14	2004.07.03	～	2004.07.04	2 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	芦生研究林フィールド調査法実習	院生	42	(10)
15	2004.08.30	～	2004.09.03	5 京都大学農学部森林科学科	研究林実習 I	2 回生	126	(27)
16	2004.09.15	～	2004.09.17	3 京都大学経済学研究科	自然環境と経済	2～4 回生 外	59	(3)
17	2004.09.21	～	2004.09.24	4 京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅱ	3 回生	79	(27)
18	2004.09.27	～	2004.09.30	4 京都大学農学部森林科学科	森林利用学実習及び実習法	3 回生	116	(52)
19	2004.11.03			1 京都大学理学研究科	フィールドワーク実習－菌類相から森を考える－	学生・院生	21	(1)
20	2005.05.03	～	2005.09.21	7 京都大学総合人間学部	芦生の生物相調査	3 回生	77	
21	2005.05.14	～	2005.05.15	2 京都大学農学部森林科学科	新入生歓迎登山	1 回生	16	(4)
22	2005.05.26			1 京都大学農学部食料・環境経済学科	食料・環境経済学実習	3 回生	23	(3)
23	2005.06.01	～	2005.06.02	2 京都大学人間・環境学研究科, ウイルス研究所	森林生態系とウイルス動態	院生・職員	20	(2)
24	2005.06.20			1 京都大学人間・環境学研究科	認識人類学 I	M1	13	(1)
25	2005.06.25	～	2005.06.26	2 京都大学理学部生物科学系動物学教室	脊椎動物解剖学実習	3 回生	8	(4)
26	2005.07.01	～	2005.07.03	3 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科	芦生研究林フィールド調査法実習	院生	60	(21)
27	2005.08.29	～	2005.09.02	5 京都大学農学部森林科学科	研究林実習 I	2 回生	129	(24)
28	2005.09.20	～	2005.09.22	3 京都大学農学部森林科学科	森林科学科・研究林実習Ⅱ	3 回生	63	(15)
29	2005.09.26	～	2005.09.29	4 京都大学農学部森林科学科	森林利用学実習および実習法	3 回生	100	(8)

30	2005.09.30		1	京都大学生存圏研究所	「森を見てセルロースを語ろう」	学会員	25	(4)	
31	2005.10.14	～ 2005.10.16	3	京都大学人間・環境学部	地域調査論基礎ゼミナール・現地調査実習	2～4回生	37	(11)	
32	2005.10.24		1	京都大学人間・環境学部	文化人類学演習	3～4回生	10	(1)	
33	2005.11.03		1	京都大学理学部生物科学系動物学教室	フィールドワーク実習－菌類相から森を考える－	学生・一般	28	(7)	
34	2005.11.12		1	京都大学医学部保健学科	平成17年度厚生支援特別企画・自然との融合－	教員・学生	13	(7)	
			86				1,703		

北海道研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.09.07 ~ 2003.09.13	7	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅲ（夏の北海道）	3 回生	182	(35)	標茶区
2	2004.09.02 ~ 2004.09.08	7	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅲ（夏の北海道）	3 回生	189	(10)	標茶区
3	2005.02.21 ~ 2005.02.28	8	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅳ（冬の北海道）	3 回生	180	(18)	標茶区・白糠区
4	2005.08.24 ~ 2005.08.31	8	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅲ（夏の北海道）	3 回生	125	(17)	標茶区・白糠区
5	2006.02.19 ~ 2006.02.25	7	京都大学農学部森林科学科	研究林実習Ⅳ（冬の北海道）	3 回生	126	(14)	標茶区・白糠区
		37				802		

和歌山研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2005.09.01 ~ 2005.12.16	84 84	京都大学地球環境学堂	インターン研修	1回生	86 86	(2)	

上賀茂試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.04.12	1 2003.05.19 ~ 2003.05.27 3 2003.05.21 ~ 2003.05.24 4 2003.05.28 5 2003.05.29 ~ 2003.06.05 6 2003.06.11 ~ 2003.07.10 7 2003.10.07 8 2003.10.10 9 2003.11.21	京都大学農学研究科森林科学科・専攻	森林科学科新入生ガイダンス及び歓迎会	学生・教官	257	(54)	産学連携「熱帯森林生態系の炭素収支」
2	2003.05.19		京都大学理学研究科生物科学専攻(動)	生物学実習	3回生	63	(7)	
3	2003.05.21		京都大学総合人間学部	生物学実習 V	1～4回生	39	(4)	
4	2003.05.28		京都大学農学研究科地域環境学専攻	土壌物理学・水環境工学実験	3回生	30	(1)	
5	2003.05.29		京都大学農学研究科森林科学専攻	森林総合実習及び実習法	3回生	55	(3)	
6	2003.06.11		京都大学農学研究科森林科学専攻	森林生物学実験及び実験法	3回生	100	(6)	
7	2003.10.07		京都大学農学研究科森林科学専攻	森林科学実習Ⅳ(1)	2回生	53	(2)	
8	2003.10.10		京都大学農学研究科森林科学専攻	樹木の超微形態観察及び観察法	3回生	12	(3)	
9	2003.11.21		京都大学地球環境学堂	里山再生論	M1	9	(1)	
10	2004.04.17	京都大学農学研究科森林科学科・専攻	森林科学科新入生ガイダンス及び歓迎会	学生・教員	239	(54)		
11	2004.05.17	京都大学理学研究科生物科学科	生物学実習	3回生	68	(8)		
12	2004.06.03	京都大学農学研究科森林科学科	森林総合実習及び実習法	3回生	48	(1)		
13	2004.06.03	京都大学農学研究科森林科学科	森林生物学実験及び実験法	3回生	146	(6)		
14	2004.06.09	京都大学農学研究科地域環境科学科	土壌物理学・水環境工学実験	1回生	26	(1)		
15	2004.08.05	京都大学農学研究科地域環境科学専攻	日本樹木・森林の見学	共同研究者	10			
16	2004.10.05	京都大学農学研究科森林科学科	森林科学実習Ⅳ	3回生	49	(1)		
17	2004.10.15	京都大学農学研究科森林科学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3回生	16	(1)		
18	2004.11.24	京都大学地球環境学堂	里山再生論	M1	7	(1)		
19	2005.04.16	京都大学農学部森林科学科・専攻	森林科学科新入生ガイダンス及び歓迎会	学生・教員	245	(66)		

20	2005.05.16	～	2005.05.23	4	京都大学理学部生物科学系	生物学実習「野外調査法－昆虫の密度推定法」	3 回生	90	(4)	
21	2005.06.02	・	2005.06.09	2	京都大学農学部森林科学科	森林総合実習及び実習法	3 回生	46	(6)	
22	2005.06.08			1	京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験、土壌の三相分布測定及び浸入能試験実習	1 回生	17	(1)	
23	2005.06.16	～	2005.07.14	4	京都大学農学部森林科学科	森林生物学実験及び実験法	3 回生	96	(4)	
24	2005.09.28	～	2005.09.29	2	京都大学教育学研究科	シニアキャンパス 2005	受講生	48	(9)	
25	2005.10.04			1	京都大学農学部森林科学科	森林科学実習Ⅳ	2 回生	54	(1)	
26	2005.10.21			1	京都大学農学部森林科学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3 回生	12	(3)	
27	2005.12.14			1	京都大学農学部森林科学科	生態学実験及び実験法	3 回生	21	(1)	
				52				1,856		

徳山試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
			該当なし					

北白川試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.04.16		1 京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験 土壌三相分布測定	3 回生	26	(1)	実験用植物試料サワラの提供及び見学
2	2003.04.21	・ 2003.05.02	2 京都大学農学部食品生物科学科・応用生命科学科	有機化学実験及び実験法・生物有機化学実験及び実験法	3 回生	16	(5)	
3	2003.10.03		1 京都大学農学部森林科学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3 回生	15	(2)	
4	2003.10.10		1 京都大学農学部森林科学科	森林植物学	3 回生	16	(1)	
5	2003.12.15		1 京都大学農学部森林科学科	森林水文・砂防学実験及び実験法	3 回生	12	(4)	
6	2003.12.16		1 京都大学農学部応用生命科学科	生物有機化学実験	3 回生	53	(6)	
7	2004.04.20	～ 2004.06.08	4 京都大学農学部森林科学科	森林科学実習Ⅰ	2 回生	111	(4)	
8	2004.04.21		1 京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験	3 回生	25	(1)	
9	2004.10.08	・ 2004.10.22	2 京都大学農学部森林科学科	樹木の超微形態観察及び観察法	3 回生	21	(6)	
10	2004.10.18	～ 2004.11.15	3 京都大学農学部森林科学科	森林水文・砂防学実験及び実験法	3 回生	56	(3)	
11	2004.12.16		1 京都大学農学部森林科学科	森林植物学	3 回生	19	(1)	
12	2004.12.16	～ 2004.12.17	2 京都大学農学部森林科学科	生態学実験及び実験法	3 回生	28	(2)	
13	2005.04.20		1 京都大学農学部地域環境工学科	土壌物理学・水環境工学実験 土壌三相分布測定	3 回生	20	(1)	
14	2005.04.26	～ 2005.06.14	3 京都大学農学部森林科学科	森林科学実習Ⅰ 樹木及び昆虫類の観察及び採集	2 回生	83	(3)	
15	2005.06.22	～ 2005.06.30	4 京都大学農学部森林科学科	森林生物学実験及び実験法 樹木及び昆虫類の観察及び採集	3 回生	85	(4)	
16	2005.11.10	・ 2005.11.17	2 京都大学農学部森林科学科	生態学実験及び実験法 樹木及び昆虫類の観察及びサンプリング	3 回生	29	(2)	
17	2005.12.16		1 京都大学農学部森林科学科	森林植物学 樹木分類・識別実習	3 回生	26	(1)	
						641		

紀伊大島実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.09.08	～ 2003.09.12	5 京都大学農学部資源生物科学科	植物調査法と実習	2 回生	65		
2	2004.09.13	～ 2004.09.17	5 京都大学農学部	植物調査法と実習	2 回生	100		
3	2005.09.04	～ 2005.09.08	5 京都大学地球環境学学	里域植生保全論	院生	35	(5)	
4	2005.09.12	～ 2005.09.16	5 京都大学農学部	植物調査法と実習	2 回生等	105	(5)	
5	2005.10.28	～ 2005.10.30	3 京都大学自然科学思春期の会	第2回（串本紀伊大島）大会ならびに里域保全実習	学生・院生	57	(3)	

舞鶴水産実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.08.20 ~ 2003.09.02	14	京都大学農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ	2 回生	318	(12)	
2	2003.09.08 ~ 2003.09.11	4	京都大学農学部・農学研究科	水理学実験実習	3 回生外	144	(12)	
3	2004.08.19 ~ 2004.09.01	14	京都大学農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ	2,3 回生	369	(16)	
4	2004.09.06 ~ 2004.09.09	4	京都大学農学部・農学研究科	水理学実験実習	3 回生・M1	124	(12)	
5	2005.08.19 ~ 2005.09.01	14	京都大学農学部	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ	2,3 回生	269	(33)	
6	2005.09.12 ~ 2005.09.15	4	京都大学農学部・農学研究科	水理学実験実習	3 回生・M1	148	(8)	
7	2005.11.10	1	京都大学農学部・農学研究科	水産実験所・増殖学・生物環境学合同ゼミ	学生・院生	39	(3)	
8	2006.01.21 ~ 2006.02.23	3	京都大学情報学研究科、近畿大学	バイオギングに関するワークショップ	大学院生	51	(3)	
		55				1,411		

瀬戸臨海実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.07.21 ~ 2003.07.23	3	京都大学理学研究科化学教室	海洋無機分析実習	4 回生外	60	(12)	
2	2003.08.04 ~ 2003.08.07	4	京都大学人間環境学研究科	海洋化学実習	3 回生外	80	(20)	
3	2003.08.07 ~ 2003.08.14	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（前半）	2,3 回生外	80		
4	2003.08.07 ~ 2003.08.14	8	京都大学理学部	臨海実習第4部	3 回生	32		
5	2003.09.07 ~ 2003.09.14	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（後半）	2,3 回生	48		
6	2003.09.15 ~ 2003.09.16	2	京都大学防災研究所	地球惑星科学専攻実習	4 回生外	52	(8)	
7	2004.03.16 ~ 2004.03.22	7	京都大学理学部	臨海実習第2部	2 回生以上	91		
8	2004.03.23 ~ 2004.03.28	6	京都大学理学部	臨海実習第3部	2 回生以上	42		
9	2004.04.13 ~ 2004.04.14	2	京都大学大学院理学研究科生物科学専攻	INTER LAB	院生	104		
10	2004.08.10 ~ 2004.08.13	4	京都大学大学院人間・環境学研究科	海洋化学実習	M1 外	72		
11	2004.08.24 ~ 2004.08.31	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（前半）	3 回生外	96		
12	2004.08.24 ~ 2004.08.31	8	京都大学理学部	臨海実習第4部	3 回生	8		
13	2004.09.13 ~ 2004.09.20	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（後半）	2 回生	72		
14	2004.09.20 ~ 2004.09.21	2	京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻	気象海象観測実習	M1 外	28		
15	2005.02.22 ~ 2005.02.25	4	京都大学 全学部	生物学実習Ⅱ（海洋生物学コース）	1 回生外	96		
16	2005.03.09 ~ 2005.03.14	6	京都大学理学部	臨海実習第3部	2 回生	12		
17	2005.03.22 ~ 2005.03.28	7	京都大学理学部	臨海実習第2部	2 回生	77		
18	2005.04.15 ~ 2005.04.16	2	京都大学理学研究科生物科学専攻	INTER LAB	1 回生	86		
19	2005.07.26 ~ 2005.07.29	4	京都大学総合人間学部	海洋化学実習	3 回生～M1	76		
20	2005.08.13 ~ 2005.08.14	2	京大生命科学研究科ほか	瀬戸バイオサロン	4 回生～M1	12		
21	2005.08.15 ~ 2005.08.22	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（前半）	2～4 回生	32		
22	2005.08.28 ~ 2005.09.01	5	京都大学 全学部	探求型化学実験	2 回生～M2	80		
23	2005.09.10 ~ 2005.09.11	2	京都大学防災研究所	気象海象観測実験	M1～M2	44		
24	2005.09.16 ~ 2005.09.23	8	京都大学理学部	臨海実習第1部（後半）	2～3 回生	72		
25	2006.02.27 ~ 2006.03.02	4	京都大学 全学部	生物学実習Ⅱ（海洋生物学コース）	1～3 回生	110		
26	2006.03.04 ~ 2006.03.09	6	京都大学理学部	臨海実習第3部	2～4 回生	30		
27	2006.03.26 ~ 2006.04.01	7	京都大学理学部	臨海実習第2部	2 回生	49		
		143				1,641		

(3) 学外利用

芦生研究林

番号	期 間	日数	所属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.05.08	1	朽木中学校	校外学習	1年生	32	(5)	
2	2003.05.29	1	京都造形芸術大学環境デザイン学科	フィールドワークⅠ	1回生	102	(10)	
3	2003.06.05	1	名古屋大学大学院生命農学研究科	地域資源管理学演習Ⅱの現地研修	4回生外	11	(2)	
4	2003.07.16	4	大阪大学大学院理学研究科生物学科	生物学野外実習	1回生	104	(12)	
5	2003.07.31	3	なし	公開講座	一般市民	147		応募者 64 名
6	2003.09.22	3	大阪市立大学大学院理学研究科植物生態学	野外実習	2回生	66	(5)	
7	2003.10.09	1	京都府立久御山高等学校Ⅱ類理数コース	総合的な学習の時間 芦生フィールドワーク	1年生	48	(9)	総合的な学習の時間
8	2003.10.18	1	美山町立知井小学校	親子で見よう大学の森[J r. ナイス&ものづくり]	5,6年生	30	(3)	大学等地域開放事業
9	2003.10.20	1	京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科	森林リサーチ科校外学習	1年生	34	(4)	
10	2004.05.16	2	兵庫県立尼崎小田高等学校	ブナ林の生態、種子のシイナ率、稚樹の生育状況調査	1～3年生	18	(2)	
11	2004.05.26	1	朽木中学校	校外学習(1学年林業体験)	1年生	29	(7)	
12	2004.07.27	1	美山町立小学校	校外学習「美山っ子グリーンワールド」	4年生	70	(14)	
13	2004.07.29	3	なし	公開講座	一般	147		応募者 64 名
14	2004.08.03	3	なし	森林環境教育のワークショップ	学校教員	69	(27)	
15	2004.08.05	1	大阪府立東淀川高等学校バイオアクティ部	植物群落及び水生昆虫の観察	1～3年生	10	(1)	
16	2004.08.20	4	大阪大学理学部生物学科	生物学野外実習	1回生	100	(28)	
17	2004.09.26	3	大阪市立大学理学部生物学科	野外実習	2回生	84	(32)	
18	2004.09.28	2	なし	府内：グリーンワーカー伐木・造材・搬出研修	林業従事者	38		(財)京都府林業労働支援センター主催
19	2004.09.30	1	岐阜県立森林文化アカデミー	国内研修	2年生	26	(4)	
20	2004.10.05	3	全国大学演習林	京都大学フィールド研 技術職員研修	技術職員	48	(12)	
21	2004.10.07	1	タイ国カセサート大学、京都大学農学部・農学研究科	温帯アジアにおける人間活動と環境問題	1～4回生	16	(1)	ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業大学生交流プログラム
22	2004.10.13	1	京都府立久御山高等学校Ⅱ類理数コース	芦生フィールドワーク	1年生	47	(5)	
23	2004.10.16	1	キッズ由良川Y2クラブ綾部市内小学生	省庁連携子ども体験型環境学習推進事業キッズ由良川Y2クラブ	4～6年生	24	(3)	文科省→京都府→綾部市への委託事業
24	2004.10.18	1	京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科	校外学習 環境科学基礎(森林の観察)	1年生	30	(3)	
25	2004.11.27	1	京都嵯峨芸術大学観光デザイン研究センター	ブナ林の自然観察とエコツーリズム研修	学生	8	(1)	
26	2005.05.14	4	兵庫県立尼崎小田高等学校	ブナ林の生態、種子のシイナ率、稚樹の生育状況の調査－地球温暖化の指標として－	高校生	36		
27	2005.05.20	1	高島市立朽木中学校	1年生校外実習(ブナ原生林散策)	1年生	26		
28	2005.07.28	3	なし	公開講座	一般	177		応募者 64 名
29	2005.08.02	1	和知町立和知中学校	芦生研究林の植生全般の現地踏査 中学校理科の教材研究	理科教員	9		
30	2005.08.19	4	大阪大学理学部	生物学野外実習	1回生	140	(12)	
31	2005.08.24	2	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	森林体験学習	高校生	56	(8)	大学等地域開放特別事業
32	2005.08.24	1	なし	緑の少年団 地区交流会	小学生	26		
33	2005.09.03	1	立命館大学理工学部	環境計画研究室の課外活動ゼミ	4回生	21	(2)	
34	2005.09.12	1	舞鶴市立岡田下小学校	杉尾峠近くの源流から長治谷の見学・取材	4年生	5		
35	2005.09.13	2	大阪府立大学地域環境科学科	地域環境科学科実験・実習	学生	32	(4)	
36	2005.10.04	3	全国大学演習林	京都大学フィールド研 技術職員研修	技術職員	57	(6)	
37	2005.10.07	5	兵庫県立姫路飾西高等学校	学校設定科目 W O S I (Wonders of Science I)	高校生	121		

38	2005.10.07	1	美山町立大野小学校	町内4年生児童に芦生原生林の樹木や植物に関心を持たせる	4年生	43		
39	2005.10.12	1	京都府立北桑田高等学校	北桑田高校森林リサーチ科 校外学習	高校生	32		
40	2005.10.12	1	京都府立久御山高等学校	芦生の森を訪ねて	高校生	46		
41	2005.11.12 ~ 2005.11.13	2	シニア自然大学	生態系の学習と自然観察の実習	受講生	79		
		63				1,834		

北海道研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.05.30	1	標茶町立標茶小学校	校外活動	3年生	53	(2)	標茶区
2	2003.06.16	1	標茶町立弥栄小学校	地域学習（木工教室）	1～6年生	22	(7)	標茶区
3	2003.06.21	1	標津町生涯川北学習センター	体験スクール、森林について学ぼう	3～5年生	9	(2)	標茶区
4	2003.09.05	1	標茶町立中オソベツ小学校	環境教育	3～5年生	11	(3)	標茶区
5	2003.10.30	1	標茶町立弥栄小学校	地域学習	1～6年生	21	(6)	標茶区
6	2003.11.01	1	標茶町立弥栄小学校教職員及び家族	J.rサイエンス&ものづくり		25		標茶区
7	2003.11.15	1	なし	自然観察会	一般市民	11		白糠区
8	2004.05.28	1	標茶町立標茶小学校	遠足	3年生	52	(3)	標茶区
9	2004.06.06	2	標茶町郷土館	ブチ・フラワソソ in 多和	一般	18	(4)	標茶区 郷土館講座
10	2004.06.25	1	標茶町立弥栄小学校	総合的な学習での地域学習（木工体験）	児童	20	(7)	標茶区
11	2004.07.02	1	標茶町教育研究所	理科部会・7月研究会 自然観察会	教員	5		標茶区
12	2004.08.17	1	放送大学京都学習センター	第1学期面接授業（集中型）「道東地方の自然」	受講生	48	(1)	標茶区
13	2004.10.04	1	標茶町立弥栄小学校	総合的な学習での地域学習（環境学習）	児童	19	(7)	標茶区
14	2004.10.10	1	標茶町森林・林業・林産業活性化推進議員連盟	「標茶町の森林の役割と機能」について	町会議員外	18		標茶区
15	2004.10.25	1	地域ゼロエミッション研究会（藻場再生研究会）	地域振興対策（環境保全・新産業創出）	会員	33		標茶区
16	2005.05.30	1	標茶町立標茶小学校	遠足	3年生	53		標茶区
17	2005.06.22	1	標茶町立弥栄小学校	総合的な学習での地域学習（木工体験）	児童	16		標茶区
18	2005.08.06	1	標茶町教育委員会中央公民館	「家庭教育学級」第4講座「木工教室」	一般・児童	23		標茶区 標茶町中央公民館事業
19	2005.10.15 ~ 2005.10.16	2	なし	標茶町アドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座	児童	72		標茶区
20	2005.10.23	1	標茶町教育委員会標茶郷土館	郷土館講座「軍馬補充部 歴史の残滓を探訪」	一般	15		標茶区
21	2005.10.25	1	なし	きれいな水を育む森林づくり事業（地域政策推進事業）	児童	27		標茶区
		23				571		

和歌山研究林

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.04.11 ~ 2004.01.16	28	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	78	(22)	大学等地域開放特別事業
2	2003.06.10	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	自然観察会（SIMIZUタイム）	1年生	20	(5)	地域開放
3	2004.04.16 ~ 2005.01.14	25	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	73	(25)	大学等地域開放特別事業
4	2004.06.09	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間（SIMIZUタイム）	1年生	27	(6)	
5	2004.08.10	1	清水町教育委員会	海山観察会	児童	22	(2)	小学4年生～中学3年生
6	2004.10.18	1	有田市立田鶴小学校	総合的な学習の時間（トライザHAMA）	6年生	54	(3)	
7	2004.11.11	1	清水町立栗生小学校	総合的な学習の時間	3～6年生	26	(4)	
8	2005.04.22 ~ 2006.01.20	23	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	121	(30)	
9	2005.05.30	1	和歌山県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間（SIMIZUタイム）	1年生	32	(8)	
10	2005.08.17	1	清水町教育委員会	海山観察会	児童	32	(7)	小学4年生～中学3年生

11	2005.09.04	1	和歌山県立自然博物館	モミ・ツガ林におけるキノコ類の種類の同定	一般	68		
12	2005.10.21	1	清水町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森林体験活動」	5年生	28	(7)	
		28				78		

上賀茂試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.05.12	2	京都精華大学人文学部環境社会学科	環境教育論	1～3回生	72	(2)	
2	2003.05.27	1	京都精華大学芸術学部	総合デザイン基礎「植物形態の観察」	1回生	35	(1)	
3	2003.05.30	2	京都造形芸術大学環境デザイン学科	造園実習	3回生	68	(4)	
4	2003.07.05	1	全国森林インストラクター会	研修会「古都にみる山・林業・景観風景」	会員	84	(1)	
5	2003.09.12	1	京都府立大学農学研究科生物生産環境学専攻	森林植物学実習	3回生	37	(2)	
6	2003.09.15	1	大阪教育大学教育学部附属高校平野校舎	生物Ⅱ 樹木がわかる林学実習	3年生	32	(3)	文部科学省サイエンス・パート ナークシップ・プログラム事業
7	2003.09.30	1	NPO 法人シニア自然大学 高等科	自然観察会	受講生	25	(3)	
8	2003.10.04	1	NHK 文化センター千林教室	マツ属等外国種植栽林の観察会	受講生	15	(2)	講座「野の道を歩く」
9	2003.10.31	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	ネイチャーゲーム実習	1～3回生	134	(16)	
10	2003.11.22	1	なし	一般公開「自然観察会」	一般市民	59		応募者 460 名、 京の府民大学講座
11	2004.04.20	1	上賀茂健康友の会	自然観察	会員	14		
12	2004.04.26	4	京都精華大学人文学部環境社会学科	環境教育論	1～3回生	105	(4)	
13	2004.05.14	2	京都造形芸術大学環境デザイン科	ランドスケープ計画Ⅲ・Ⅳ	3回生	48	(7)	
14	2004.05.21	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	森林マネジメント・森林マネジメント演習のための見学	2,3回生	33	(1)	
15	2004.06.01	3	京都精華大学芸術学部	総合デザイン基礎	1回生	43	(1)	
16	2004.06.12	1	自然観察指導員京都連絡会	樹木及び生物の観察	会員	28		
17	2004.06.19	1	シニア自然大学	マツ属を中心とした研修	受講生	30	(1)	
18	2004.07.31	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然観察指導員講習会	1～3回生外	62	(12)	
19	2004.09.10	1	京都府立大学生物生産環境科学科	森林植物学実習	3回生	37	(2)	
20	2004.09.17	1	全国演習林協議会	秋季総会	参加者	47		
21	2004.09.29	1	ムニの会	自然観察	会員	11		
22	2004.10.02	1	大阪教育大学付属平野中学校	樹木がわかる林学実習	1～3年生	57	(5)	文部科学省 SPP 事業
23	2004.10.03	1	京都聖マリア協会日曜学校	日曜学校教育	一般	23		
24	2004.10.07	1	新潟県上越地域振興局農林振興部林業振興課	林業先進地視察研修会	一般	16		
25	2004.10.13	1	神戸市立森林植物園	上賀茂試験地における樹木育成状況	職員	4		
26	2004.10.16	2	シニア自然大学マイスターコース	菌類の採集から分離まで・森林での菌類の生態観察	受講生	46	(2)	
27	2004.10.17	1	京都薬草の会	薬草植物を勉強する会	会員	26		
28	2004.10.29	1	京都樹木探検塾	観察研究	会員	17		
29	2004.10.31	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	ネイチャーゲーム初級指導員講習会	1～3回生	123	(3)	
30	2004.11.15	1	JTB カルチャーサロン	森と里と海のつながり 日本の里一里山の自然	受講生	11	(1)	フィールド研提携講座 応募者 87 名、京の府民 大学講座
31	2004.11.22	1	なし	一般公開自然観察会	一般	60		
32	2004.11.26	1	京都市立市原野小学校	総合的な学習の時間	3年生	21	(2)	
33	2004.11.30	1	シニア自然大学高等科	自然観察	受講生	36	(1)	
34	2004.12.07	1	アクトクラブ	植物の自然観察	会員	18		
35	2005.03.19	1	森の“聞き書き甲子園”OB・OG	愛・地球博 展示プロジェクトワークショップ	参加者	24	(9)	京都大学総合博物館・ NPO 法人樹木・環境ネッ トワーク協会共催

36	2005.04.01	～	2006.03.31	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然教育論	1～3回生	76	(3)	
37	2005.04.23			1	なし	春の一般公開自然観察会	一般	37	(5)	応募者 45 名
38	2005.04.25			1	JTB カルチャーサロン	森と里と海のつながり	受講生	7	(1)	フィールド研提携講座
39	2005.05.13	・	2005.12.02	2	京都造形芸術大学環境デザイン学科	ランドスケープ計画Ⅲ・Ⅳ 名園実習	3回生	61	(6)	
40	2005.05.18			1	株式会社大伸社企画制作部	環境教育プログラムのご案内 森林への招待	一般	20	(1)	
41	2005.05.21			1	シニア自然大学マイスターコース	森林生態系における鳥類の役割観察	受講生	33		
42	2005.05.31	～	2005.06.04	5	京都精華大学芸術学部	総合デザイン基礎 1	1回生	46	(1)	
43	2005.06.08			1	京都精華大学人文学部環境社会学科	森林マネジメント	2,3回生	15	(1)	
44	2005.07.08			1	京都府立大学農学部森林科学科	森林植物学実習	3回生	32	(2)	
45	2005.07.30			1	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然観察指導員講習会	1～3回生 外	74	(9)	
46	2005.09.23			1	大阪教育大学附属高校平野校舎	「樹木がわかる林学実習」	1～3年生	27		文部科学省 SPP 事業
47	2005.09.27			1	シニア自然大学高等科	植物観察	受講生	39		
48	2005.10.01			1	羽曳野市立誉田中学校	「樹木がわかる林学実習・入門編」	1,2年生	20		文部科学省 SPP 事業
49	2005.10.30	～	2005.11.01	3	京都精華大学人文学部環境社会学科	ネイチャーゲーム初級指導員講習会	1～3回生	84	(3)	
50	2005.11.19			1	なし	秋の一般公開自然観察会	一般	32	(5)	応募者 64 名
51	2005.12.04			1	京都府ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲーム京都府大会	一般	40		
52	2006.02.04			1	なし	冬の炭焼き体験会	一般	28	(6)	
53	2006.02.19			1	京都府ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲーム京都府大会Ⅱ	一般	44		
				75				2,216		

徳山試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2005.01.11 ~ 2005.01.21	9	(社) 全国社寺等屋根工事技術保存会	檜皮採取技能士養成研修	受講生	45		
2	2005.01.24 ~ 2005.02.04	10	(社) 全国社寺等屋根工事技術保存会	檜皮採取技能士養成研修	受講生	90		
3	2005.08.29 ~ 2005.10.28	51	(社) 全国社寺等屋根工事技術保存会	檜皮採取技能士養成研修	受講生	153		
		70				288		

北白川試験地

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.08.12		1	高校生	受験生のための京都大学オープンキャンパス 2003	高校生	102	
2	2004.10.17		1	なし	森林科学専攻 公開講座「森と木から見える世界」	一般	33	(3)
			2				135	

紀伊大島実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.05.27	1	和歌山県立串本高校	理科「環境」	3年生	11	(1)	普通科選択生「環境」科目 郷土の植物の分布
2	2003.11.17	1	串本町立大島小学校	生活科	1,2年生	24	(2)	
3	2004.09.27 ~ 2004.09.28	2	大阪府立大学農学生命科学研究科	照葉樹林の構成樹種同定と林分構造調査実習	3,4回生	38	(16)	
4	2005.08.05 ~ 2005.08.07	3	社団法人国土緑化推進機構等	森林環境教育ワークショップ	一般	34	(5)	
5	2005.08.08	1	串本町教育研究会理化部会	紀伊大島における里域保全	小中教員	11	(1)	

6	2005.08.18	～	2005.08.19	2	和歌山県立田辺商業高校 生物部	紀伊大島体験学習会	高校生等	20	(6)
7	2005.09.09			1	串本町立田原中学校	南紀の里域	3年生	7	(2)
				11				145	

舞鶴水産実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.04.22	1	舞鶴市立新舞鶴小学校	見学学習	4年生	134	(6)	
2	2003.07.28	～	2003.08.01	5 京都教育大学附属高等学校	臨海実習	1年生	142	(25)
3	2003.08.04	1	京都府立高等学校家庭科研究会	研修会	家庭科教員	11		
4	2003.09.16	～	2003.09.20	5 大阪教育大学教育学部	生命科学実験Ⅰ	2回生	115	(10)
5	2003.09.25	～	2003.09.30	6 岐阜大学教育学部	臨海実験法及び実験	2回生	96	(12)
6	2003.11.14	1	京都府立海洋高等学校	総合学習	3年生	23	(3)	
7	2004.07.19	～	2004.07.23	5 京都教育大学附属高等学校	臨海実習	1年生	150	(20)
8	2004.08.07	1	放送大学	見学実習	受講生	25		
9	2004.09.17	～	2004.09.22	6 岐阜大学教育学部	臨海実習	2回生	138	(12)
10	2004.09.24	～	2004.09.28	5 大阪教育大学	生命科学実験Ⅰ	2回生	90	(10)
11	2004.11.16	1	舞鶴市立吉原小学校	総合学習	5,6年生	31	(3)	
12	2004.11.19	1	京都府立海洋高等学校	総合学習	3年生	21	(3)	
13	2004.12.11	1	舞鶴市立中舞鶴小学校	見学実習	児童	80		
14	2005.03.19	～	2005.03.21	3 日本科学技術振興財団	スプリングサイエンスキャンプ	高校生	54	(6)
15	2005.05.02	1	舞鶴市立新舞鶴小学校	見学実習	4年生	114	(5)	
16	2005.07.21	～	2005.07.23	3 京都教育大学附属高等学校	1年 SSH クラス臨海実習	1年生	69	(12)
17	2005.07.26	1	京都府立西舞鶴高等学校	臨海実習（海洋調査）	2年生	15	(4)	文部科学省 SPP 事業
18	2005.08.12	～	2005.08.13	2 日本ボーイスカウト京都連盟	環境学習	会員	90	
19	2005.08.17	1	綾部市学校教育研究会	日本海の水産資源と現状	会員	24		
20	2005.08.27	1	舞鶴市民	海からの見学会	市民	35		
21	2005.09.12	～	2005.09.17	6 岐阜大学教育学部	臨海実習	2回生	90	(12)
22	2005.10.07	～	2005.10.11	5 兵庫県立姫路飾西高等学校	体験実習推進事業	1年生	120	(11)
23	2005.10.27	1	京都府立海洋高等学校	総合学習	3年生	20	(3)	
		63				1,687		

瀬戸臨海実験所

番号	期 間	日数	所 属	科 目 名	対象者	延人数	内指導 教員等	備 考
1	2003.04.17	～	2003.04.21	5 和歌山大学教育学部生物学教室	臨海実習（植物）	3回生	45	(10)
2	2003.05.13	～	2003.05.18	6 奈良女子大学理学部生物科学科	臨海実習Ⅱ	3回生	108	(12)
3	2003.05.29	～	2003.06.03	6 大阪教育大学教育学部教員養成課程	臨海実習	3回生	102	(12)
4	2003.06.15	～	2003.06.16	2 放送大学	面接授業	一般	42	(2)
5	2003.06.16	～	2003.06.20	5 奈良教育大学教育学部	野外実習 A - II	2～4回生	70	(10)
6	2003.06.29	～	2003.07.03	5 和歌山大学教育学部生物学教室	臨海実習（動物）	3回生	40	(10)
7	2003.07.13	～	2003.07.19	7 大阪市立大学大学院理学研究科	臨海実習	3回生	210	(56)
8	2003.07.25	～	2003.07.28	4 滋賀県立膳所高校	生物実習	1,2年生	92	(16)
9	2003.07.30	～	2003.08.04	6 大阪大学理学研究科	生物学臨海実習	2回生外	138	(30)
10	2003.08.04	～	2003.08.07	4 信州大学理学部	計測化学特論実習	M1	28	(4)
11	2003.08.18	～	2003.08.20	3 兵庫県立尼崎小田高等学校	臨海実習	1,2年生	21	(3)

12	2003.08.21	～	2003.08.25	5	関西学院大学理工学部	臨海実験・臨海実験演習（1・2）	1 回生	140	(25)
13	2003.08.26	～	2003.08.30	5	京都教育大学生物学教室	生物学夏季実習Ⅱ	2～4 回生外	70	(5)
14	2003.09.04	～	2003.09.07	4	滋賀大学教育学部	臨海実習	1～4 回生外	112	(16)
15	2003.09.20	～	2003.09.21	2	歩む会	なし	一般	30	
16	2003.10.07	～	2003.10.09	3	大阪千代田短期大学	磯観察	2 回生	51	(3)
17	2003.11.24			1	日本動物学会近畿支部	公開講座	中・高生	16	
18	2003.12.01			1	白浜町	浜辺の観察会	小学生	57	(5)
19	2004.04.06	～	2004.04.10	5	和歌山大学教育学部	臨海（植物）実習 A	3 回生	60	
20	2004.05.17	～	2004.05.22	6	大阪教育大学教育学部	臨海実習	3 回生	90	
21	2004.05.31	～	2004.06.05	6	奈良女子大学理学部	臨海実習	3 回生外	102	
22	2004.06.10			1	和歌山県立田辺高等学校生物部	海洋生物実習	2 年生	4	
23	2004.06.12	～	2005.06.13	2	放送大学	第 1 学期（土日型）「海洋生物の多様性」	受講者	30	
24	2004.06.15	～	2004.06.19	5	奈良教育大学教育学部	臨海実習	2 回生	55	
25	2004.06.17			1	和歌山県立田辺高等学校生物部	海洋生物実習	2 年生	3	
26	2004.07.01	～	2004.07.05	5	和歌山大学教育学部	臨海（動物）実習 B	3 回生	60	
27	2004.07.09	～	2004.07.12	4	神戸市立須磨海浜水族園	磯の動物の系統分類学実習	ボランティア外	76	
28	2004.07.12	～	2004.07.18	7	大阪市立大学理学部	臨海実習	3 回生	105	
29	2004.07.25	～	2004.07.28	4	日米教育委員会フルブライトメモリアル基金	日米共同理科教育ネットワークプログラム	中・高校生	84	
30	2004.07.26			1	西牟婁科研・市教研理科部共催	夏期現地研修会	教諭・講師	11	
31	2004.07.27	～	2004.07.28	2	和歌山県立田辺商業高等学校	生物クラゲの活動	高校生	10	
32	2004.07.28	～	2004.07.31	4	滋賀県立膳所高等学校	第 3 5 回 生物実習旅行	1 年生	60	
33	2004.08.02	～	2004.08.04	3	兵庫県立尼崎小田高等学校サイエンス科	臨海実習	2 年生外	42	
34	2004.08.05	～	2004.08.09	5	関西学院大学理工学部	臨海実習	1 回生	100	
35	2004.08.10	～	2004.08.13	4	信州大学理学部	計測化学特論実習	M1 外	60	
36	2004.08.10	～	2004.08.13	4	人間環境大学人間環境学部	臨海実習	4 回生	4	
37	2004.08.16	～	2004.08.20	5	京都教育大学教育学部	生物学夏季実習Ⅱ実習	M1 外	75	
38	2004.08.18			1	白浜町児童館主催	自然環境教室「海の生き物を見よう」	児童	35	
39	2004.08.31	～	2004.09.05	6	大阪大学理学部	生物学臨海実習	2 回生外	126	
40	2004.10.01	～	2004.10.03	3	大阪千代田短期大学幼児教育科	磯観察実習	2 回生	48	
41	2004.11.13	～	2004.11.14	2	放送大学	「海洋と地球環境」	受講生	34	
42	2004.12.06			1	白浜町生活環境課主催	水辺環境教室	小学生・保護者	58	
43	2005.03.01	～	2005.03.04	4	なし	NaGISA Workshop: Taxonomy of Echinodermata	member	60	
44	2005.03.14	～	2005.03.16	3	龍谷大学	環境サイエンスコース・環境フィールドワーク臨海実習	2 回生	54	
45	2005.03.17	～	2005.03.19	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	長期宿泊体験学習	1 年生	60	文科省豊かな体験推進事業
46	2005.03.19	～	2005.03.21	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	長期宿泊体験学習	1 年生	60	文科省豊かな体験推進事業
47	2005.04.08	～	2005.04.12	5	和歌山大学教育学部	臨海実習 A（植物）	3 回生	50	
48	2005.05.22			1	和歌山県立田辺商業高等学校	NaGISA による海草群島の調査	高校生	13	
49	2005.05.23	～	2005.05.28	6	奈良女子大学理学部	臨海実習Ⅱ	3 回生	144	
50	2005.06.05			1	和歌山県立田辺商業高等学校	NaGISA による海草群島の調査	高校生	15	
51	2005.06.07	～	2005.06.11	5	奈良教育大学教育学部	野外実習 A－Ⅱ（臨海実習）	3 回生	83	
52	2005.06.17	～	2005.06.22	6	大阪教育大学教育学部	臨海実習	3 回生	120	
53	2005.06.22	～	2005.06.26	5	和歌山大学教育学部	臨海実習 B（動物）	3 回生	55	
54	2005.07.01	～	2005.07.02	2	滋賀県立膳所高等学校ほか	S P S 連携プログラム教員研修	高校教員	38	
55	2005.07.04	～	2005.07.10	7	大阪市立大学理学部	臨海実習	3 回生	80	
56	2005.07.19	～	2005.07.21	3	フルブライト	日米共同理科教育ネットワークプログラム	中高生	42	
57	2005.07.22	～	2005.07.25	4	滋賀県立膳所高等学校	第 3 6 回生物実習旅行	高校生	100	

58	2005.07.22		1	大阪府立豊中高等学校	研究見学	高校生	10	
59	2005.07.26	～ 2005.07.29	4	信州大学理学部	計測化学特論	4回生～ M1	32	
60	2005.08.02	～ 2005.08.04	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	サイエンスリサーチ科臨海実習	高校生	21	
61	2005.08.05	～ 2005.08.09	5	関西学院大学理工学部	臨海実習	1回生	145	
62	2005.08.09	～ 2005.08.12	4	滋賀県立大学環境科学部	自然環境特別実習	2回生～ M2	109	
63	2005.08.22	～ 2005.08.23	2	吹田市立南千里中学校	潮だまりの生物	中学教員	20	
64	2005.08.23	～ 2005.08.25	3	奈良女子大学附属中学校	サイエンス「夏の学校」実習	中学生	90	
65	2005.09.01	～ 2005.09.05	5	京都教育大学教育学部	生物学夏期実習Ⅱ	2～4回生	120	
66	2005.09.05	～ 2005.09.10	6	大阪大学理学部	生物学臨海実習	2回生	128	
67	2005.09.13	～ 2005.09.16	4	滋賀大学教育学部	臨海実習	2～3回生	64	
68	2005.10.01	～ 2005.10.03	3	大阪千代田短期大学部	磯観察実習	2回生	42	
69	2005.10.15	～ 2005.10.16	2	放送大学	第2学期面接授業	受講生	40	
70	2005.10.15	～ 2005.10.16	2	立命館宇治高等学校	海洋生物の系統分類と多様性	高校生	60	
71	2005.10.28		1	和歌山県立田辺高等学校	S P Pプログラム	高校生	25	文部科学省 SPP 事業
72	2005.11.24	～ 2005.11.30	7	白浜町立白浜中学校	職業体験学習	中学生	20	
73	2006.03.20	～ 2006.03.23	4	龍谷大学経営学部	環境サイエンスコース 環境フィールドワーク	4回生	16	
			275					4,620

6.4 瀬戸臨海実験所 水族館入場者数

年度	有 料					無料	総入場者数
	個 人		団 体		計		
	大人	小人	大人	小人	名	名	名
15	40,964	7,191	1,193	1,396	50,744	252	50,996
16	43,351	6,963	1,379	1,870	53,563	1,371	54,934
17	46,495	6,471	1,472	1,254	55,692	2,600	58,292
合計	130,810	20,625	4,044	4,520	159,999	4,223	164,222

* 臨海実習等で実験所を利用した学生や教員並びに外来研究者は含まれていない。

6.5 舞鶴水産実験所 船舶運転実績

年度	船 舶 名					
	緑洋丸		白浪丸		ボート、その他	
	航海数	利用人数	航海数	利用人数	航海数	利用人数
15	54	452	0	0	34	75
16	48	362	7	24	19	52
17	45	370	7	21	13	44
合計	147	1,184	14	45	66	171

6.6 瀬戸臨海実験所 船舶運転実績

年度	船舶名	
	ヤンチナⅢ	
	航海数	利用人数
15	134	843
16	137	736
17	146	816
合計	417	2,395

京都大学フィールド科学教育研究センター
自己点検・評価報告書

発行日 平成19年12月
編集 京都大学フィールド科学教育研究センター自己点検・評価委員会
発行 京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麴屋町東入677-2
